

研究紀要

— 2 —

1985・3

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

資	財	財	01-350
		團	6
		保	2(8)
No. 98-	平成 8年 12月 16日		
1366			

研究紀要

第 2 号 目 次 1985年 3 月

- 群集墳研究の現状をめぐる……鹿 田 雄 三…… 1
- 後期小古墳の成立とその背景についての新しい分析——
- 群馬県における浮島式・興津式土器の研究（前）……谷藤保彦・関根慎二……19
- インドネシア先史時代墓制研究序説……坂 井 隆……41
- ローム層中に見られる逆転層の存在とその意味について……岩 崎 泰 一……65
- 板碑に刻まれた紀年銘に関する一考察……新 倉 明 彦……73
-

群集墳研究の現状をめぐって

——後期小古墳の成立とその背景についての新しい分析——

鹿田 雄三

はじめに

本稿は、群集墳研究の研究史をふりかえり古墳研究を集落研究と合体させて、地域研究の中からその歴史性を追求することを目的とする。なお、その分析にあたっては、群馬県の調査事例を中心として扱うものとする。

群馬県の古墳研究は、戦後、尾崎研究室が群馬大学に開設されるに至って本格化する。尾崎喜左雄の指導のもと精力的な発掘、実測調査が実施され、膨大な資料が集積された。⁽¹⁾これが、『横穴式古墳の研究』⁽²⁾に結実する。

もちろん尾崎の古墳研究は、戦前の岩沢正作、福島武雄等の先駆的、科学的調査研究活動、特に火山灰層に注目した分析をふまえ、また尾崎自身県内での最初の仕事である『上毛古墳綜覧』⁽⁴⁾の刊行等の成果をふまえて実施される。

昭和40年代から本格化する開発ラッシュは、これに伴う事前調査から資料の集積を生み出すこととなる。尾崎の指導のもとでは、奈良古墳群⁽⁵⁾等を除けば、1基ないし数基の古墳調査であったが、群集墳の全面調査あるいはこれに近いものへと変化する。玉村町玉村古墳群⁽⁶⁾、高崎市御部入古墳群⁽⁷⁾を皮切りに、榛名町奥原古墳群⁽⁸⁾、高崎市若宮古墳群⁽⁹⁾、赤堀村峯岸山古墳群⁽¹⁰⁾、昭和26年以降尾崎研究室により調査され昭和52・53年全面調査された赤堀村地蔵山古墳群⁽¹¹⁾、伊勢崎市蟹沼東古墳群⁽¹²⁾、前橋市荒砥二之堰古墳群⁽¹³⁾、昭和23年尾崎研究室により鏡手塚古墳を最初として調査され昭和57・58年全面調査された粕川村月田古墳群⁽¹⁵⁾、白藤・新宿古墳群⁽¹⁶⁾等の発掘調査が実施される。

一方、開発にともなう事前調査は、群集墳の調査だけでなく、集落遺跡の大規模な調査も実施され、資料の集積も夥しいものがある。⁽¹⁷⁾さらに特筆すべきことは、榛名山東麓、東南麓一帯と赤城山南麓を中心に火山災害による埋没水田、畠の発見が相つぎ、その分析成果も出つつある。⁽¹⁸⁾

こうした群集墳、集落の調査と生産基盤である水田、畠の資料集積は、古墳時代研究に新しい方法論が提起されねばならない事をせまっている。従来、群集墳分析、集落分析は、個々に行なわれる傾向のあった事は否めない。火山県群馬の地域特性を利用した火山災害による埋没田畠の検出は、古墳と集落を結合した分析を可能にする状況を生み出している。⁽¹⁹⁾群集墳研究もまた、生産基盤である集落との関連で分析を行なうことが可能であり、また必要とされる状況であると言えよう。

筆者は、昭和56～58年の大間々扇状地の分布調査⁽²⁰⁾と昭和57～58年に実施された勢多郡新里村詳

細遺跡分布調査⁽²¹⁾に参加する機会があり、この中で古墳の分布を集落と結びつけた分析を試みた。本稿は、これらの成果をふまえ、全国的な群集墳研究史をふりかえりながら、遺跡分布調査を根拠にした古墳分布と集落分布を結びつけた分析を研究史的立場づけの中で行ない、あわせて地域における群集墳研究の今後の研究方向を模索しようとするものである。

なお、研究史の分析にあたっては、筆者の管見に触れた内の主要なものを取りあげている。本稿で扱う群集墳は、広瀬和雄の群集墳定義⁽²²⁾を踏襲し、「小古墳が限定された墓域の中に密集した状態で一定期間継続して構築された結果の集合体」を指すものとし、また研究史で用いる「古墳群」も断りのない限り群集墳を指すものとする。3章において「群集する古墳」という表現を用いるが、群集墳と同義語として用いる。他方、「散在する古墳」は、古墳が群集せず、2～3基のゆるいまとまりをもって、あるいは単独で存在する小古墳を指すものとする。

1. 群集墳研究

栗山一夫、藤森栄一と地域研究 栗山は、昭和9年頃、兵庫県加古川流域における古墳群の踏査⁽²³⁾を実施する。その問題意識は、古墳の分布および築造状況ないし遺物の研究によって加古川流域における古代社会末期の状況を解明することにより「全日本群島」の分析にせまろうとする意欲的なものであった。古墳の分析を行なうにあたって、当時の学界を「資料蒐集の過大評価と素朴な実験主義」と批判し、科学的方法論の確立を提起する。また、その研究にあたっては問題意識を共有する集団的、組織的研究であらねばならないと訴える。そして、東幡古墳調査委員会を設立し調査を進めた。その結果、古墳を一定の生産関係に基礎を持つ社会の政治的権力の表現であると規定する。故に、社会の政治的、経済的動向の基礎の上に古墳を見るべきであると結論している。

栗山の問題意識、方法論は、加古川流域という地域の中にフィールドを設けてその展開を試みているなど、古墳群の調査としてだけでなく、加古川流域という地域の中に古墳群を位置づけて理解しようとする画期的なものであった。一つの地域の徹底した分析を行ない、この中から歴史を展望しようとする方向は、藤森栄一においても展開される。

藤森は、昭和14年、18年「考古学上よりしたる古墳墓立地の観方、古墳群の特性について——信濃諏訪地方古墳の地域的研究 I、II」⁽²⁴⁾において古墳の地域研究を展開する。「上代文化」の分析を古墳群と集落の立地を総合的に理解する中でつかもうとする問題意識をもって、長野県諏訪湖西南辺という地域に調査対象を設定する。そして古墳の分布と集落の分布を踏査と地形、地質の分析によって明らかにし、古墳群とこれに伴う集落を分析し、さらに古墳の副葬品から各々古墳群の個性を読みとろうとするものであった。藤森は、研究方向を次の様に語っている。「本稿の意義は、墳墓、聚落の両立地を総合してその意義を立体的に組み立てたことにある。……古墳の研究は、今までの先入主義を打破することによってのみ、凡ゆる地域においてこの方向を更に更に素晴らしく発展せしむるであろう」と。藤森の問題意識、そして古墳と集落を結びつける方法とし

て分布調査を提示した点は、現在においてもその意義を失っていない。

栗山、藤森の研究は、それぞれ加古川流域・諏訪湖西南という地域を対象としていたが、同様の分析方法を用いて分析対象地域を拡大しつつ、この中に古代社会の解明という遠大な展望を持っていた。しかし両者の評価は、博物館と大学中心の学問世界の中で特段に行なわれるでもなく、太平洋戦争の動きの中にうずもれる結果となる。戦後、永峯光一・桐原 健により甲府盆地・信濃善光寺平等における古墳と集落の分析が、藤森栄一と同様の問題意識と方法を用いて行な⁽²⁵⁾れるが、その後継続したものとはならない。

近藤義郎、西嶋定生と群集墳の理論的位置づけの定式化 戦後、天皇制の呪縛から解放された考古学と古代史は活発な展開を見せる。こうした中で近藤は、群集墳の出現を、当時古代史の学界で取り組まれていた共同体論の展開と結びつけ、共同体の階級分化の中に位置づけようとした。岡山県津山盆地における古墳分布調査と一部古墳の発掘調査によって、6世紀以降の爆発的古墳の増大が、生産力の発展による共同体の階級分解の進行の中から生まれた家父長制家族によるものであると結論⁽²⁶⁾した。従来の古墳の理解から脱するとともに、群集墳の出現を、その社会的基盤の変化の中に位置づける事によって、後期古墳の研究が、やがて「古墳時代史、歴史の解明」へつながる方向をしめしたものであった。近藤の提起した家父長制家族墓論は、その後本格化する群集墳研究および、集落研究分析の基底をなすものとして定着する。

しかし、家父長制家族墓論の深化と同理論による群集墳の分析は、具体的な調査事例をふまえてその後継続されたとは言えず現在においてもなお、その検証は、残されている課題であると言わねばならない。理論が先行し、具体的分析の展開が少ない結果によっている。

近藤とならんで戦後の古墳研究に大きな理論的影響を与えたのは、西嶋定生である。西嶋は、古代東アジアの政治体制を中国の専制国家を中心とした冊封体制として捉え、この日本における展開を姓体制であると考えた。古墳の存在の背後に姓体制という一元的契機を考え、大和政権との政治的関係を媒介とした場合⁽²⁷⁾にのみ、古墳は営造されるとした。戦後、飛躍的に発展した古墳研究であったが、資料の集積がなされる一方、その明解な解釈には至っていなかった。西嶋理論は、こうした状況を一気に止揚し、古墳研究に明解な方向をしめしたと言える。特に前方後円墳の畿内から全国への伝播過程を姓体制の発展、拡大の中に位置づけようとした理論は首尾一貫しており、しかも、群集墳の発生をも姓体制の拡充の中に位置づける方向をしめした業績は、現在においてもその有効性を失っていない。考古学の成果を援用しつつ、文献の分析の中から導き出した理論に、考古の側から検証を行なう事がその後の課題であった。

近藤、西嶋理論は、一方は群集墳研究の、他方は前方後円墳研究の理論的指針として定着している。西嶋の側から、群集墳出現の背景を家父長制家族の出現とする近藤の理解を、古代における階級関係は、身分制あるいは共同体的関係を媒介にするという批判も行なわれているが、両者の間に論争は展開されていない。むしろ両者が相互補完的に古墳の分析に援用されてきたと言える。

群集墳分析の展開 「後期古墳の研究」⁽²⁸⁾が発表され、昭和30年代中頃の群集墳研究の成果が

まとめられる。これは、昭和35年に行なわれた「後期古墳をめぐるシンポジウム」をまとめたものでこれをふまえた研究が展開されるとともに、開発の拡大による群集墳調査事例の増加とあわせて群集墳研究は、その後、活況を呈することになる。以後展開される群集墳研究を便宜上次の三つの方向性に分類して検討を進める。

群集墳分析の展開 1 群集墳内の分析 水野正好は、群集墳の分析に新しい方法を提起する。群集墳がいくつかの支群あるいは単位群に分割できる事は、従来より指摘されていたが、この支群、単位群の分析に墓道と単複次葬の分類を導入する。滋賀県甲賀郡狐栗古墳群を分析事例として群集墳の支群分析を試みる⁽²⁹⁾。単次葬より、複次葬を行なう古墳が先行するものとして支群内を時期区分し、この支群と集落を結びつける墓道を幹線路、支線路に分類し、復元想定して支群の分析を行なった。

石野博信は、宝塚市雲雀山東尾根支群を分析している⁽³⁰⁾。石室の構築法、分布の違いから23基の古墳を四つの単位集団に分類して支群をわけている。

広瀬和雄も石野と同様の手法を用い、大阪府南河内郡一須賀古墳群のB支群を分析し、10基の古墳を3小支群に分類している⁽³¹⁾。

また、石野博信、新納泉は、群集墳に副葬される刀子、刀、鏃、農工具の出土から群集墳内の階層性を導き出そうと試みている⁽³²⁾。

石野と水野は、雲雀山東尾根支群という群集墳の同一支群を分析事例に取りあげている⁽³³⁾が、両者の結論は全く異なったものになっている。ここで両者の当否を問うものではないが、群集墳をグルーピングして支群、単位群に分割する方法とその分析結果は、分析者によって異なるものが多い。群集墳のグルーピングの方法は、まだ確立されているとは言えない。この事から、グルーピングによって得られる結果によって、小支群、単位群の構成や集落に占める階層の位置等の分析をする事にも慎重である必要が生じてくる。

群集墳分析の展開 2 群集墳分布の分析 群集墳分布の本格的分析は、白石太一郎によって行なわれる⁽³⁴⁾。白石の問題意識は、西嶋理論を考古学の側から検証を行なう事にあった。高安千塚、平尾山千塚という畿内でも屈指の大群集墳に着目し、詳細な古墳分布調査、石室実測を積みあげ時期別の分布、変遷、群構造の把握を試みている。そして、高安、平尾山千塚のような大群集墳の成立を、共同体の首長、有力成員と大豪族との擬制的同族関係の成立と見て西嶋理論を追証している。以後同様の問題意識と方法をもって、畿内の大型群集墳の分析を行なっている⁽³⁵⁾。大群集墳にあっても、その造墓期間、量、石室の形態等は同一ではなく、極めて個性的である事が指摘されている。群集墳は、各々個性がある事に注目している。

広瀬和雄は、群集墳研究史を整理しながら、畿内の群集墳がいかなる政治過程を表わしているのかの分析を試みる⁽³⁶⁾。畿内を中心とした群集墳の分析から、群集墳を特質づけるものとして「墓域」が設定され、この墓域が大和政権から与えられることを通して大和政権の支配機構の中に家父長層が隷属していく理解の方向をしめしている。森浩一が注目してきた群集墳の墓域規制の理

(37)

解を一步進めたものになっている。また、中小群集墳と100基前後の大型群集墳の表出する政治形態は、おのずと異なる事を展望した。

辰己和弘は、静岡県中部における群集墳の分布分析や発掘調査の中から密集型群集墳、散在型群集墳、独立型と後期古墳を三分類している⁽³⁸⁾。密集型は造墓期間が短く、かつ丘陵斜面に墓域の規制を行なっている事、一方、散在型は密集型より造墓期間は長く、墓域も小支丘を広範囲に占有している事がその特徴であるとした。そして、散在型の群集墳に優位性を認めている。密集型の群集墳は、6世紀後半の新興勢力のもので、散在型の群集墳との対立抗争を避けるため、新たな墓域を設定し、この中に厳しい規制を加えながら新興勢力を古代国家の枠組の中にとらえようとする支配者層の姿を現わすものであると結論している。静岡中部地域の後期古墳分布をたんねんに分析した結論は、その政治的理解の方向は置くとして、地域の後期古墳分布の在り方をしめすものとして重要である。

白石、広瀬、辰己の分析によって、群集墳各々には個性があり、その規模、内容、質においても異なっている事が明確となった。また、畿内の大型群集墳が他地域のものと比較すると異なる存在である事の指摘は、群集墳を理解する上で重要である。群集墳がその成立する地域の諸条件を反映して各地で個性的な様相を示している事は、三者の分析に代表される各地の群集墳研究によって明らかにし得た点である。この群集墳の個性分析にあたっては、白石太一郎、河上邦彦による奈良県葛城石光山古墳群⁽³⁹⁾、関川尚功による奈良県桜井市外鎌山北麓古墳群⁽⁴⁰⁾、堀江門也、広瀬和雄による大阪府南河内郡一須賀古墳群⁽⁴¹⁾、柳沢一男、柳岡純孝、山崎純男による福岡県福岡市片江古墳群⁽⁴²⁾、広石古墳群⁽⁴³⁾等の分析成果がある。

一方、後期古墳を含め古墳分布を水系によって理解しようとする分析方法がある。下記にあげる二者とも、首長墓の支配領域、変遷を水系の中に把える事を主な目的としているため、群集墳の分析としてとりあげることは、やや論点がずれるが、群集墳をも水系の中に包摂する方向をもっている。梅沢重昭は、群馬における古墳分布を県内を貫流する主要な河川を中心軸にすえて概観し、その変遷を分析している⁽⁴⁴⁾。各々の水系に隣接する古墳が、上、中、下流域に分類されながら概観されている。古墳時代が水田農耕を基盤としている事は明らかであり、それ故に水系を中心軸に据えて古墳分布を概観する事は、当を得ている方法である。しかし、大きな河川の水系と古墳の関係は、隣接するだけで結びつけられない。もちろん梅沢が、県内の古墳を網羅的に把握する方法として水系をとりあげている事は理解できるが、何故水系で分類できるのかの説明がない点で誤解を生みやすい。その水系が当時の農耕社会にあつてどの様な役割をはたしたのか、利用のされ方をしたのかの分析が必要不可欠となっている。群馬県内で発掘された水田の取水方法を見る限りでは、梅沢の言う水系と古墳分布⁽⁴⁵⁾の因果関係の理解に限界のある事が判明している。

甘粕 健も水系を中心軸に据えて古墳の分布を理解しようとしている⁽⁴⁶⁾。甘粕は、直線距離にして3～10kmの範囲に分布する数群の単位群集墳の集合体が「地域群」として把えられ、この内には

「水系群」として扱えられる群集墳がある事を述べている。また、群集墳の造墓開始時期とその後の展開を三類型に分類している。群馬県内では、吾妻川と利根川をとりあげて分析を行なっている。吾妻川上流（中之条町、吾妻町）を三水系に区分して扱え、これを統括する首長墓に各々の中核的古墳をあてている。利根川上流域（沼田市以北）も同様の水系群に分類して扱ようとしている。各々の古墳群の立地する位置から河川を中心軸にして古墳分布を理解する事は可能であるが、問題点も生じてくる。梅沢の分析で触れた事が、そのまま甘粕にもあてはまる。すなわち梅沢、甘粕の言う主要な河川がどのように政治的に利用され、各々の古墳群の成立とどのようにかわるのかの分析なくしては、水系と古墳群を結びつけられない。例えば、吾妻川上流域を吾妻川を通して支配してもなんの意味もない。吾妻川は、農業生産を念頭におけば、排水の機能しかもたない河川である。古墳群を水系とからめて理解するには、河川のもつ機能、就中生産機能の分析を政治レベルで行なっていく事が不可欠になってくる。支配されるべき河川は、実際の農耕に必要な用水を供給するための意外と小さい河川なのである。

各地における群集墳分布の分析は、群集墳各々が個性をもっており、各地における多様な展開がある事を明らかにしている。しかし、群集墳の個性的な在り方から群集墳総体を語り得るまでに、群集墳の個性抽出が集約された段階には至っていない。各地における群集墳分析作業がさらに継続されねばならない段階である。群集墳の個性とは、政治支配という領域を念頭におきつつも、これを生み出した地域の個性を反映したものである。この地域性の分析なくして、群集墳の個性が何に起因するかの分析はなし得ない。新しい資料の集積による群集墳分布の分析、および発掘調査によって群集墳の個性の分析を行なう一方、この分析を群集墳の位置する地域の分析の中に位置づけていく方向がとられねばならない段階になったと言える。

群集墳分析の展開3 群集墳と集落の分析 前、中期古墳と古墳の立地する位置からその支配領域を推定し、この支配領域の中にある発掘された集落、あるいは遺跡とを結びつけた分析は、従来から行なわれてきた。近藤義郎は、岡山県久米郡柵原町月の輪古墳の調査報告にあたり、柵原町周辺町村における弥生中期後葉以降の遺跡分布の中に月の輪古墳を位置づけて分析している⁽⁴⁷⁾。吉井川、吉野川の沖積地開発に係わって「農業共同体的結合」の中から「政治的統一体」形成の中に月の輪古墳を位置づけている。岩崎卓也は、長野県善光寺平南部地域を分析対象地域としてとりあげている⁽⁴⁸⁾。弥生以降の集落地を遺跡分布としておさえ、この分布と古墳の分布を対応させて古墳変遷の理解を試みようとするが、大和政権との結びつきの中で理解する方向を示したにとどまっている。

甘粕 健は、神奈川県横浜市稲荷前古墳群を中心に谷本川流域の遺跡分布と古墳分布の関係を分析⁽⁴⁹⁾している。その問題意識は、首長墓の変遷を古墳群の分布、遺跡分布と対応させて分析しようとするものであった。論点の中心が首長墓の変遷、政治構造の分析に力点が置かれているが、遺跡の立地から生産基盤の推定を行なうなど重要な指摘が見られる。一方、群集墳、横穴群と集落遺跡の分布関係には、紙数をさいていない。また一地域の中で前方後円墳を中心に首長墓を考え

る時、何故首長墓がその地点に立地するのかの分析、その位置が地域の中ではたす役割、河川との関係で言えば、河川がどのような利用のされ方をするのかの分析が不可欠となってくる。稲荷前古墳群がなぜこの地点に築造されたのかの分析が、周辺古墳群、横穴群の分布、そしてそれらの存立基盤となる集落遺跡の分布の中から分析されねばならないと考える。こうした作業は、地域の中において古墳群、集落の存在意味を明らかにしていく事であり、結果として地域を分析していく事になる。古墳群と集落の分析事例は少なく、歴史性追求のための根本的課題が取り組まれてこなかったことにもなる。いいかえれば、政治支配を語りながら、その本質メカニズムに対して全く分析が行なわれず今日にいたったことになる。古墳の成立背景には、生産を基盤とする集落のあり方に大きな意味があり、古墳と集落を合体させた分析が、古墳研究の基礎にすえられねばならないと言えよう。

群集墳の理論的位置づけの見直し 近藤、西嶋理論が提起されて以来、群集墳の分析結果の解釈は、両者のいずれか、あるいは両者を折衷したものの範中から抜け出る事は少なかった。一方高度経済成長は、全国に開発ラッシュを生み出し大規模な行政発掘を招来した。膨大な資料の蓄積が、今まで判明していなかった新しい事実を続出させている。1960年代の群集墳理解では、その築造開始は5世紀末から6世紀に始まる事、一部を除きその多くが横穴式石室を採用している事などが一般化していた。こうした理解は、周溝墓が古墳時代前期においてもさかんに造られている事、⁽⁵⁰⁾墳丘をもった周溝墓である墳丘墓、⁽⁵¹⁾台状墓の発見、さらには方墳群の検出が行なわれる事によって大きな変更をせまられる事になる。周溝墓と小古墳を弁別するに困難な事態が現われていると言える。また、周溝墓から小古墳への連続が考えられ、結果として群集墳につながることを窺わせる事例も調査されてきている。⁽⁵³⁾群馬県内でも、白藤・新宿古墳群の調査が周溝墓から小古墳への発展が窺える事例となっている。⁽⁵⁴⁾

石部正志は、こうした事例をうけて群集墳の理論的位置づけの見直しに取り組んでいる。石部は古墳時代前期にまでさかのぼり得る群集小古墳に注目し、6、7世紀の後期群集墳に対し、「古式群集墳」を提唱している。⁽⁵⁵⁾弥生前期以来の方形（周溝）墓群→古墳時代前期以来の古式群集墳→古墳時代後期の横穴式石室墳、横穴で形成される後期群集墳という前方後円墳に代表される大型古墳（首長墓）とは系譜の異なる、弥生以来の一貫した系譜を考えている。

都出比呂志も方形周溝墓の系譜を引く小型墳丘墓に着目し、近藤、西嶋理論の見直しを提起している。⁽⁵⁶⁾姓体制という古墳時代に入って成立した体制をもってしては、弥生以来の系譜をもつと考えられる小墳丘墓の理解は困難となる。また家父長制家族の出現をもって群集墳の成立を考えた近藤理論の見直しも必要とされてくると指摘している。

方形周溝墓から小古墳への展開を念頭におきつつ、大型古墳ともからめながら、古墳とは何か、群集墳とは何かにせまっていく事が今後の課題である。

一方、後期小古墳の研究は、群集墳研究と同義語として扱われてきた。3章新里村詳細遺跡分布調査で触れる「群集せず、散在する後期小古墳」の存在の注目とその分析は、従来等閑視され

てきた。古墳と集落を合体させた分析の結果では、散在する古墳が群集墳と同様に重要な存在である事が判明している。散在する古墳の分析から群集墳の解明にせまろうとするのが筆者の目ざす方向である。

2. 群集墳研究の新しい方向

群集墳の多様な研究を群集墳研究史をふりかえりながら見てきたが、こうした研究の蓄積にもかかわらず、群集墳とは何かという基本的な問いに明確な解答を出す段階に至っていない事も明らかである。現段階でつかみ得る群集墳の様相を列記すると下記ようになる。

- ▷群集墳は、弥生時代以降の方形周溝墓の系譜を引く可能性が高いが、なお検討を要する段階である。
- ▷群集墳は、5世紀代と6世紀代にその画期が見られる。この内6世紀代以降のものが圧倒的に多い。7世紀後半に造墓活動は終焉をとげるが、8世紀まで継続される地方がある。造墓開始の時期もこの範囲の中で多様である。
- ▷群集墳には、数百基の大型群集墳から、数基からなるものまでの規模があり、この内、前方後円墳を含むものと含まないものがある。
- ▷群集墳は、各々墓域をもち、この中に限定して古墳を構築する。その際、新しい古墳が古い古墳に近接する結果になる時、新しい古墳は古い古墳を破壊せず、古い古墳を避けて構築する。その結果、周堀が変形、完周しない事がある。なお、墓域の広狭も様々である。
- ▷群集墳は、いくつかの支群によって構成されている。
- ▷群集墳は、小円墳を主体に形成されているが、その墳丘形態、規模も多様である。
- ▷群集墳を構成する各々の古墳は、主体部の規模、形態、埋葬される人数、副葬品の多寡、内容等もいくつかの階梯に分類できるが、多様である。
- ▷後期群集墳には、横穴式石室を主体とするもの、横穴を主体とするもの、横穴式石室と横穴の双方によって形成されるもの、また、横穴式石室と竪穴式石槨の双方を主体部にしているものがある。
- ▷群集墳の立地は、山上、丘陵上、斜面上、平地等、多様である。
- ▷群集しない小古墳も存在している。

以上、各々の群集墳は、こうした諸点をあわせ持ち、また政治領域に規定されながら、各々の地に展開する事になる。群集墳は、どれ一つとっても同一のものではなく、その時期、群を構成する古墳の量、墓域の広狭、地形等に規定され、その在り方は千差万別である。各々の地方、地域で大まかな傾向をもつが同一である事はない。群集墳は、こうした意味において個性的である事、そしてこの個性は、群集墳の成立する地域の個性、すなわち生産活動を中心軸にすえた地域性である事、ゆえに、群集墳を分析するには、群集墳内部の分析と同時に、群集墳の成立過程を地域分析の中に位置づけねばならない事をすでに述べてきた。

「量の豊富さのみから導き出せる新知見だけでは、新しい研究の展望は生まれて来ない」との行政発掘に麻痺した考古学界に対する痛烈な批判が能登 健⁽⁵⁷⁾によってなされた。そして、能登や石坂茂、徳江秀夫、小島敦子によって新しい集落論が提起されている。ここでは従来の「集落」を居住域と生産域に分解し、墓域とあわせた新しい分析法が提示されている。永い間のいわゆる「集落論」の呪縛からようやく解きはなされたことになる。ここでは、群集墳をこの「居住域」、「生産域」、「墓域」の三分解による新しい集落論の中に位置づけてその分析を行なうことにする。

群集墳の分析を地域研究の中に位置づける方法として、地域における遺跡分布調査によってその概要を把握しようとする事にする。栗山一夫、藤森栄一が目ざした群集墳の地域研究が、再度取り組まれねばならない方向である。遺跡分布調査によって得られる古墳の分布と古墳時代集落の分布を結合させた分析は、地域の古墳時代を時間的にのみならず、空間的に把握する方向をも可能にする。このことは同時に考古学の分野で把え得る農耕社会の発展過程の具体的な分析作業に通じるものであり、弥生時代から平安時代までの農耕社会の変遷を重層的に分析することも可能になってくる。考古学で地域を時間的、空間的に把え得る方法の基礎的作業が分布調査である。

群馬県下での大規模行政調査によって、水田、畠を中心とした生産遺構の検出が相次いでいる。これによって古墳時代前期の水田、畠、古墳時代後期の水田、畠、平安時代の水田、畠等が続々と調査され、その比較研究から水田農耕技術自体の変遷をも分析できる段階に達している。そしてこの生産遺構の所在する沖積地、台地縁辺の周辺では、居住域としての「集落」の調査も相次いでいる。そして居住域の所在する位置に近接した沖積地にその集落の生産遺構を想定する事が可能になってきた。遺跡分布調査によって得られる古墳、集落の分布からその生産遺構の存在を想定することができる。このことによって、居住域、生産域、墓域という農耕社会分析に不可欠な要素を各時代の空間的拡がりと同時に時間的変遷の中に位置づけて分析できることになる。

こうした地域研究の中に群集墳研究を位置づける時、従来の群集墳研究では行ない得なかった分析が可能となり、そこから新しい群集墳研究の指摘が生まれることにもなる。

3. 新里村詳細遺跡分布調査

赤城山麓に位置する新里村では昭和57年・58年度の2カ年にわたって遺跡分布調査が実施され、その報告書も『新里村の遺跡』として既に刊行されている。村内の行政的要請の一方、次の様な問題意識をもって県内研究者による集団組織により分布調査を行なった。その方法は内田憲治によって村内地域における遺跡分布のあり方を把握し、発掘された遺跡をも含め、総合的かつ歴史的な環境の考古学的な復元を目的とされ、ここでは従来集落は、居住域と同義語として扱われてきたが、集落を人間生活の総体として把え、住居の集合体としての「居住域」、水田農耕を中心とした「生産域」、墳墓の集中する「墓域」の三分類をもって農耕集落の分析を試みている。遺跡分布調査のうちの本稿に関する概要は、以下の通りである。

遺跡分布調査の方法 分布調査は、村内を悉皆的に踏査する事を目的にして、遺跡分布の確

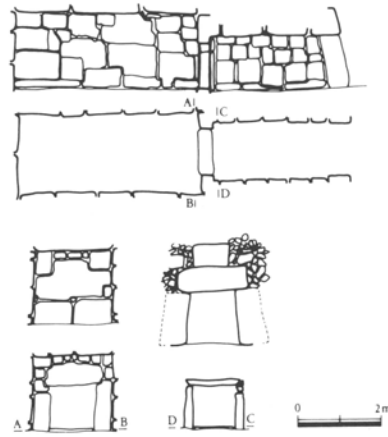


図2 中塚古墳石室（『新里村誌』より）
400



地区名	総基数	埴輪をもつ基数
小林	15	5
野	5	2
武井	11	2
新川	13	0
山上	14	1
鶴ヶ谷	5	1
関	2	0
高泉	1	0
大久保	1	0
奥沢	1	0

↑ 200 m 以下
200 m 以上 ↓

埴輪の分布と標高

凡例
● 古墳
□ 古墳時代後期の遺跡

図1 新里村の遺跡分布（古墳時代後期）（『新里村の遺跡』より）

認と地形観察から旧地形の復元を試みた。確認された遺跡は、でき得る限り細分型式を用いて時期区分を行なった。しかし、古墳、奈良、平安時代を土器細片から細別時期決定を行なう事は困難であるので、古墳時代前期（石田川期）、古墳時代後期（鬼高期）、奈良平安時代（真間、国分期）を目安として三時期区分を行なった。こうして得られた資料に既存の分布調査の成果を加え、さらに発掘調査された成果を検証の方法として加えて分析した。

位置と地形 新里村は、前橋市の北東16kmにあり、赤城山東南麓に位置している。村の最北端は赤城山の一峯長七郎山頂に近く標高1,466mである。標高500mまでの間は急峻な山地帯となっており、小河川の侵食した深い谷がきざまれている。標高500mから300mの間は、やや緩傾斜面地帯となり、この地区から開析谷が発達し、沖積地が開け始まる。標高300mから200mまでは丘陵性台地が多く、200m以下は次第に平坦となり、沖積地が広がるなかに独立丘が点在する地形となっている。南端の標高は、132mである。赤城山山頂付近からその裾野部に至るまでの間約14kmの南北に細長い村である。

分布調査結果 農耕集落の分析は、能登、小島によって「弥生から平安時代の遺跡分布」としてまとめられ、墓域の分析は古墳の分析を中心に「古墳の分布」として筆者がまとめた。

第一段階 農耕集落の成立と定着期（3世紀末～4世紀）初期農耕集落は、自然小河川から容易に水田用水を供給する事ができ、水田の造成は、労働力が少なく、広域に開田できる土地を選んで成立する。比較的広い沖積地のある村内南端がこれにあたる。初期農耕集落の成立した地域は、古墳時代後期に居住域が拡大し、平安時代にまで連続する。台地上には、群集する古墳を形成する。この様な集落の発展過程をしめす遺跡を**伝統集落**としている。

第二段階 水田耕作の飛躍的拡大期（5世紀末～6、7世紀）古墳時代後期に入ると新しい

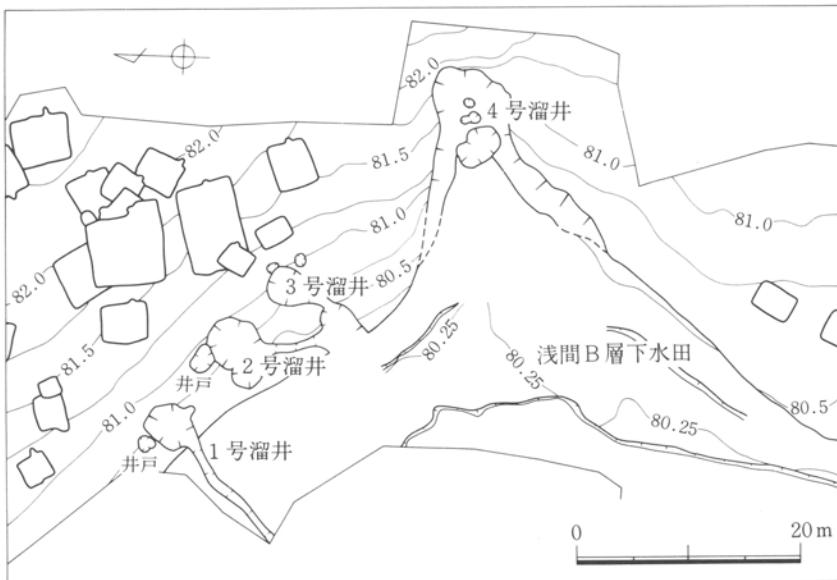


図3 天之宮遺跡の溜井と水田（「赤城山南麓における遺跡群研究」より）

地点に居住域が成立する。この新開地の立地状況は水田適土があるにもかかわらず、用水の確保が困難な地点である事が判明している。こうした地は、用水の確保が可能であれば、一気に開田される。赤城山南麓の荒砥地域にある天之宮遺跡では、⁽⁵⁹⁾「溜井」(図3)が発見され、溜井掘削による用水確保という農耕技術の進展によって新開地が成立している事が解明されている。また大間々扇状地末端の湧水は、現在も利用されているが、この中には、古墳時代以来の溜井を前身とするものも含まれている事が指摘されている。⁽⁶⁰⁾新里村においても同種の技術を用いて、新開地が成立したと考えられる。一度成立した新開地は、伝統集落と同様に平安時代に至るまで集落は発展、拡大する。しかし、この新開地に伴う古墳は、群集した古墳を形成せず散在している。2～3基をもって散在するものと、単独で存在しているものなど伝統地の古墳分布とは好対照をな

している。古墳時代後期に居住域が成立し、欠水性の沖積地に生産域を求め、散在する古墳をとともなう集落を**第一次新開集落**と呼ぶ。

第三段階 冷水、過水地帯への集落進出期(8世紀以降) 古墳時代後期の水田開発は、開発可耕地の殆んどに着手され、残るのは樹枝状にのびた開析谷の先端部に残った沖積地のみとなる。この地は、湧水点に接した谷頭が多く冷水が湧出しこのため土地はやせている。奈良平安時代に成立した居住域は、こうした不良水田地帯に冷水のぬるめ施設(通称「ひえ堀」)等を設けて進出している。こうした居住域は、小規模な遺跡が点在する在り方をしめす。奈良平安時代にあって水田耕作不良地へ進出した集落を**第二次新開集落**と呼ぶ。

こうした水田農耕を中心にしてその変遷を把握できる集落を「**里棲み集落**」として設定した。

能登はこの考え方を発展させ、平安時代以降に群馬県西部県境の高山地帯に成立する畠作を中心とした集落を「**山棲み集落**」⁽⁶¹⁾として設定する。里棲み集落の人々の世界とは離れた深山、奥山にも山棲み集落が成立し、人々の新しい生活が展開される。里棲み、山棲み集落論は、民衆の農耕社会における政治に対するあり方を解明する新しい方法論として注目されてきている。遺跡分布調査および発掘調査によって得られた資料の分析を基礎

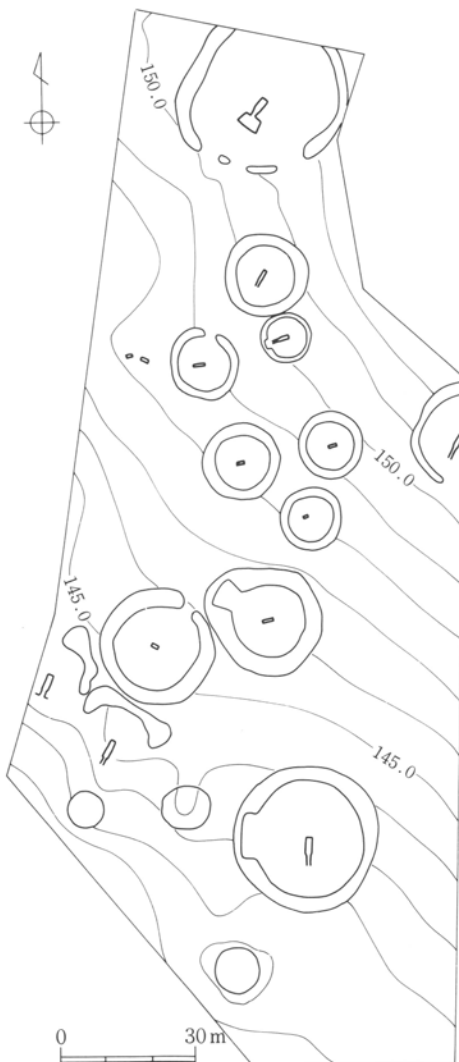
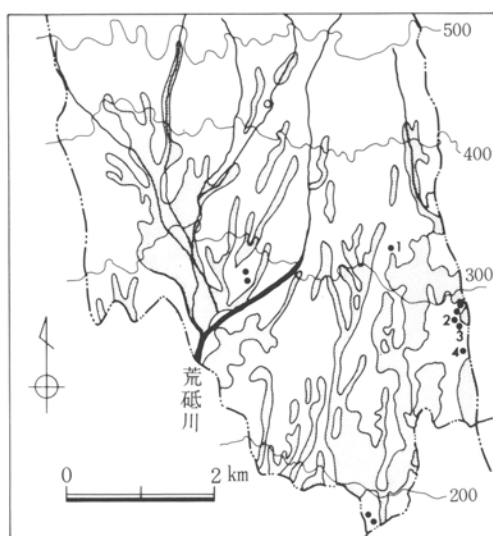


図4 赤堀村峯岸山古墳群(部分)
(『峯岸山の古墳2』より編図)

にした地域研究の成果と言えよう。

群集する古墳と散在する古墳 古墳の分布をその居住域、生産域と関連づけて分析した成果をまとめると次のようになる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて居住域、生産域を成立させた伝統集落に伴う古墳は、群集した古墳を形成する。新里村の群集墳は、南接する佐波郡赤堀村にその主体をおく峯岸山古墳群⁽⁶²⁾(図4)が該当し、この北縁部にあたっている。峯岸山古墳群は、前方後円墳6基を含む総数60基、5世紀後半に築造開始され、6世紀後半以降その盛期をもっている赤城山南麓の代表的群集墳である。一方、散在する古墳は、図1のように標高200m周辺に2～3基のまとまりをもつものや、1基ずつ散在する在り方をしめしている。新里村内の散在する古墳の調査例は一基のみと少ない。⁽⁶³⁾天神山古墳が該当し、横穴式石室の形態、埴輪等から6世紀後半の時期が与えられている。また埴輪を伴う古墳とそうでない古墳の分布から6世紀後半までの時期が考えられる古墳と、埴輪消滅以降の時期、7世紀以降の時期が考えられる古墳の二つに散在する古墳を分ける事ができた。散在する古墳は、第一次新開集落の成立した地点に点々と築造され、第一次新開集落の開発の様子をよくあらわしている。第一次新開集落成立の時期差によって散在する古墳成立にも時期差がある事が窺える。伝統集落は、地域開発の拠点として継続し、群集する古墳をその墓域とする。散在する古墳は第一次新開集落の成立にともない、居住域、生産域に近接して成立する。

散在する古墳の分布は、周辺の市町村においても確認されてきている。赤城山南麓では、新里村に近い地形をなしている宮城村、大胡町、粕川村の一部地域において、また新里村に東接する大間々町を扇頂部とする大間々扇状地の一部地域において、大間々町に東接する桐生市においても散在する古墳が存在し、居住域の分布、生産域の様相も新里村の第一次新開集落と同様である事が判明しつつあり、その成果



1. 白山古墳 2. 新山II号墳
3. 新山I号墳 4. 古屋敷古墳

図5 宮城村の古墳分布
(『宮城村の古墳』より編図)

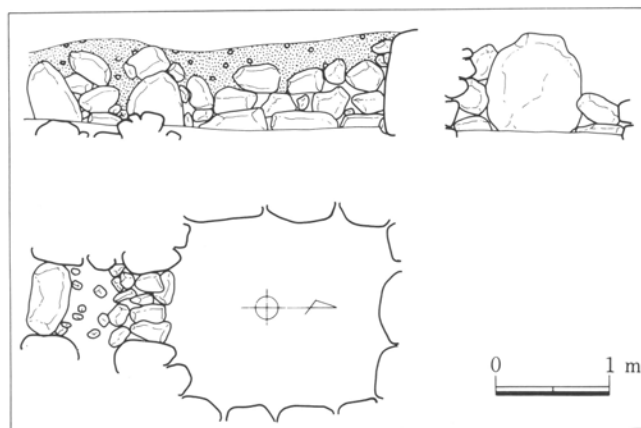
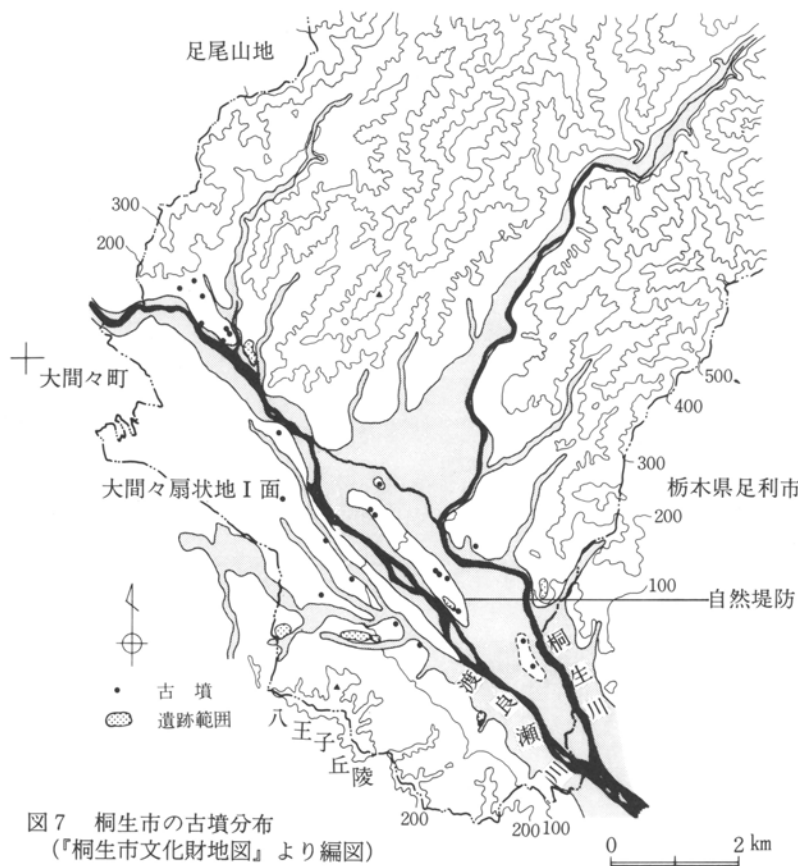


図6 新山II号古墳石室 (『群馬県史』資料編3より)

の公表も近い。散在する古墳の事例を新里村に西接する宮城村に見ると図5のような分布となる。総数10基の古墳が村内の南半分に散在し、標高300m付近以下の地域に分布する。片並木遺跡、一本木遺跡における住居跡の調査例を含め、現在確認されている土師器の散布地が10地点に見られるが、今後発見されるものを含めても遺跡は少ない。古墳の発掘調査は、白山古墳、新山Ⅰ・Ⅱ号墳、古屋敷古墳の4基について実施されている。白山古墳からは、和銅開珎、蕨手刀、佐波理鏡、正倉院御物に見られる飛燕型鉄鏃が出土している。新山Ⅱ号墳からも白山古墳と同類の飛燕型鉄鏃が発見された。石室は玄門をもち（白山古墳は破壊され不明）、胴張り（古屋敷古墳は不明）を有する横穴式両袖型石室（図6）で、本県終末期の古墳である。いずれの古墳も8世紀初頭の時期が考えられている。

群集する古墳と散在する古墳という在り方の違いは、古墳を生み出した集落の開発の時期差による事は明らかである。伝統集落に伴う古墳が、群集墳という存在形態をしめし、これは群集墳研究の成果である限定された墓域がある事を示している。散在する古墳は、集落に近接して墓域を設定しているが、その在り方は限定された墓域を持っているとは考えにくい。伝統集落がもつ伝統性という要因が政治的要因も含めて限定された墓域に結実するとすれば、第一次新開集落は、伝統性が希薄である故に限定された墓域を持たない事にもなる。伝統集落と第一次新開集落は、

その開発の時期差が、開発の姿の違いとなって現われる事を窺わせている。一方、桐生市における分(66)析を見ると、群集、散在という古墳の在り方の分析にあたっては、時期差の問題に加えて、集落の安定性、あるいは生産力の問題も加えていかねばならない事をしめしている。桐生の伝統地は、湧水、沢水や小河川の形成した狭い傾斜のある小規模な沖積地に望んだ台地上に成立する。弥生中期にも集落は、同一地点に成立するが古墳時代前期には継続しない。古墳時



代後期に入っても集落の拡大は小さい。奈良平安時代に至って漸く周辺に拡大している。その結果、古墳の築造も6世紀後半に入っているものが大半で、群集せず、散在している。前方後円墳も可能性のある1基を除くと存在しない。⁽⁶⁷⁾ 桐生の伝統集落の望む沖積地のあり方は、新里村の第一次新開集落のものに近い。伝統集落であっても良好な生産域の得られない集落の古墳は散在し、結果として第一次新開集落の古墳と同じ散在というあり方を示す。桐生の第一次新開集落にともなう古墳も散在しているが、古墳の基数で見ると伝統地と同数か、これを上まわる結果となっている。古墳の規模、量の分析は、政治的要因も含め多様な視点からの分析を必要とするが、基本的には古墳を築造した集団の生産力がその背景にある事を承認できよう。この前提に立って桐生の散在する古墳を見ると、第一次新開集落の古墳が、伝統集落のそれを上まわっている事態は、桐生の伝統集落の生産力が相対的に低い事を現わしているものとなる。散在する古墳分析の当初は、散在する古墳を伴う第一次新開集落の成立期には伝統集落の墓域に古墳を築造する結果、第一次新開集落の古墳は少なく、散在するという想定をもってしたが、なお検討を加えていく必要がある。

現段階における群集する古墳と散在する古墳の分析結果を模式図にまとめたものが、図8である。伝統集落は、発展、拡散をくりかえし、古墳の築造もこれにともなう行なわれる。古墳築造の累積の結果は、群集する古墳となってあられ、7世紀には伝統集落の地域内においても新しい集落から散在する古墳も生まれる。⁽⁶⁸⁾ 新開地においても一度成立した第一次新開集落は、伝統集落と同様に発展拡散をくりかえす。古墳の築造も行なわれるが、結果として数基からなるまとまりで散在するものは1基のみで散在することとなる。古墳分布図を作成して見られる古墳分布状況は、4世紀から7世紀、8世紀にまで至る古墳築造の累積の結果である。

散在する古墳の存在は、群集墳

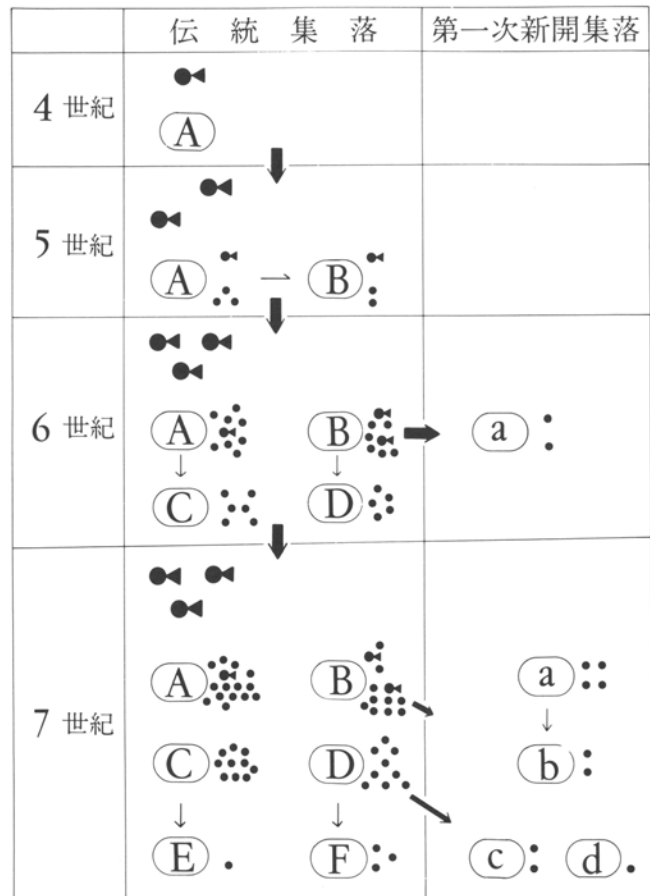


図8 群集する古墳・散在する古墳の成立模式図

研究に対して新たな問題提起ともなってくる。限定された墓域をもった群集墳に対し、群集墳を形成する個々の古墳と同時期、同規模、同質の散在する古墳の存在は、群集墳の政治的、階級的、階層的な理解にも再検討をせまる結果となる。後期小古墳の研究が群集墳研究と同義語として扱われてきたが、これに散在する古墳をも加えて分析していく必要のある所である。

一方、散在する古墳の在りかたについて、本稿で扱ってきた後期小古墳とは異なった所で、従来注目されてきている。新里村内にも3基確認されている截石切組積の石室を有する古墳がこれにあたる(図2)。これらの古墳は、硬質な安山岩を截石切組積という精緻な技法を用いて横穴式石室を構築する事から、前方後円墳消滅以降の首長級古墳の位置が与えられてきた。これらの截石切組積古墳が散在する後期小古墳と同様に、第一次新開集落の領域に入っている事や、周囲に居住域を伴わない地に単独で所在する古墳もあるという特殊な在り方等は、周辺地域の同様な古墳と居住域、生産域の在り方を含めて検討すべき課題である。また、前方後円墳の分析についても同様な問題意識が必要となる。従来前方後円墳の支配領域をその位置から大きな地域で推定する事が行われてきたが、その立地する位置の意味については、周辺の古墳群との関係を中心に分析されてきている。これを一歩進め、前方後円墳の存在する地域の分布調査を基礎としながら、居住域、生産域、群集墳、散在する古墳の分布とからめた時空的分析の中から、その存在意味を新たに問いなおさなければならない課題である。

おわりに

遺跡分布調査の結果をもとに、古墳の分布をその居住域、生産域と結びつけた分析によって、後期小古墳の研究に新しい方向を加える事ができた。後期小古墳は、その母体となる集落の性格を反映し、群集する古墳と散在する古墳という二つの相異なる存在形態をしめす事が判明した。古墳の在り方は、集落の開発の在り方をしめす結果ともなっている。

古墳の分析を地域研究と結びつけた研究は、緒についた段階であり、性急な結論を出す事は慎しみたい。本稿では、従来等閑視されてきた散在する後期小古墳が群集墳と同様に地域の理解には不可欠な存在である事を示すにとどめておく。

もちろん、遺跡分布調査は、考古学の対象領域とする時代の大きな傾向、地域特性をつかみ得るが、詳細な分析は発掘調査を待たねばならない。遺跡分布調査によって得られた問題意識をもって、発掘調査とその成果の分析を行ない、遺跡分布調査結果の検証を行ないつつ地域を分析していく事が基本的な姿勢である。今後は、分析対象地域を拡大しながら古墳の分析を地域の分析の中に位置づけて行なっていきたい。地域の分析によって得られる地域特性の抽出、そして地域特性の集積とその分析作業のくりかえしと蓄積の中にこそ、群集墳、散在する古墳の意味するものが鮮明になると確信したい。そして、この中にこそ近藤の家父長制家族墓論と西嶋の姓体制論の検証と再構築が可能なものとなる。同時に長い間看過されてきた栗山、藤森の目ざした地域研究の現代的再生をはかれる事にもなる。同時にこの事は、地域において歴史法則の抽出にも

(70)
つなげられるものと信ずる。

本稿の骨格となっている遺跡分布調査による地域研究法は、新里村詳細遺跡分布調査を担った仲間達、昭和56年以来大間々扇状地地域の全域を歩き抜き、その分析作業を共に行なっている仲間達の共同研究作業の成果である。

また、本稿の作成にあたっては、能登 健、右島和夫、徳江秀夫の三氏に指導と助言をいただいた。図版作成については、辻口敏子氏の援助をいただいた。

註

- (1) 「調査古墳一覧表」『群馬県史』資料編3 1981(昭56)
- (2) 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』1965(昭41)
- (3) 福島武雄・岩沢正作・相川龍雄『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告』第2輯 群馬県 1932(昭7)
- (4) 『上毛古墳綜覧』群馬県史跡名勝天然記念物報告第5輯 群馬県 1938(昭13)
- (5) 昭和30年4月 3基の実測調査と6基の発掘調査実施『群馬県史』資料編3 1981(昭56)
- (6) 藤岡一雄・原島利枝・清水和夫・小林敏夫・石川克博・川合功・梅沢重昭・石川正之助・鬼形芳夫「玉村古墳群」『群馬県史』資料編3 1981(昭56)
- (7) 藤岡一雄・鬼形芳夫・小林敏夫・原島利枝・石川克博・中村富雄・清水和夫・柿沼恵介「御部入古墳群」『群馬県史』資料編3 1981(昭56)
- (8) 梅沢重昭・松本浩一・原田恒弘・細野雅男・神保侑史・平野進一・鬼形芳夫・石塚久則『奥原古墳群』群馬県教委 1984(昭59)
- (9) 松村一昭『峯岸山の古墳1、2』赤堀村教委 1975、76(昭50、51)
- (10) 尾崎喜左雄『無名墳(上毛古墳綜覧赤堀村26号) 仮称達摩山古墳発掘報告』群大尾崎研究室 1951(昭26) ほか
- (11) 松村一昭『地蔵山の古墳1、2』赤堀村教委 1977、78(昭52、53)
- (12) 中沢貞次・村田喜久男『蟹沼東古墳群』伊勢崎市教委 1977、78、79、80(昭52、53、54、55)
- (13) 石坂茂・徳江秀夫『荒砥二之堰遺跡』群馬県埋文事業団 1985(昭60)
- (14) 尾崎喜左雄「群馬県多郡月田古墳」『年報』1 日本考古学協会 1950(昭25)
- (15) 小島純一「月田古墳群 B₁」粕川村教委 1982(昭57)
- (16) 小島純一「白藤、新宿 C₁、C₂」粕川村教委 1983(昭58)
- (17) 赤山容造・山崎光・横山巧・坂口一「伊勢崎・東流通団地遺跡」群馬県企業局 1982(昭57) この他多数
- (18) 能登健「群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題」『県史研究』17 1985(昭58)
- (19) 能登健「集落変遷から見た農耕地拡大のプロセス —遺跡分布調査による新しい集落分析の展開—」『地方史研究』191 1984(昭59) 第35回「地方史研究協議会大会」研究発表要旨 1984(昭59)
- (20) 未報告 報告書作成中
- (21) 内田憲治ほか『新里村の遺跡』新里村教委 1984(昭59)
- (22) 広瀬和雄「群集墳研究の一状況をめぐって」『古代研究』7 1975(昭50)
- (23) 栗山一夫「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告(一)〜(三)、続編(一)〜(四)」『人類学雑誌』49-7、8、9 50-1、2、5、6 1934、35(昭9、10)
- (24) 藤森栄一「考古学上よりしたる古墳墓立地の観方——信濃諏訪地方古墳の地域的研究 I、II」『考古学』10巻1号 11巻6号 1934、35(昭14、18)
- (25) 永峯光一「古墳と環境——甲府盆地の場合——」『国史学』第56号 1950(昭25)
- 桐原 健「善光寺平における古墳立地の考案」『信濃』第16巻第4号 1964(昭39)
- (26) 近藤義郎『佐良山古墳群の研究』津山市 1952(昭27)
- (27) 西嶋定生「古墳と大和政権」『岡山史学』10 1961(昭36)
- (28) 「後期古墳の研究」『古代学研究』30 1962(昭37)
- (29) 水野正好「甲賀郡甲西町狐塚古墳群調査概要」滋賀県教委 1968(昭43)
- (30) 石野博信「兵庫県宝塚市長尾山古墳群」『論集終末期古墳』1973(昭48)
- (31) 広瀬和雄「群集墳論序説」『古代研究』15 1978(昭53)
- (32) 石野博信「古墳時代史8 古墳の変質(2)——群集墳の階層性——」『季刊考古学』8 1984(昭59)
- 新納泉「裝飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』119 1983(昭58)
- (33) 水野正好「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」『古代研究』4 1974(昭49)
- (34) 白石太一郎「畿内的大型群集墳に関する一考察」『古代学研究』42、43合併号 1966(昭41)
- (35) 白石太一郎「大型古墳と群集墳」『考古学論叢』第2冊 1973(昭48)

- (36) 註(2)参照
- (37) 森浩一「群集墳と古墳の終末」『岩波講座日本歴史』2 1975 (昭50)
- (38) 辰己和弘「静岡県中部における群集墳分析の一視点」『群集墳と横穴』静岡県考古学界 1981 (昭56)
- (39) 白石太郎・河上邦彦「石光山古墳群のまとめ」『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊 1976 (昭51)
- (40) 関川尚功「群集墳をめぐる諸問題」『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第34冊 1978 (昭53)
- (41) 堀江門也・広瀬和雄「一須賀古墳群発掘調査概要」大阪府教委 1974 (昭49)
- (42) 柳沢一男・柳岡純孝ほか「片江古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第24輯 1973 (昭48)
- (43) 山崎純男・柳沢一男ほか「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977 (昭52)
- (44) 梅沢重昭「古墳の分布とその展開」『群馬県史』資料編 3 1981 (昭56)
- (45) 能登健・石坂茂・徳江秀夫・小島敦子「赤城山南麓における遺跡群研究——農耕集落の変遷と溜井灌漑の出現」『信濃』第35巻第4号 昭58では溜井灌漑という新技術を用いて欠水性沖積地へ農耕集落が進出する過程を理論化した。
- (46) 甘粕健・山田英雄・吉田喜一郎・小出義治・久保哲三・大沢真澄『東日本における群集墳の総合的研究』1982 (昭57)
- (47) 近藤義郎『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会 1960 (昭35)
- (48) 岩崎卓也「古墳と地域社会」『日本考古学を学ぶ』3 1979 (昭54)
- (49) 甘粕健「横浜市稲荷前古墳群をめぐる諸問題」『考古学研究』第16巻2号 1969 (昭44)
- (50) 山岸良二『方形周溝墓』1981 (昭56)
- (51) 近藤義郎「前方後円墳の時代」1984 (昭58)
- (52) 永島暉臣慎ほか「長原遺跡調査報告」長原遺跡調査会 1978 (昭53)
- 永島暉臣慎ほか「長原遺跡調査報告II」大阪市文化財協会 1982 (昭57)
- (53) 野田拓治ほか「塚原古墳群」熊本県教委 1975 (昭50)
- (54) 註(16)を参照
- (55) 石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」『古代史講座』4 1980 (昭55)
- (56) 都出比呂志「原始」『岩波講座日本歴史』26別巻2 1977 (昭52)
- (57) 能登健「群馬県における地方史研究の動向 考古 総説」『群馬文化』200号 1984 (昭59)
- (58) 註(45)参照
- (59) 註(45)参照
- (60) 能登健「新田荘成立以前の人々の生活」『新田町誌』第4巻 1984 (昭59)
- (61) 能登健・洞口正史・小島敦子ほか「熊倉遺跡」六合村教委 1984 (昭59)
- (62) 註(9)参照
- (63) 井上唯雄「天神山古墳」『新里村誌』1974 (昭49)
- (64) 井上唯雄「古代」『宮城村誌』1973 (昭48)
- (65) 尾崎喜左雄・松本浩一「宮城村の古墳」宮城村誌研究篇第1集 1966 (昭41)
- (66) 『桐生史苑』24号に掲載予定
- (67) 石川正之助「天王塚古墳」『群馬県史』資料編 3 1981 (昭56)
- (68) 群馬県埋文事業団が昭和56～59年に行なった前橋市荒砥地区の調査では、荒砥北原、北三木堂、下押切、宮田の各遺跡で前庭状遺構をもった本県終末期の横穴式石室をもつ古墳の調査を行なった。周囲には、古墳が存在していない。なお、荒砥宮田遺跡では、近接して1基存在している。『年報』1、2、3 群馬県埋文事業団 1982、83、84 (昭57、58、59)
- (69) 註(2)参照
- (70) 能登健「小区画水田の調査とその意義」『地理』Vol.28 No.10 1983 (昭58) 註(18)、(57)能登はこれ等の中で地域研究の根幹を時空軸分析において論を進めている。また地域研究のあり方を単に地域特性の抽出にとどまることなく、地域にあって歴史法則の認識まで高めるべきだとの主張をつらぬいている。

群馬県における浮島式・興津式土器の研究（前）

谷藤保彦・関根慎二

I はじめに

群馬県内の縄文時代前期の研究は、あまり進んでいなかったが、近年の発掘調査の増加に伴い、報告書等の増加の傾向がみられるものの、その数は未だ少ない。このような状況の中で少しでも資料を呈示し、前期の土器研究が進めばと考え、先に『群馬県における縄文時代前期の土器研究(1)』（谷藤、関根、新井、1984）を発表した。この中で、沼田市立薄根中学校々庭から出土した土器を紹介したが、資料の中に諸磯式土器とは明らかに異なり、浮島式土器の貝殻腹縁文を模した土器が含まれていた。このことが切っ掛けとなり、以後県内での浮島式、興津式土器を注目してきた。

霞ヶ浦周辺を中心とする浮島式、及び興津式土器の群馬県内での存在は、意外に古くから知られている。報告書等からは、各遺跡少量ずつではあるが、園田芳雄氏をはじめとし県内研究者により、10数ヶ所の遺跡をあげることができる。また近年の開発に伴う発掘調査の増加から、これらの土器が、かなりの遺跡から出土していることが確認されている。しかし、県内での分布、集成等をまとめた報文は未だなく、市橋一郎、矢島俊雄両氏（1982）による栃木県内の浮島式土器のあり方、及び分布の中で若干ふれられているにとどまっている。

今回は、群馬県内での浮島式、興津式土器のあり方、及びその分布についてまとめることにしたい。なお、本稿をまとめるにあたり、資料を借用させていただいた松倉儀保、林秀子、山下歳信の各氏、文献については一部を石塚久則、女屋和志雄、外山政子の各氏、さらに新井順二、志村哲、田口一郎、中東耕志、本間泉、前原豊の各氏からは種々の御教示を得た。記して謝意を表したい。

本稿は、前篇（I～III）、後篇（IV～VI）の2篇で完結する予定であり、今回前篇の執筆分担は、I・IIIを谷藤が執筆し、IIを関根が執筆した。次回の後篇では、他地域との比較、位置づけ等を行う予定である。参考・引用文献については後篇にまとめることにしたい。

II 研究 史

本項においては、前期後半の浮島式土器群に対する編年研究の現段階を明らかにし、問題の所在を明確化させるために、数多くある浮島式土器に関する研究のうち特に編年研究の過程に触れることにしたい。

現在の浮島式土器群が文献上に出てくるのは、明治27年に浮島貝ヶ窪貝塚の調査（佐藤・若林1894）と古いが、浮島式土器の名称を最初に文献に明記したのは、江坂輝弥である（江坂1951）。

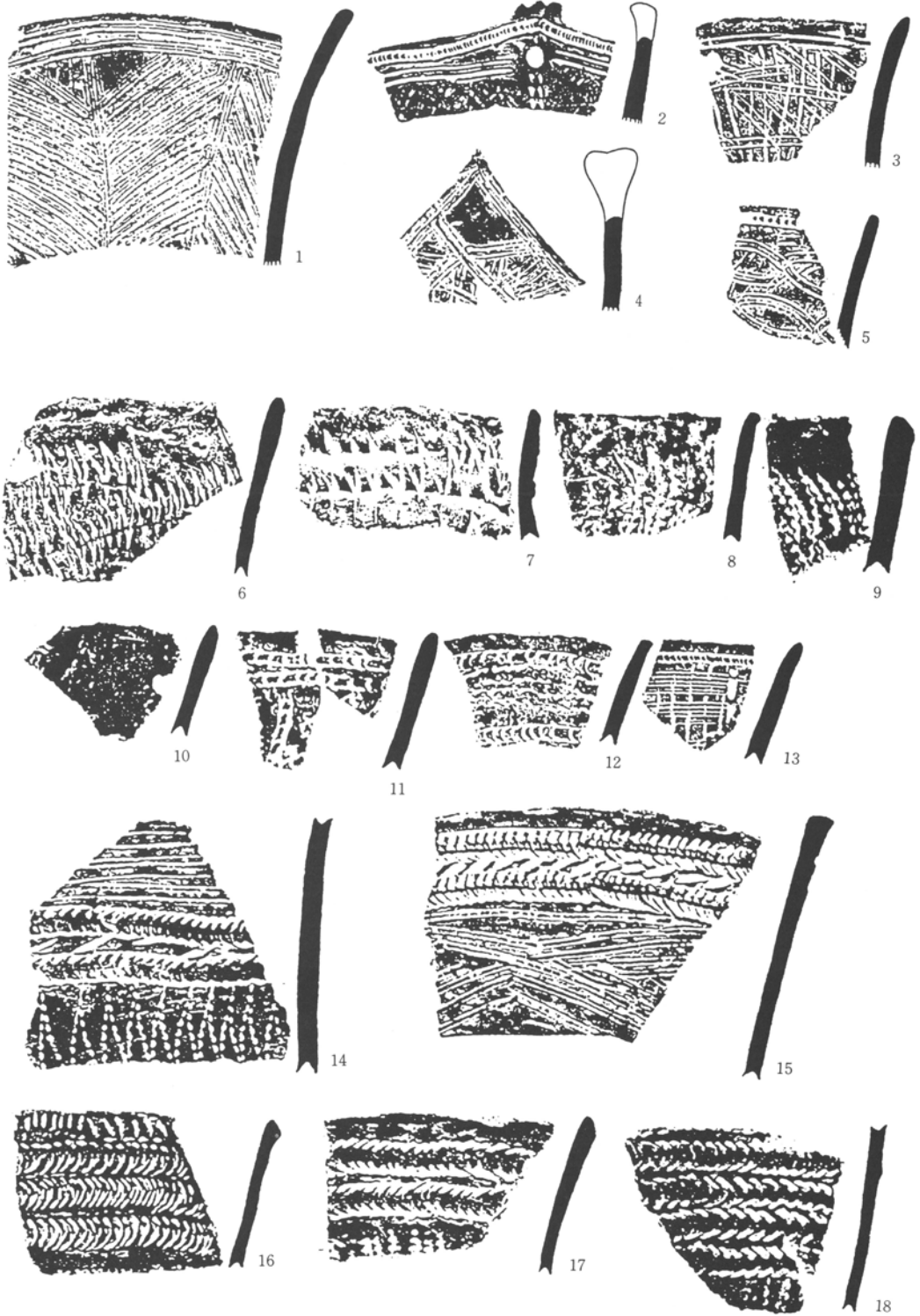
この中で浮島式土器を「霞ヶ浦沿岸から茨城県北部に分布し、地文に縄文を欠き、土器面全体にアルカ属（ハイガイ、サルボウの類）の貝殻又は、ハマグリ、シオフキ等の貝殻の腹縁を土器面に波状に動かして、腹縁の圧痕を施文したもので、この文様の外には、半割竹管の先端にて施文した平行沈線文、爪形文等がある」とした。これによって浮島式土器が一つの型式としてとらえられるようになり、また分布、細分の可能性についても示唆している。これらの段階を経て、浮島式土器の研究を前進させ、文化内容までも触れるようになったのは、西村正衛の利根川下流域の系統的な調査によるものである。西村はこれら一連の調査により、繊維土器の植房式から、前期末の興津式土器の様相を明らかにした。これ以後の浮島式土器の研究は、西村の設定した、浮島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式、興津式をどのように解釈し認識したかという事で進められている感が強い。

西村の浮島式土器群の型式設定は、茨城県稲敷郡貝ヶ窪貝塚、同興津貝塚、取手市向山貝塚、千葉市川市国分旧東練兵場貝塚の発掘調査によって進められた(西村1961、1966、1967、1968、1977)ここでの編年の基準は、層位的差による土器の様式差にあるため、正確かつ合理的であると評されているが(和田1973)、一方では、浮島貝ヶ窪貝塚Aトレンチの3層、4層中の浮島Ⅱ式土器を基準としてそれより上層のものを浮島Ⅲ式、下層の5～7層のものを浮島Ⅰ式としたために、純粋性にやや欠ける点のあることを指摘している。では、西村が設定した浮島式土器とはどのようなものなのであろうか。これについては、和田、寺門の研究(和田1973、寺門1977)にくわしいので、要約した形で示すことにする。

浮島Ⅰ式土器(第1図、1～13) 器形：口辺直口ないしは、やや外反し、胴腹が円筒形をなす深鉢形である。口縁は平坦なものが多いが平行沈線文の土器などには波状口縁のものが存在する。胎土：細砂を混入して緻密である。焼色：暗褐色、褐色を呈するものが多い。器厚：7～8mmのものが多い。文様：単一要素によって構成されたものは、貝殻文の土器に見られるが、他は2、3の要素を複合的に施文したものが多い。全般的に平行沈線文が盛行し、地文として捺糸文や波状貝殻文をもつものがある。変形爪形文は幅が狭く沈線的である。また波状貝殻文は、一体に繊細で拙劣である。そのほか無文や爪形が少量ある。

浮島Ⅱ式土器(第1図、14～18) 器形：底部から口辺部に向かってほぼ真直に開く深鉢が多く目立つが口辺を外反させたものもある。口縁は平坦なものが多いが、波状のものもある。口縁に輪積の痕跡を残したものや凹凸文を有するものが多い。焼色：褐色、暗褐色、黒褐色で焼成は良好である。器厚：6mm程度でいくらか薄手である。文様：波状貝殻文が発達して優勢であり変形爪形文も幅広く明瞭である。平行沈線は、減少している。無文土器も増加するがこれらには口縁や口辺部に輪積文や凹凸文を有している。

浮島Ⅲ式土器(第2図、1～10) 器形：口辺直口ないしは、やや外反する深鉢や鉢形であった口縁は平坦ないし波状、口縁はその断面が片刃状をなしているものが多く、いくらかその個所が肥厚しているのが目立つ。把手のようなものはない。底部は基底が外側につき出したものが多い。胎土：細砂を混入して緻密である。焼色：黒色、黒褐色、暗褐色であるが一体に黒色を



第1図 浮島I・II式土器

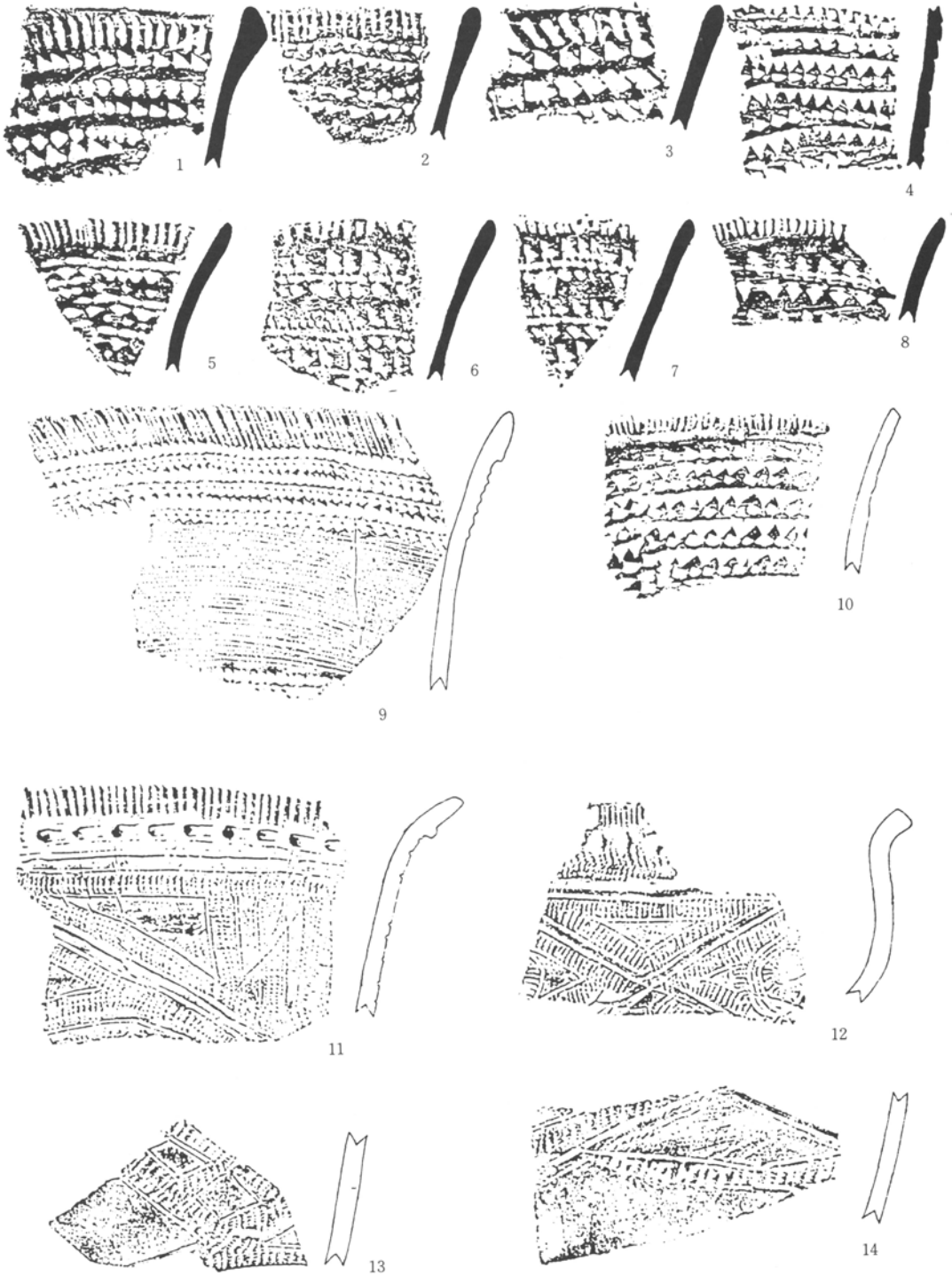
1～5 小川貝塚、6～18 浮島貝ヶ窪貝塚

帯びたものが多い。焼成は良好。器厚：5～7mm程である。文様：三角文と、波状貝殻文が旺盛である。それに変形爪形文類、平行線文、凹凸文、輪積文などの文様が次いで存在する。これらの文様の複合した施文による土器もある。また波状貝殻文は、アナグラ属貝殻をずらした文様と、深い施文手法を特色としている。口縁部には、半截竹管をもってした条線文帯が発達し、その種類も多いが、一体に条線が斜めに傾いて施されている。

興津式土器（第2図、11～14） 器形：口辺部直口の深鉢形、あるいは口辺を少し外反させ、胴腹部に張りをもたせて底部にいたってしまる深鉢形である。後者は、磨消貝殻文の土器においてもっとも顕著な形態をうかがうことができる。口縁は平坦なものや波状のものがある。波状のものは、その頂部を小さくV字状に割り、その下に円ないし楕円形の小突起を附したりしている。一体に形態が大型化していることが目立つ。胎土：細砂を混入し、緻密なものが多い。また大型土器にはウミニナの稚貝を混入したりした。焼成：良好。焼色：黒色、黒褐色、暗褐色、黄褐色、褐色、下部におよんで褐色味を増しているものが多くみられる。器厚：5～10mmにわたるが大体7～8mmである。文様：口縁に幅15～20mmの縦位の整った条線文帯がめぐらされたものが目立つ。また波状貝殻文、平行線文、櫛歯条線文、無文土器の口唇は、竹管のようなもので押して小波状の口唇を作っているものが多い。口唇に細かい刻み目文を配したのもみられる。輪積みの接点の辺を指頭などで押し、窪みをつけたいわゆる凹凸文が一つの特徴的文様が浮島式であったが、興津の土器では、すこし幅のある扁平なへらや貝殻の角などを用いたかして、それらを器に45度位の角度で突き刺し、さらにへらを立てるようにして粘土を逆立て、あるものはその個所を扶ったようにしたものがある。こうして前代の凹凸文に相等する文様は、別の手法によってつくられ、一段と整った形態を備え、他の文様と調和して、美的効果をあげている。文様構成は、単一要素から成るものもあるが、多くの場合複合文様を構成した。施文要素は、貝殻文、半截竹管による爪形文、変形爪形文、平行線文、櫛歯条線文等である。貝殻文にも波状貝殻文とともにタナグラ属貝殻の腹縁をそのまま押しつける手法が展開をみせている。波状貝殻文も間かくを締めた細かい手法を示している。縄文の土器が加わることも特性の一つである。二段の縄文原体を一般的なものとして、その単方向、あるいは羽状に施され、また口唇にも附されたものが多い、とし浮島Ⅰ式を諸磯b古式に、浮島Ⅱ・Ⅲ式を諸磯b式、興津式を諸磯c式に併行させた。

また西村は興津貝塚の第二次調査の中で(西村1977)、浮島Ⅲ式の三角文主体の土器が興津式の磨消貝殻文土器にどのような過程で変わったか、について、諸磯式的爪形文とかまぼこ形細隆線、また整った条線帯と改変された凹凸文を主体とし、それに連続爪形文を付随させる複合的施文の土器は、それらの要素を三角文の中に宿し、さらに磨消貝殻文の土器は、爪形文土器のなかに発生の経緯がうかがわれるとして、爪形文を主体とする土器を興津1式(図2、11～12)磨消貝殻文をもつ土器を興津2式(第2図、13～14)とした。

以上が西村が型式設定した時点での総括的な特徴である。このように西村によって浮島土器群の編年研究が急速な進展と充実に対し、一方では、和田の指摘しているように、浮島貝ケ窪貝塚



第2図 浮島Ⅲ式、興津Ⅰ・Ⅱ式土器
1～8 向山貝塚、9～14 興津貝塚

Aトレンチにおける5～7層のものを浮島I式土器が純粋性に欠けるために、浮島式土器研究者間で西村の設定した浮島式土器群の概念観に相違がみられた。

そのような状況にあつて井上義安は、那珂川下流域を研究フィールドに那珂湊市富士ノ上遺跡において、浮島I式と諸磯a式が併行関係にあるとの見解を示した(井上1967)。これについては、和田、川崎の反論がある。(和田1968、川崎1967)、井上はこれらの反論に答えるべく「浮島I式土器の編年に関する問題」(井上1970)で、那珂川流域の那珂湊市小川貝塚、部田野山崎遺跡においても浮島I式と諸磯a式を併行にあるとして、小川貝塚の資料を用い、これらの土器には「いわゆる肋骨文、木葉文、円形および半截竹管文、爪形文、刺突文、櫛歯条線文などが複合的に描出されて、その文様構成自体は、諸磯A式そのものであるといえよう。けれども、地文の文様には、細くまばらな撚糸文が斜行ないし縦走するように施こされ、この点あきらかに諸磯A式とは異なっているといえる。若しこうした一連の土器から撚糸文を地文とした例は、埼玉県葛飾郡庄和町米島貝塚の諸磯A式の仲間にも存在し、諸磯A式と浮島I式の関係を摺む上に重要であるとされている。」という見解を出され、西村の設定した浮島I式が必ずしも諸磯b式からのものではなく、諸磯a式にまで古くなるという考えであつた。これらの見解は、発掘調査例の少ない当時として、西村の設定した浮島式土器群の編年に対する修正、浮島I式土器の細分への先がかりとして評価されよう。

これら井上の見解に対して和田哲は、『古和田台遺跡発掘調査報告書』(和田1973)中、浮島系土器の諸問題なる一文を著わした。その中で、浮島I式土器の型式を徴表する文様を、撚糸の地文、変形爪形文、波状貝殻文の三つをあげ「撚糸文を浮島I式の不可欠の要素であるとの認識に立てば、西村教授によって提唱された浮島I式土器は、浮島II式へのより過渡的段階の資料と理解される。」として、井上らによる諸磯a式的な浮島I式資料、浮島貝ケ窪貝塚資料中の第1類b種イ、第IV類などを古式的様相を止めたものと考え、西村の設定した浮島I式から分離されるとして浮島I式土器を細分する考えを示し、浮島I a式と、浮島I b式に細分したのであつた。ここでの浮島I a式は、那珂湊市小川貝塚、八幡協遺跡2群b～h類、東大人類学教室貝ケ窪貝塚I区3、4層、西村報告貝ケ窪貝塚第I類b種イ、第IV類などをとり上げ文様は半截竹管による円形刺突文、半截竹管外側刺突文などが顕著であり、この点諸磯a式に近似している。しかし、地文や体部文様にまばらな撚糸文を有する所に特徴がある。波状貝殻文が地文に用いられたり、爪形文が、僅かに認められるが、全体的には、未発達である。(第1図、1～5)としている。

浮島I b式は、貝ケ窪貝塚Aトレンチ第5、6層、Bトレンチ第2～4層の土器が該当し、器形は口縁部がやや外反するか、口辺直口の深鉢形。文様は、口縁部と、頸部に幅の狭い変形爪形文をもち、その間を半截竹管平行線文で充填する。浮島II式との相違点は、変形爪形文の幅が6mm前後であり、浮島II式の変形爪形文の半分位しかない点である。体部文様には、稚拙な感じの波状貝殻文が認められ、撚糸の地文も一部残存する。口縁や頸部にめぐる凸帯に点列文が加わる以外には刺突文が全く存在しなく爪形文が変形爪形文の手法をとり、単なる連続爪形文でない点

無文地に平行線文の土器が多く波状貝殻文が口縁から施される、(第1図、6～13)とした。

これによって従来の浮島Ⅰ式土器は、Ⅰa式とⅠb式に二分し、その編年の位置を、浮島Ⅰaについては「諸磯a式的諸特徴は、これらの土器が諸磯a式に併行するという想定を支持させよう。」として諸磯a式と併行するとした。また浮島Ⅰb式は、貝ヶ窪貝塚などで諸磯b式と供伴することから、諸磯b式の古い部分に併行する型式であると論じた。

ここにおいてまばらな捺糸文を持つ土器が諸磯a式土器に併行する型式であると結論づけられた。また和田は、同論文中で、興津式土器にも若干の時間的幅が考えられるとした。すなわち、「興津式土器の特徴は、磨消貝殻文にあるが、古和田台遺跡第1号住居址の第Ⅲ類中には、磨消貝殻文が見当たらない。この点は資料の稀少さに帰すべきではないと思われ、時間的な差異も考慮されるべきであろう。」と述べ同じような状態は興津貝塚でも見られるとして、興津南貝塚では、内側竹管爪形文による興津式は顕著な存在であるにもかかわらず磨消貝殻文の土器が一片も存在しなかった。ということで、内側竹管爪形文による興津式土器を浮島Ⅲ式に近いという考えを示し興津式土器の細分の可能性を指摘している。

また常総地方をフィールドとしている川崎純徳は、茨城県新治郡玉里村八幡脇遺跡の発掘調査により、八幡脇類を抽出した。この八幡脇類とは、「器形は大型で外反し、形態は波状及び平縁の口縁を持つ深鉢形土器、文様は、連続爪形文と半截竹管による沈線文を主体とするのであり口辺部の文様帯の区画としてつけられる連続爪形文は、次第に大きく施文され隆走帯のような感を与え、口辺部は外反し、口辺部最大幅は大きくなり砲弾状の形状を示すようになる。」と説明し、このような形態は、浮島Ⅰ式としての特徴を示しはじめるものと論じ、和田、井上とは違い形態的な特徴から、西村のいう浮島Ⅰ式に先行するものだとした。(川崎1967)この時点では、八幡脇類は、諸磯a式に併行する浮島Ⅰ式の祖形であるとの考えを示している。その後川崎は、『遠原貝塚の研究(本編Ⅰ)』(川崎1980)において、和田、井上、寺門らの批判をうけ八幡脇類の再吟味を行ない、井上、和田らの言う地文に「まばらな捺糸文」と共に連続爪形文や竹管状工具による刺突文を八幡脇類とし、諸磯a式に伴う浮島系土器群を浮島Ⅰ式土器の型式概念から分離しておくべきだと考え、これらの土器を浮島0式土器とした。また川崎は、「浮島系土器群文様区分帯論」(川崎1980)において、進化論的な文様変遷では、土器の推移を捉える場合に無理が生じ、この誤りを犯した反省から、文様区画帯と文様の変化から、浮島系土器群の細別の基礎を求めようとしている。この事は従来の単に文様変遷から、土器群の推移をとらえるのではなく、文様区画帯と文様という両面の方向から細分を試みる事は、浮島式土器群の構造をとらえるには、必要なことであり、評価されよう。

一方霞ヶ浦周辺をフィールドにしている、寺門は浮島Ⅰ式に先行する型式として、所作式を設定した。所作式は、「まばらな捺糸文」をもつ半截竹管による平行沈線文、有節平行沈線文を持つものとしているが、これらの土器は、和田らの浮島Ⅰa式、川崎の言う「八幡脇類」と類似のもので、これについては川崎の批判があり、独立した型式として認定できないものであるといわれ

		西 村	川 崎	和 田	井 上	寺 門
諸 磯 a	古		遠 原		浮 島 I	所 作
	新		浮 島 0	浮 島 I a		浮 島 I
諸 磯 b	古	浮 島 I	浮 島 I	浮 島 I b	浮 島 II	浮 島 I
		浮 島 II	浮 島 II	浮 島 II		浮 島 II
	新	浮 島 III	浮 島 III	浮 島 III		
諸 磯 c		興 津	興 津	興 津	浮 島 III	浮 島 III
十 三 菩 提			三 反 田	羽状縄文土器	興 津	

第1表 浮島式土器群 編年表

ている。

また寺門は、浮島式土器を文様要素の組合せからみた変遷を行っている。しかし、この論は文様の系統の変遷については、有意義なものであるが文様要素の抽出にとどまり、文様構造をとらえるものではない。したがって寺門の論にもあるように、霞ヶ浦周辺の浮島式土器群の変遷を語るにとどまっている。以上、西村の浮島式土器の型式設定から、和田、井上、川崎、寺門らの、浮島式土器編年に関しての認識し概念観にふれてきた。特にこの中でも浮島I式土器以前の混迷した状況が鮮明になったが、これによって考え得ることは、西村の浮島式土器の型式設定時における、浮島I式土器のあいまいさ、また、和田、井上、川崎、寺門らの人達の認識、方法論、考察のずれからくるものが多いといえよう。これらの要因となるものに、浮島式土器が、東関東の狭い範囲を中心として分布し、発掘調査例が少ない上に、的確な層化的関係の把握例が稀少なことが上げられる。

ここで、群馬県内における浮島式土器群研究について若干述べよう。

県内で最初に浮島式土器が認識され、文献に登場するのは、藪田芳雄らによって調査された、桐生市伊豆田遺跡においてではないだろうか(藪田1970)。この遺跡は、1964年に調査されたもので、縄文、弥生、古墳の各時代にわたる遺物の中で「諸磯B式に併行する浮島式(霞ヶ浦)は貝殻文や特有の篋書文が施されているが、当地方では、その系統と思われるものが多くみられる」として、諸磯b式に浮島式が併行するという考えを示された。

その後藪田は、新里村熊野遺跡(藪田1975)に於いて、浮島式に類似した土器として数例上げているが、その中で縄文中期土器の中にも浮島的な貝殻を用いた文様をもつものもあるとして、中期中頭の土器を、浮島式類似土器という見解を示し、当地方では、勝坂式類似土器や阿王台式比

定土器の中にも強く影響しているとした。

その後県内で浮島式土器群がまとまって出土したのは、笠懸村稲荷山遺跡（若月1980）である。若月省吾は、笠懸村誌（若月1980）上で、稲荷山遺跡の浮島式土器群をもり上げ、これら浮島式土器群の搬入ルートを渡良瀬川からのルートとし、また胎土分析を行ない、本遺跡周辺の岩石鉱物組成と一致していない点をあげ、東関東地方からの搬入であると指摘した。

以上県内における浮島式土器群に関する研究は多くない。今後、浮島式土器群の研究は、資料の的確な問題意識、方法論をもった発掘調査による資料の蓄積も必要であるが、浮島式土器群が常に諸磯式土器との対比という形で語られてきた通り、諸磯式土器を主として分布に持つ地域からの浮島式土器への積極的なアプローチが必要なのではないだろうか。

本項は、浮島式土器群の編年と、型式について重点を置いたもので、特定の研究者しか扱わなかった。また敬称を略した事を許されたい。現段階での浮島式土器群と諸磯式土器群の編年表を載せておくことにしたい。

III 群馬県内の状況

1 遺跡の分布

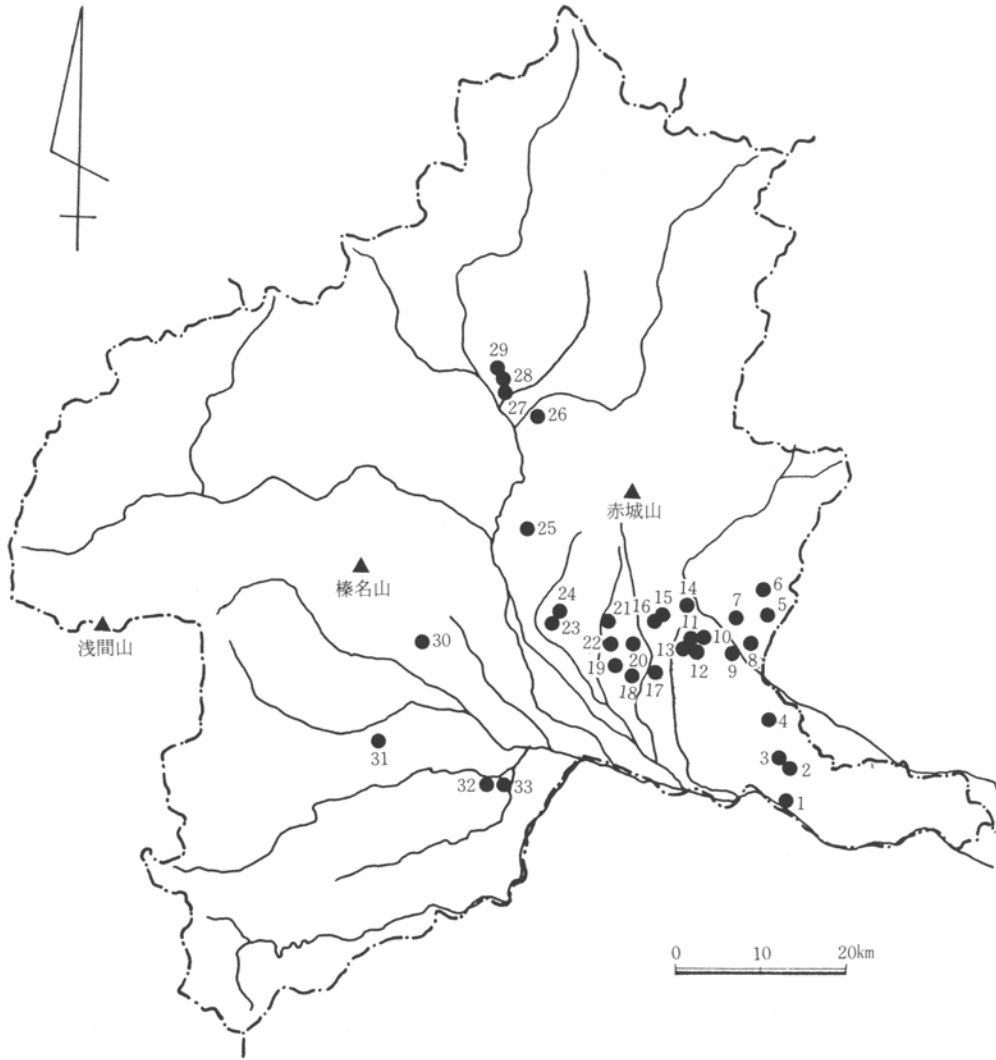
群馬県内での浮島式、及び興津式土器の出土が確認されている33カ所の遺跡を地図上に示してみると第3図のようになる。各地域での調査の進捗状況によって、その分布密度に差があることは事実であろう。特に赤城山南麓域での調査例は古くからあり、また赤堀村、新里村、笠懸村、桐生市においては、報告書等もかなり刊行されている。

渡良瀬川及びその支流の桐生川流域、利根川支流の粕川、荒砥川、白川の各流域に、出土の確認されている遺跡が多くあり、密度が高い（山腰遺跡、伊豆田遺跡、金龍台遺跡、雲祥寺遺跡、北山遺跡、焼山遺跡、中島遺跡、神社裏遺跡、稲荷山遺跡、清水山遺跡、熊野・藤生沢遺跡、城遺跡、天笠南遺跡、六道遺跡、書上本山遺跡、下触牛伏遺跡、多田山東遺跡、荒砥上川久保遺跡、大胡バイパス遺跡、芳賀東部工業団地遺跡、誉倉遺跡）。県北部では、近年関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められてきた結果、沼田市周辺の利根川本流域、及びその支流の片品川流域における数遺跡から出土の確認がなされている（糸井宮前遺跡、薄根中学校遺跡、後田遺跡、三峰神社裏遺跡）。また県西部では、榛名山南麓域、及び烏川支流の碓氷川、鎭川流域に数遺跡点にしていることがうかがえる（中善地・宮地遺跡、天神原遺跡、黒熊遺跡、滝1号墳）。さらに第3図に示した以外にも、赤城山南麓の新里村々内⁽¹⁾、利根川支流の吾妻川流域においても数遺跡確認⁽²⁾されているとのことである。

これら各遺跡での浮島式・興津式土器の出土量は、全体的に少ない。

また各遺跡間での出土量の割合に差があっても、群馬県内全域に、その分布の広がりがあると考えることができる。

浮島式、及び興津式土器の分布は、茨城県はもとより、千葉県、東京都、神奈川県、埼玉県、



遺 跡 名 一 覧

1	御正作遺跡(大泉町)	12	神社裏遺跡(笠懸村)	23	芳賀東部工業団地遺跡(前橋市)
2	賀茂遺跡(太田市)	13	中島遺跡(")	24	誉倉遺跡(")
3	上遺跡(")	14	熊野・藤生沢遺跡(新里村)	25	滝沢遺跡(赤城村)
4	焼山遺跡(")	15	城遺跡(")	26	糸井宮前遺跡(昭和村)
5	伊豆田遺跡(桐生市)	16	天笠南遺跡(")	27	薄根中学校遺跡(沼田市)
6	金龍台遺跡(")	17	六道遺跡(東村)	28	後田遺跡(月夜野町)
7	雲祥寺遺跡(")	18	書上本山遺跡(伊勢崎市)	29	三峰神社裏遺跡(")
8	山腰遺跡(")	19	下触牛伏遺跡(赤堀村)	30	中善寺・宮地遺跡(箕郷町)
9	北山遺跡(笠懸村)	20	多田山東遺跡(")	31	天神原遺跡(安中市)
10	清水山遺跡(")	21	大胡バイパス遺跡(大胡町)	32	黒熊遺跡(吉井町)
11	稲荷山遺跡(")	22	荒砥上川久保遺跡(前橋市)	33	滝1号墳(藤岡市)

第3図 群馬県内の浮島式興津式土器出土遺跡分布図

栃木県、群馬県と関東地方全域にわたる。また福島県でも浜通り、会津の両地域からの出土も認められており、かなり広範囲な分布をもつ土器群であると考えられる。さらに、群馬県内の分布からするならば、長野県及び新潟県にも、その分布が及ぶことを十分考え得ることができよう。

註

- (1) 新里村教育委員会『新里村の遺跡』（1984）
- (2) 本間泉氏に御教示を得た。本間氏が吾妻周辺の分布調査を行なった際に、数カ所の遺跡から諸磯式土器と共に少量ではあるが、貝殻腹縁文を施した浮島式土器を採集している。

2. 遺物の説明

次に県内から出土している浮島式・興津式土器について各遺跡毎に紹介したい。何分にも前項で示した遺跡の中には、現在整理中のものが数多くあり、今回呈示することのできない資料が多々ある。ここに示す資料は、現在整理途中にあつて未報告ではあるが担当者の方の御好意に依り使用させていただいたもの、又新たに表面採集されたもの、これ迄に報告書等で刊行ないしは発表されたものを中心とした。尚図版については報告書より転載したものが多く縮尺がまちまちであるため、その縮尺を各図版、ないしは各遺跡毎に表記している。

大胡バイパス遺跡（第4図1～17）

口舌部に刻みをもち、山形突起状な波状口縁になり、胴部には貝殻ではなく、幅2cm程の施文面がかなり細い工具を用いて、密な波状貝殻文を施す(1)。口縁部がやや外反する平縁で、口舌部に刻みをもち胴部にアナグラ属の貝殻の腹縁による刺突的な手法での、かなり密な波状貝殻を施す(2～4、8)。口縁は平縁で、胴部に放射肋の無いハマグリ等の二枚貝に依る波状貝殻文を施したもの(5～7、9、10)。口縁が外反する波状口縁で、胴部がややふくらむ。文様は、数条の平行沈線で区画され、その周囲にアナグラ属の貝殻の腹縁に依る刺突、波状等に貝殻文を施したもの(11～15)。やや外反する平縁で、口舌部に1対の貼り付けによる鋸歯状装飾帯をもち、この装飾帯を含めて口縁部には刻目を施す。胴部は上半でややふくらみをもち、底部に向つて、かなりすぼまる。胴部の文様は、貝殻腹縁に依る波状貝殻文を施した後、半截竹管で平行沈線による横位に平行、鋸歯状の文様を描く(16)。口縁はやや外反する平縁で、胴部でわずかにふくらむが、比較的直線的な器形を呈する。文様は、半截竹管具に依る横位の平行沈線を施した後、貝殻腹縁に依る、波状貝殻文を施す(17)。この内(2～4、8)と、(5～7、9～15)については、それぞれ同一個体である可能性が高い。

これらの資料を出土した大胡バイパス遺跡は、黒浜式期から勝坂、阿玉式土器まで多量の土器を出土させているが、特に諸磯a～c式の土器が主体を占める。(16、17)は、それぞれ住居址の埋甕である。またこれらの資料と共に、太い沈線に依る山形文等を施した東北地方の大木5式土器が出土している。

誉倉遺跡（第5図1～7）

この資料は、前橋市小坂子町1861番地に所在する松倉儀保氏宅から表面採集されたものである。胴部に、貝殻腹縁による波状貝殻文を施したものの(1)。外反する波状口縁で、口舌部に刻目をもち、アナグラ属の貝殻腹縁による波状貝殻文を施した後、細い併行沈線を施したものの(2、4)。外反する平縁で、口縁部下に3条の併行沈線を施し、その下部にアナグラ属による波状貝殻文を施したものの(3)。胴部に波状貝殻文を施した後、細い数条の沈線を施したものの(5)。胴部に波状貝殻文を施した後、横位に細い数条の沈線を施したものの(6、7)がある。

この遺跡から採集された資料は、その多くが諸磯b・c式土器が主体をなす。

糸井宮前遺跡 (第5図8～14)

口縁が波状口縁で外反し、口縁部に細い沈線による刻目をもち、胴部に半截竹管による数条の沈線を施したものの(8)。口縁がゆるやかな波状を呈し、口縁部に細い半截竹管による刻目をもちアナグラ属の貝殻腹縁による連続刺突を施す。胴部は半截竹管の沈線で区画され、貝殻腹縁に依る波状貝殻文及び磨消を施す(9)。口縁が外反し、口縁部にやや太めの刻目を施し、その下部に指頭圧痕的に凹凸文を施したものの(10)。胴部に半截竹管具を波状貝殻文のごとく、支点を交互に変えて爪形文を施し、その上下にアナグラ属の貝殻腹縁による横位にずらせて施す連続刺突文をもつものの(11)。胴部に半截竹管具による波状爪形文を施し、その下に放射肋のない貝殻による波状貝殻文を施したものの(12)。3対の外反する波状口縁をもち、口縁にそって刻目及びその下に2本単位の櫛歯状の工具で横にずらせながら連続刺突を施す。頸部から、胴部にかけては、半截竹管具と櫛歯状工具を用いて水平ないしは、波状に菱形及び三角形を連続的に構成しているもの(13)。細い半截竹管具を横にずらせながら連続刺突を施し、菱形を主に渦巻状の円等を描き、さらにその上下を水平に連続刺突を施し、頸部文様を構成する。胴部は太い半截竹管具による波状爪形文を2条ずつ上下に施し、胴部の文様を区画する。さらにこの間に、頸部の文様施文に用いた半截竹管具により、水平な平行沈線を施す(14)。

この糸井宮前遺跡では、諸磯b式から諸磯c式にかけての住居址を多数検出しており、(17)については、諸磯b式土器と共に住居址の埋甕として出土している。

黒熊遺跡 (第6図1)

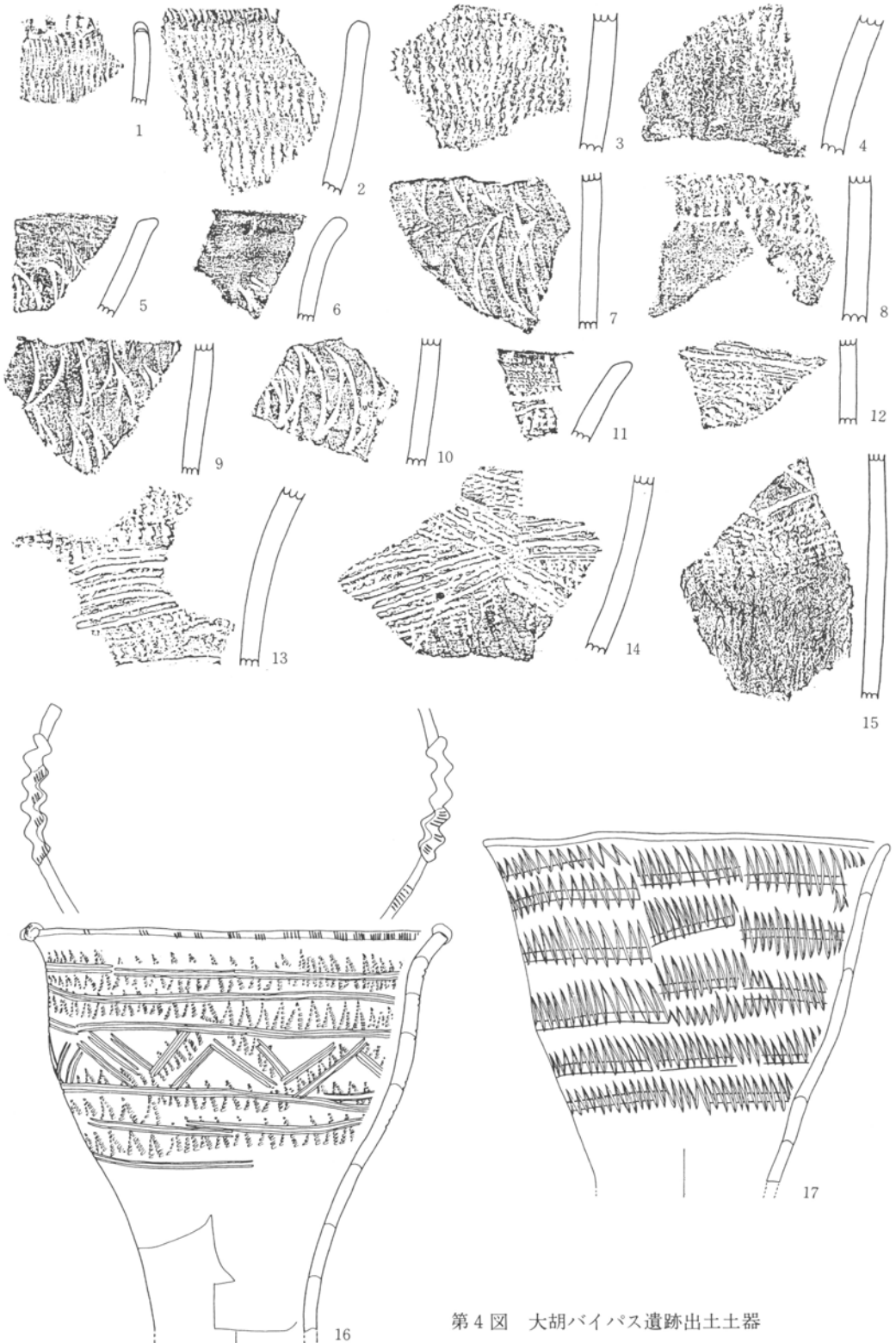
外反する平縁で、胴部にややふくらみをもつ。口縁部に刻目をもち、その直下に凹凸のある指頭圧痕を施す。胴部にはアナグラ属の貝殻腹縁による波状貝殻文が施される。

薄根中学校遺跡 (第6図2)

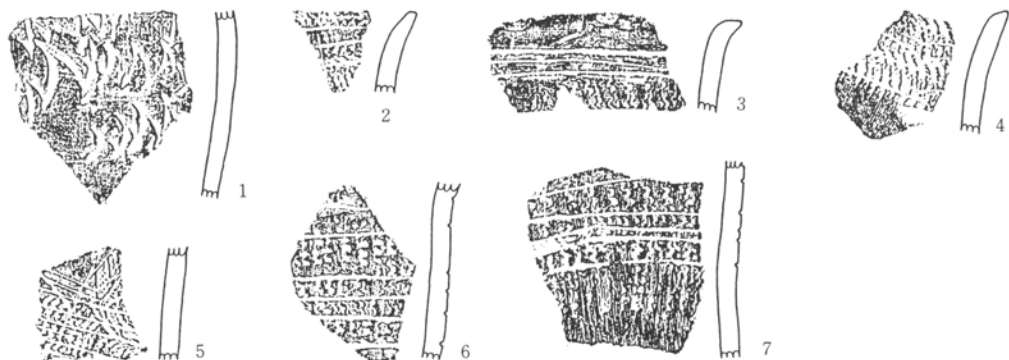
器形は、口縁がやや外反する平縁で、胴部にややふくらみをもつ。文様は、半截竹管具によるもので、施文具を縦に三つ並べて1単位とし、支点を交互に変えて刺突することで、波状貝殻文を模している。

新里村内出土土器 (第7図1～3)

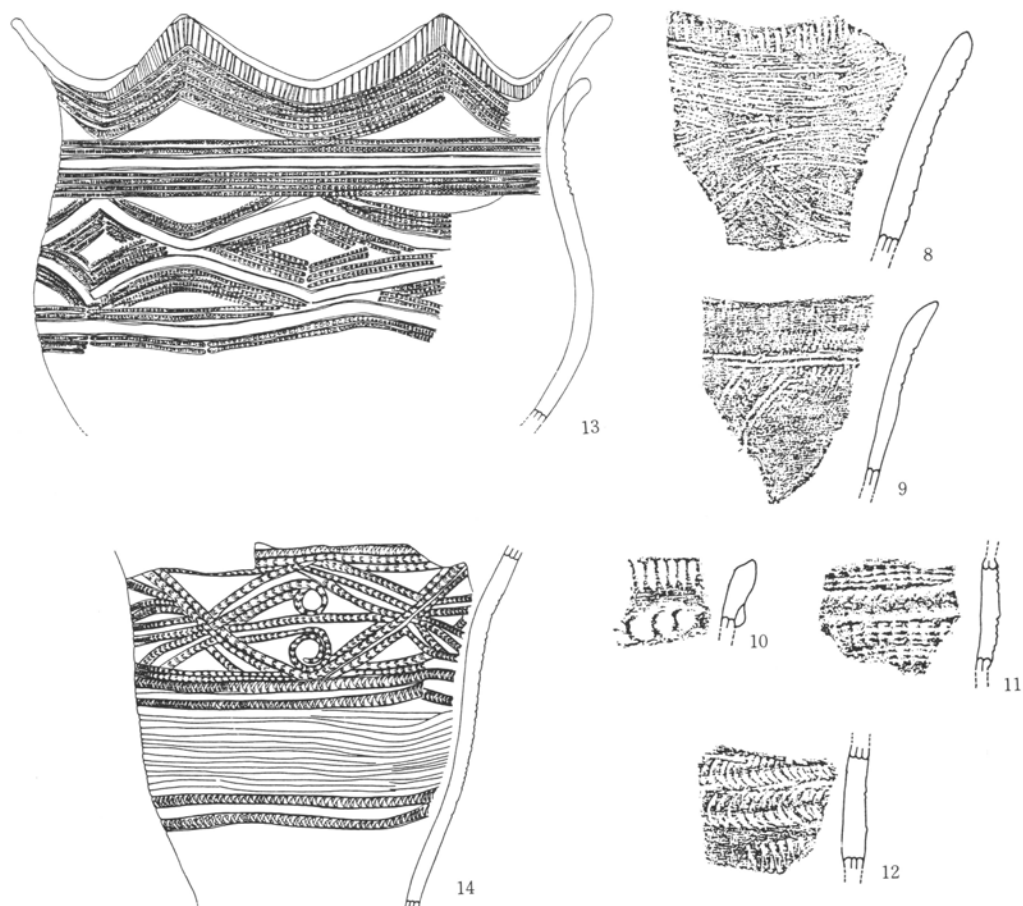
外反する平縁で、口縁部に半截竹管具による波状爪形文を3段施し、その下に沈線で菱形を連続的に描いている(1)。外反する平縁でアナグラ属の貝殻腹縁による波状貝殻文を施したものの(2)。



第4図 大胡バイパス遺跡出土土器
 (1~15 S=1/3、16・17 S=1/4)



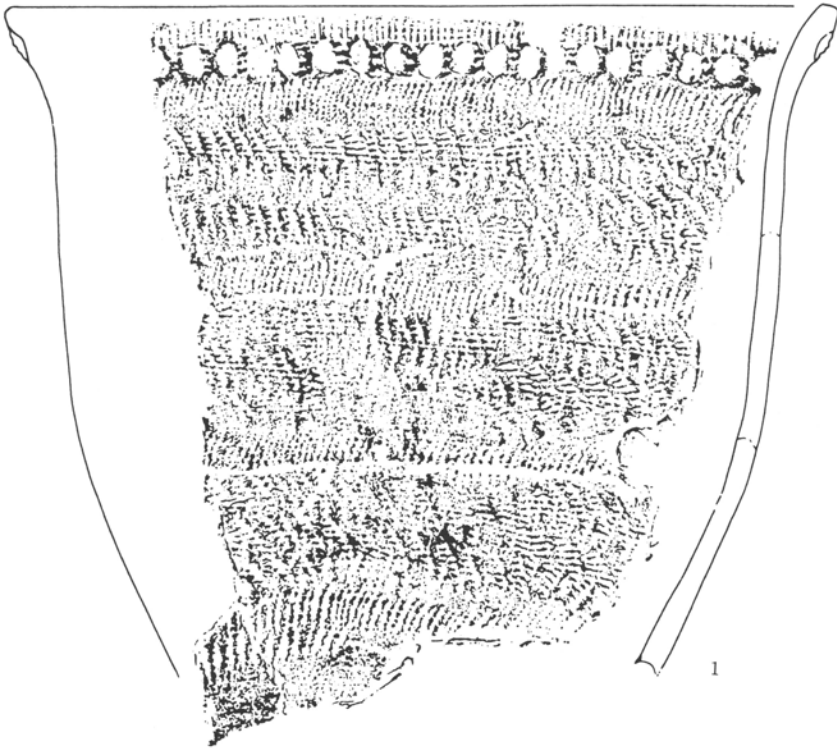
譽倉遺跡出土土器



糸井宮前遺跡出土土器

第 5 図

(1~12 S=1/3、13·14 S=1/4)



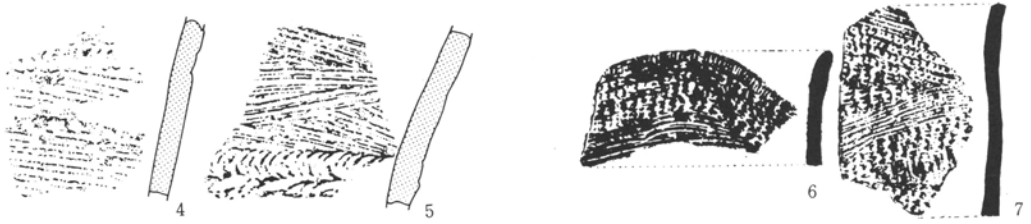
黒熊遺跡出土土器 (S = 1/3)



薄根中学校遺跡出土土器 (S = 1/3)

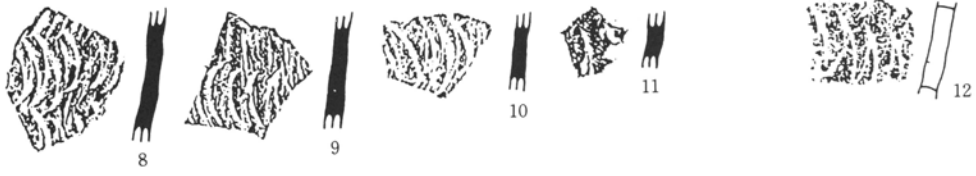


新里村内出土土器



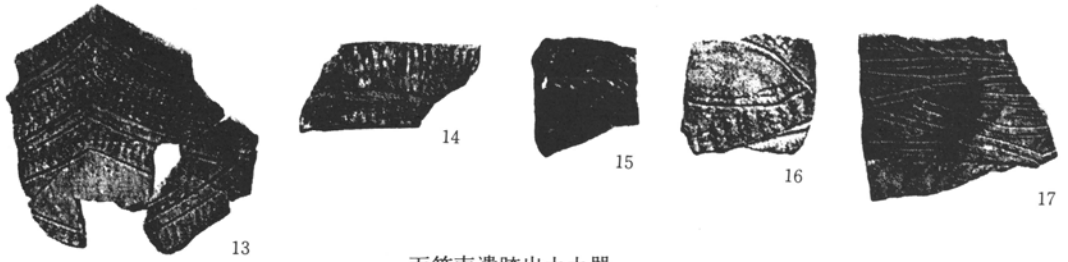
賀茂遺跡出土土器

多田山東遺跡出土土器

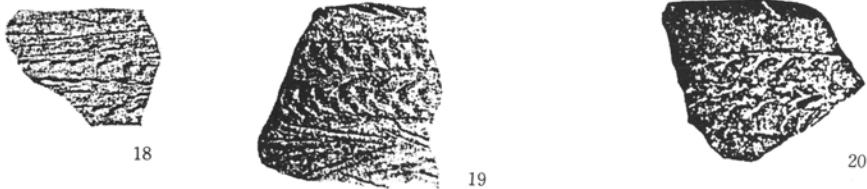


御正作遺跡出土土器

上遺跡出土土器



天笠南遺跡出土土器

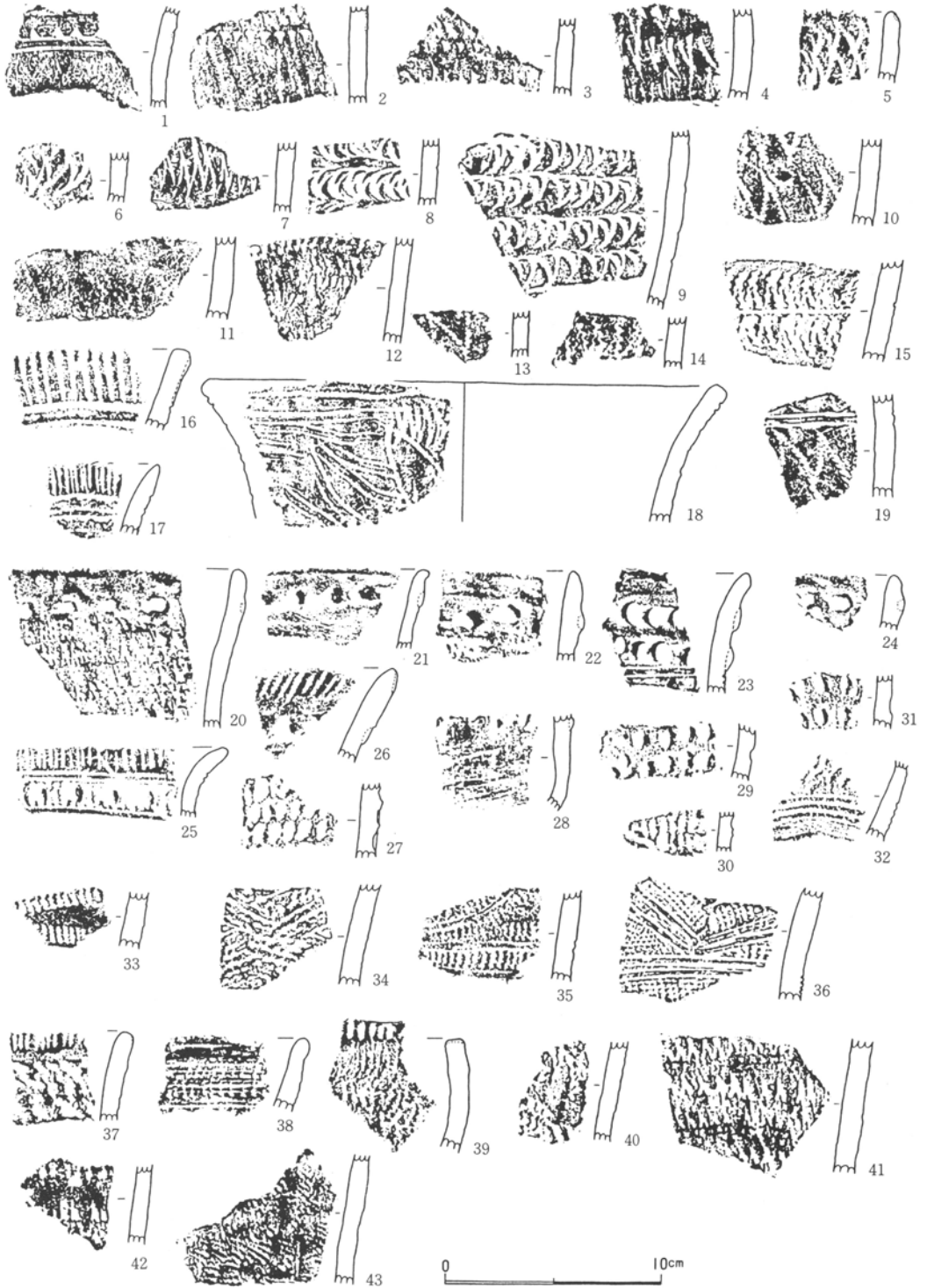


伊豆田遺跡出土土器

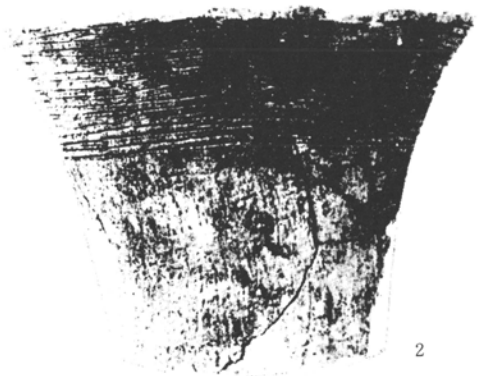
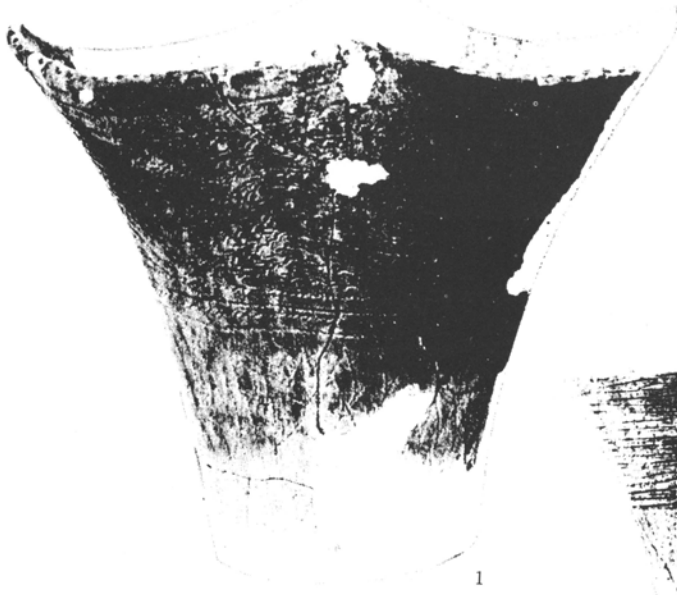
山腰遺跡出土土器

第 7 図

(1 S=1/6、2~12 S=1/3)



第8図 稲荷山遺跡出土土器 (S=1/3)



城遺跡出土土器



中島遺跡出土土器

(S = 1/3)

北山遺跡出土土器

第 9 図

胴部に貝殻腹縁による連続刺突文を施したもの(3)がある。

賀茂遺跡（第7図4、5）

報文（藤巻1984）によると、2片とも胎土に多量の細砂粒を含むとはされているが、図版では繊維含有土器となっている。半截竹管による集合沈線で菱形文様を構成し、波状爪形文で文様帯を区画しており、(4)は沈線間に連点状の刺突が施されている。

多田山東遺跡（第7図6、7）

外反する波状口縁で口縁部に細い刻目をもち、その下にアナグラ属の貝殻腹縁による波状貝殻文、及び半截竹管具による沈線が施されるもの(6)。半截竹管具の沈線により区画され貝殻腹縁による連続刺突文と、半截竹管具による連続刺突文が施されたもの(7)がある。

御正作遺跡（第7図8～11）

胴部に、放射肋のない2枚貝の腹縁による波状貝殻文が施されている。

上 遺跡（第7図12）

胴部に、波状貝殻文が施されている。

天笠南遺跡（第7図13～17）

外反する波状口縁で、口縁部の頂点に突起をもち刻目を施す。半截竹管具により沈線で菱形を区画し、貝殻腹縁による連続刺突を施す。さらに沈線間に他工具により連続的に刺突を施したものの(13)。平縁で刻目をもち、沈線と貝殻腹縁による連続刺突を施したものの(14)。胴部に、太い半截竹管具により波状爪形文を施したものの(15)。胴部に沈線で区画し、貝殻腹縁による連続刺突を施したものの(16)。胴部に、太い半截竹管具による波状爪形文で区画し、その間に細い半截竹管具による沈線を施したものの(17)がある。

伊豆田遺跡（第7図18、19）

太い半截竹管具による波状爪形文と、細い半截竹管具による沈線を施したものである。

山腰遺跡（第7図20）

太い半截竹管具による波状爪形文を施したものである。

稻荷山遺跡（第8図1～42）

報文（若月1980）によると、

横位の平行線で、三角文帯とその下の貝殻文帯とを区画しているもの(1)。三角文帯の下に直接波状貝殻文を施しているもの(2～4)。ハマグリの腹縁で、波状貝殻文を施しているもの(5～9)。ハイガイの腹縁で、波状貝殻文を施しているもの(10～14)。(8)、(9)は、変形爪形文に類似している。平行沈線で文様を意匠した後、部分的に波状貝殻文を施したものの(18)。上部文様帯との区画沈線と考えられ、おそらくその上には三角文帯が意匠されるもの(19)。口縁部文様帯に棒状工具による刻目をもち、その下部に横位の沈線が施されるもの(16、17)。半截竹管具を器面横方向から突き刺すように押捺し、凹凸を有するもの(20、22、24)。半截竹管具の丸みをもつ方を器面にあてて突き上げるように押捺し、凹凸を有するもの(21、25～29)。(21)

と同様に丸い方を器面にあてるのであるが、突き上げでなく横方向に強く押しあてて引くように施文するため、粘土がずれて盛り上がったように観察されるもの(23)。爪状のもので連続刺突をおこなったもの(30~32)。貝殻の腹縁を連続して押捺した文様をもつもの(33)。貝殻腹縁を連続押捺し、沈線文で横・斜位に意匠するもの(34~36)。口縁に刻目をもち、貝殻腹縁文を横位に施すもの(37)。貝殻腹縁文と条痕文とを重ねて施文したものの(38)。乱れた波状貝殻文をもつもの(39~42)。貝殻の背部を器面に押圧したものの(43)。

としている。

城 遺跡 (第9図1、2)

外反する2対の波状口縁で、口舌部に指頭圧痕的な連続する刺突を施す。口縁部文様は、半截竹管具による横位に上下2条ずつ波状爪形文が施され、この間に波状に波状爪形文を幾条も施す。さらに胴部には、アナグラ属の貝殻腹縁による波状貝殻文が施される(1)。半截竹管具による平行沈線を幾条にも横位に施し、胴部下半にはアナグラ属の貝殻腹縁による波状貝殻文が施されている(2)。

北山遺跡 (第9図3、4)

胴部に、放射肋のない2枚貝による波状貝殻文を施したものの(3)。胴部に、沈線により区画され、内部にアナグラ属の貝殻腹縁による連続刺突文を施したものの(4)がある。

中島遺跡 (第9図5、6)

胴部に、放射肋のない2枚貝による波状貝殻文である。

3. 遺物の分類

前項では、県内に分布する浮島式・興津式土器の集成を行なったが、ここではこれらの資料を西村・寺門の一連の型式分類をもとに、各型式ごとに分類することにしたい。

第I群土器

浮島式土器とされる土器群である。

第1類

- a (第4図5~7、9、10、第5図1、第7図2、8~12、第8図5~14、第9図3、5、6)

口縁から、器面全体に波状貝殻文を施したものの。

- b (第5図14、第7図1、4、5、15、17~20)

半截竹管を主体施文具として、変形爪形文と呼ばれる波状爪形文⁽³⁾を施し、平行沈線文と組合わせられたもの。さらに平行に刺突文を表出させるもの。

- c (第5図11、12、第9図1)

aとbが組合わされたもの。

- d (第4図17、第8図15、19、20~24、第9図2)

波状貝殻文と平行沈線及び指頭圧痕的な刺突文が組合わされ施文されたもの。

e （第6図2）

前記したa～dまでの中に含まれないもの。この土器については、本来の浮島式土器に施文されるアナグラ属の貝殻腹縁の波状貝殻文を、半截竹管を数本束ねることでアナグラ属の貝殻腹縁を模し、さらにその工具の支点を変えながら交互に刺突を連続させることで、波状貝殻文を模するという特殊な文様をもつ土器である。この土器以外にも、同様な特殊文様例が数例ほど県内から出土しているが、詳しくは後篇で述べることにする。

以上のことから、本類の土器は浮島Ⅱ式と考えられる。

第2類

a-1 （第4図1～4、8、第8図37～43）

口縁に刻目をめぐらせたもので、その下に波状貝殻文やアナグラ属の貝殻を器面にずらせて動かし、まるで貝殻の放射肋を集合条線のように表出させたもの。

a-2 （第5図10、第6図1、第8図20～24）

a-1と同様であるが、さらに指頭圧痕的に凹凸の表出を組合わせたもの。

b （第8図1～4）

器面にヘラ、もしくは貝殻等の工具により刺突を行なうことで、連続的な三角文が施されたもの。この種の土器には、波状貝殻文等も組合わせられて施文される。また、口縁部にaと同様な刻目をめぐらせる場合もある。

以上のことから、本類の土器は浮島Ⅲ式と考えられる。

第Ⅱ群土器

興津式土器とされる土器群である。

第1類（第8図25）

口縁をめぐる条線帯が整っており、爪形文及び連続爪形文を施したもので、興津Ⅰ式と考えられるものである。

第2類（第4図11～15、第5図2～7、9、第7図3、6、7、13、14、16、第8図33～35、第9図4）

器形は、口縁を外反させた平・波状で、頂部側面に突起等を施すものである。頸部はおのずとくびれ、胴部は張り底部にかけてかなり彎曲性に豊む。文様は、口縁をめぐる条線帯は整い、胴部にかけてアナグラ属の貝殻腹縁による緻密な波状貝殻文を施し、半截竹管の平行沈線、あるいは単沈線で、三角形や菱形等の幾何学的文様が区画される。さらに貝殻文を磨消させたもの。（第7図7）は、貝殻文のほか細い半截竹管による連続爪形文も合せて施文されている。また、磨消貝殻文を思わせるような、貝殻腹縁を横位にずらせながら連続刺突を施すものもある。

以上のことから、この土器群は興津Ⅱ式と考えられる。

第3類 (第4図16)

文様的には第2類とした興津Ⅱ式と考えられるが、口舌部に1対の貼り付けによる鋸歯状装飾帯をもつという異質な部分がある。この装飾帯は南東北地方の大木5式に多く附加される装飾であり、本来興津式には用いられない。一応この種の土器は、大木5式の系統をもつ興津式として、興津Ⅱ式の範疇の中に入れられるものと考えたい。

第4類 (第5図13)

器形、また全体的な文様面からも興津Ⅱ式と考えられるが、沈線区画の周囲に施される文様が、本来の興津式土器の場合、貝殻によるものであるのに対し、この土器では櫛歯状施文具による連続刺突という手法がとられている。異系的な面はあるが、興津Ⅱ式の範疇の中に入れられるものとして考えたい。

上記のごとく、県内出土の土器を各型式ごとに分類してきたが、結果としては浮島Ⅰ式土器に比定される土器は、現在までのところ県内からの出土は認められていないようであるが、将来的には十分その可能性は考えられる。また浮島Ⅲ式、興津Ⅰ式土器については、その出土量が他に比べやや乏しいようである。興津Ⅱ式では、第Ⅱ群土器第3、4類のごとく、異系統的な要素を合わせもつ土器がある。第3類の場合、同様の装飾帯をもつ土器を茨城県向山貝塚(西村1976)、興津貝塚(西村1977)に見ることができる。第4類は、福島県冨宮西遺跡(芳賀1984)にその類例が見られる。これらのことから、県内での興津Ⅱ式及び大木5式土器を注意深く観察し、今後の検討課題としていかなければならない。

註

- (3) この文様の名称については、変形爪形文とされる場合が多い。しかし筆者は浮島式土器に施文されるこの種の文様は、貝殻による波状貝殻文を模したもので、工具の変換による現象と考え、むしろ波状爪形文と称する方が望ましいと考えている。

(1984・12・25稿了、以下後篇へ続く)

追記

本稿は先の『群馬県における縄文時代前期の土器研究(1)』(谷藤・関根・新井 1985、群馬考古通信 10号)に続くものであり、この一連の中で『(2)』に該当するものである。また(後篇)については、次紀要に投稿予定である。

インドネシア先史時代墓制研究序説

坂 井 隆

1 はじめに

人間の物質的生活の根幹をなすものは、衣・食・住である。これらは、その人間の所属する共同体の社会構造・伝統習俗と、生活する地域の自然条件とに大きく影響されて成立っている。ある共同体の過去の生活を知ろうとする場合、具体的かつ可視的なモノを通して理解しようとするのが考古学的方法である。この考古学的方法によって解明されようとするそれらの物質生活は、長い年月の中でそれほど急速には変化をしていない、と言える。時間による同一共同体内での変化よりも、同一時での異った共同体間の差異の方が大きい。また時間的な変化は、共同体間の接触・交流に基づいていると思われる。

衣・食・住のうち人間の生存にかかわる最も重要な要素は食だが、幸いにしてか考古学的方法によって解明されるモノも、食料獲得・生産のための道具や調理・供膳・保存のための道具であることが極めて多い。これらを見れば、今日まで判明している限り、歴史時代においてさえその大きな変化は、通常数百年の時間を要している。例えば土器の細かな型式変遷は、それを作った人間や集団の技術的な動きを伝え、竪穴住居址内の一括遺物は、ある時点での小集団の生活状況を見せてはくれる。

しかし、過去の特定の人間の生存を最も凝縮して現わすのは、その死の瞬間であり、その人間の所属した共同体の意思を端的に示すのは、葬送の瞬間である。その時に、個人と共同体の物質生活は集約され、そこから精神生活をかい間見ることができる。葬送形態＝墓制は、基本的に時間差より共同体間の差と共同体内の社会構造による差が大きい。そして埋葬遺構は、葬られた個人の生活の終焉状態と共に、共同体の生活形態と意思を強烈に見せつける。そのために、墓制研究は、考古学の中で重要な位置を占めてきたし、日本では、古墳時代という特定の墓制による時代区分さえ行われている。

墓制が共同体の物質生活と精神生活の象徴であるために、各地・各種の墓制を比較することによって、それぞれの共同体と被葬者の特質を明らかにすることができる。遠く離れた地域で同種の墓制が存在する場合、両者の研究に基づいて、それぞれに共通する物質的・精神的条件を解明することができる。そのために異った地域・形態の墓制の比較研究は、重要な役割を持っていると言える。

以上の視点に立って、小論では、インドネシアの先史時代の墓制の代表的事例の紹介と予察を行いたい。とりわけインドネシアの初期金属器時代（分業時代）の各種の甕棺墓・石製墓は、日本の弥生・古墳時代の墓制との比較において、示唆的な事項を多く持つと思われるからである。

II 研究小史

先史時代の墓制研究は、オランダ植民地時代以来のインドネシアの考古学研究において、更新世の化石人骨と歴史時代の寺院址の陰になってそれほど目立った存在ではないが、今世紀初頭より行われていた。元来、先史時代の遺物とりわけ石器と青銅器は、すでに19世紀にはかなりの表採資料や伝世資料が、王立バタヴィア芸術・科学協会 Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen (現ジャカルタ国立中央博物館 Museum Pusat Nasional Jakarta) によって集められていた。そして蘭印考古局 Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië(前身は1901年に創設。現国立考古学研究センター Pusat Penelitian Arkeologi Nasional)⁽¹⁾の活動が盛んになった1920年代から30年代にかけては、それらの石器・青銅器の分類・編年研究と並んで、各地で初期金属器時代の埋葬遺跡の調査がなされた。

調査の先駆的位置をになったのは、東ジャワ Jawa 東端部のアルゴプロ Argopuro・ラウン Raung 両火山麓のブスキ Besuki 地方に分布する各種の石製墓群である。この地方では、すでに19世紀末以来、鉄道・道路工事に伴っていくつかの舟形石棺などが発見されていた。1929～32年にかけてファン・ヒークルン H.R. van Heekeren は、パカウマン Pakauman 遺跡など6か所以上の遺跡の調査を行っている。さらに1930年代には、中部ジャワのグヌン・キドゥル Gunung Kidul 地方などで箱式石棺がファン・デル・ヒョープ A.N.J. van der Hoop によって調査され、ジャワ島全域で各種の石製墓が知られるようになった。

一方東ジャワに狭い海峡をへだてて隣接するバリ Bali 島では、1921年より舟形石棺の発見が報告され、第二次大戦までに5か所の遺跡が確認されていた。

1930年代には、中部スラウェシ Sulawesi と南スマトラ Sumatra で、重要な発見が相次いだ。中部スラウェシの内陸高原では、クルイト A.C. Kruyt 等によってメンヒル・石像を含めた一群の巨石文化の一部として円筒形石棺が発見されている。同じ頃、地続きの北スラウェシのミナハサ Minahasa 地方の家形石棺も知られるようになった。

南スマトラのパセマ Pasemah 高原の巨石文化は、すでに19世紀後半から知られていたのであるが、これがヒンドゥー・仏教文化以前のものとして認識されるようになったのは、基本的には1931年のファン・デル・ヒョープの調査からである。ここではメンヒルや特徴的な石像と並んで、ドルメン12か所、石積基壇墓4か所、箱式石棺4か所の遺跡が確認されている。続けて調査に入ったデ・ビエ de Bie は、タンジョンガラウ Tanjungarau 遺跡で二つの主体部を持つ箱式石棺で、水牛と猿を描いた壁画を発見した。

甕棺は、1922年にスムバ Sumba 島のムロロ Melolo 遺跡が発見されている。数百基の甕棺の群集するこの遺跡は、その後何回かの部分的な調査が行われたが、本格的な発掘調査は、1939年にウィルケムス W.J.A. Willems によってなされた。また独立後の1954年には、西ジャワ西端のアニャル Anyar 遺跡が、ファン・ヒークルンによって調査された。

このようなオランダ植民地時代の外国人研究者による一連の墓制研究の成果を、ファン・ヒー

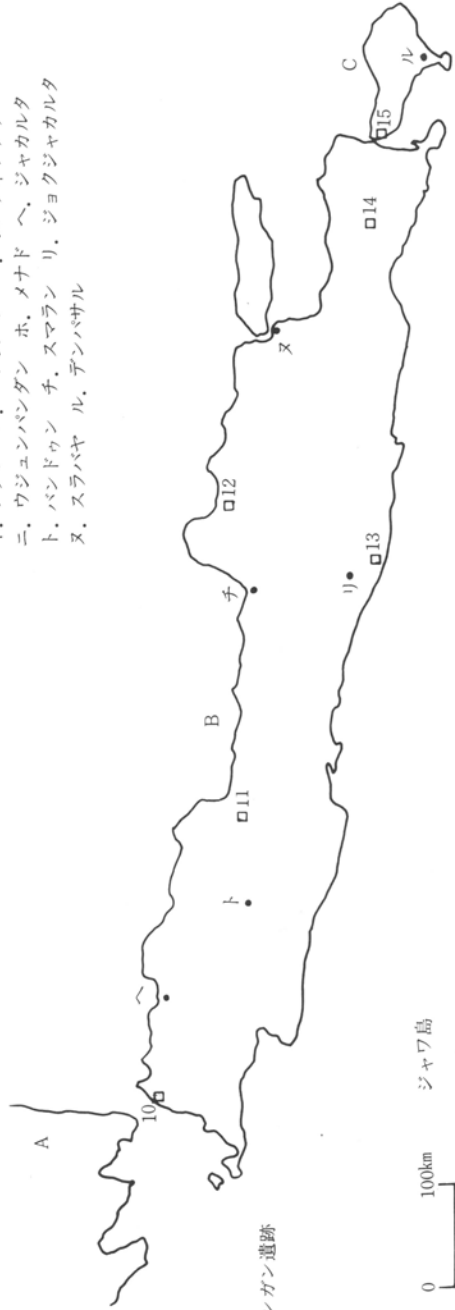


- A. スマトラ
- B. ジャワ
- C. バリ
- D. ロムボック
- E. スムバワ
- F. フローレス
- G. スムバ
- H. タイモール
- I. カリマンタン
- J. スラウエシ
- K. ハルマヘラ
- L. スラム
- M. イリアン

インドネシア全図

- 1. トバ地方
- 2. バセマ地方
- 3. ラムアン地方
- 4. グヌン・ヒリン遺跡
- 5. ムロ遺跡
- 6. ミナハサ地方
- 7. レンケカ遺跡
- 8. トラジャ地方
- 9. スラヤール島
- 10. アニヤル遺跡
- 11. クニンガン遺跡
- 12. トウルジャン・ブラワンガン遺跡
- 13. グヌン・キドウル地方
- 14. アスキ地方
- 15. ギリマヌック遺跡

- イ. メダン
- ロ. バレムバン
- ハ. ボンテイアナツ
- ニ. ウジュンバンダン
- ホ. マナド
- ヘ. ジャカルタ
- ト. バンドゥン
- チ. スマラン
- リ. ジョクジャカルタ
- ヌ. スラバヤ
- ル. テンパサル



第1図 遺跡位置図

クルンは、1958年に古典的な著作である“⁽²⁾The Bronze-Iron Age of Indonesia”の中で、石製墓群を巨石文化の章、甕棺を単独の章としてまとめ上げた。

独立後の研究は、1950年代ではまだ外国人によるものが続いたが、フェルヒューフェン Th. Verhoeven によるフローレス Flores 島とその周辺での一連の土塚墓の調査が、代表的なものである。その後、1962年に行われたスヨノ R.P. Soejono によるバリ島の土塚墓・甕棺墓群のギリマヌッ Gilimanuk 遺跡の調査が、インドネシア人研究者自身による最初の埋葬遺跡の調査であった。この調査では、後述するように一次埋葬・二次埋葬の土塚墓と二次埋葬の甕棺墓が共存する例が検出されるなど、墓制研究の上では貴重な発見となった。またこの遺跡出土の土器群をもつて、ギリマヌッ式土器文化⁽³⁾が提唱されている。このギリマヌッ調査の1年前の1961年に、西ジャワ北海岸のプニ Buni 遺跡⁽⁴⁾の試掘がなされた。プニ式土器文化⁽⁴⁾が提唱されたこの遺跡は、土塚墓群であったと思われるが、すでに盗掘がなされており、その性格は明瞭にはならなかった。

ギリマヌッ以後、1960年代を通じてインドネシアの政治・経済状況が流動的となったため、ほとんど意味のある調査はなされなかった。そのような中でスヨノが1969年に発表した“On Pre-historic Burial Methods”⁽⁵⁾と題する論文は、直接にはファン・ヒークルンのなした墓制研究にギリマヌッの新知見を加えて、全インドネシア地域の中石器時代以来の墓制を総括したもので、以後現在に至るまでの墓制研究の新しい出発点となったものである。

1970年代になると、調査研究は再び活発になった。72年から77年まで行われた中部ジャワ南海岸のグヌン・ウィンコ Gunung Wingko 遺跡の調査では、二次埋葬の土塚墓が発見されている。そして現在の国立考古学研究中心の体制が確立した1976年以降、新たな調査が各地で行われるようになった。中でもスクンダル Drs. Haris Sukendar は、76年に中部スラウェシのレンケカ Lengkeka 遺跡で円筒形石棺、77・78年に中部ジャワ東部北海岸でトゥルジャン Terjan 遺跡の配石墓とプラワンガン Plawangan 遺跡の土塚墓・甕棺墓そして79年にはファン・ヒークルンが55年に調査したアニャル遺跡の再調査と、精力的に埋葬遺跡の発掘調査にとり組んでいる。またハディムルヨノ Drs. Hadimuljono らが、1976年に行った北部スラウェシのミナハサ Minahasa 地方の家形石棺の分布調査や、グナディ Drs. Goenadi Nitihaminoto らが行ったロムボツ Lombok 島の配石墓グヌン・ピリン Gunung Piring 遺跡⁽⁶⁾の発掘調査も、新しい研究の方向性を捜す上での基礎的な資料を提供している。

この間、1977年に刊行された『インドネシア国史 第一巻 インドネシアの先史時代』⁽⁷⁾ Sejarah Nasional Indonesia Jil. I Zaman Prasejarah di Indonesia は、スヨノの編集になるもので、かつて1950年代にファン・ヒークルンがなしたオランダ植民地時代の研究の総括に独立後のインドネシア人研究者による調査研究の知見を加えた初めての本格的な概説書である。同書中には時代ごとに社会・文化生活として墓制の記述が見られるが、特に農耕時代（新石器時代）と分業時代（初期金属器時代）の項では、69年のスヨノの墓制区分を一部修正して各墓制を概観している。

III スヨノの墓制分類

スヨノは、1969年に次のような先史時代の墓制の分類を行っている。

- I 一次埋葬（単体もしくは複数体）
 - A. 土壇墓
 - B. 棺を用いるもの
 - a. 舟形石棺 sarcophagus
 - b. 箱式石棺 stone cists
 - c. 円筒形石棺 stone vats
 - d. 石室墓 stone chambers
 - e. 横穴式石室墓 dolmen-like structures
 - f. 甕棺
- II 二次埋葬（単体もしくは複数体）
 - C. 土壇墓（全体もしくは一部）
 - D. 棺を用いるもの（全体もしくは一部）
 - a. 甕棺
 - b. 舟形石棺（?）
- III 複合埋葬（単体もしくは複数体）
 - E. 一次埋葬土壇墓と二次埋葬土壇墓
 - F. 一次埋葬土壇墓と二次埋葬の棺を用いるもの
- IV 風葬（部分的な埋葬を伴う）

また埋葬体位としては、次の区分を示した。

1. 伸展葬
2. 屈葬
3. 坐葬

そしてこれらの組み合わせによる墓制の分布と変化は、概ね次のようなものとした。

中石器時代	二次埋葬土壇墓	北スマトラ東海岸、東ジャワ、フローレス
	一次埋葬土壇墓（屈葬）	東ジャワ、フローレス
	風葬	南スラウェシ
新石器時代	一次埋葬土壇墓（伸展葬）	西ジャワ、フローレス
	箱式石棺（伸展葬）	西ジャワ
初期金属器時代	一次埋葬土壇墓（伸展、屈葬）	西ジャワ、東ジャワ、バリ、ロムバタ Lombok
	一次埋葬舟形石棺（同上）	東ジャワ、バリ、カリマンタン Kalimantan
	箱式石棺（伸展葬）	南スマトラ、西ジャワ、中部ジャワ
	円筒形石棺	中部スラウェシ

石室墓	南スマトラ
横穴式石室墓	東ジャワ
一次埋葬甕棺	西ジャワ
二次埋葬土塚墓	バリ
二次埋葬甕棺	バリ、スムバ、ロムバタ
二次埋葬舟形石棺 (?)	バリ
複合埋葬	バリ

また出土人骨についてのヤコブ Teuku Jacob の形質人類学的研究に基づいて、スヨノは、埋葬された人種を次のように述べている。

中石器時代	風葬	ヴェードイド・モンゴロイドの混血
	上記以外	オーストロメラネシアン
新石器時代		不明
初期金属器時代	一次埋葬土塚墓	オーストロメラネシアン (東ジャワ)
		モンゴロイド (バリ)
		ネグロイド・ヴェードイド・マレーの混血 (ロムバタ)
	一次埋葬舟形石棺	モンゴロイド (バリ)
	箱式石棺	オーストロメラネシアン (西ジャワ)
	二次埋葬土塚墓	モンゴロイド (バリ)
	二次埋葬甕棺	モンゴロイド (バリ)
		ネグロイド・ヴェードイド・マレーの混血 (ロムバタ)
		古メラネシアン・モンゴロイドの混血 (スムバ)
	二次埋葬舟形石棺(?)	モンゴロイド (バリ)
	複合埋葬	モンゴロイド (バリ)

8年後に発表された『インドネシア国史』での分類は、特に初期金属器時代(分業時代)について次のように修正されている。⁽⁹⁾

埋葬方法	一次埋葬
	二次埋葬
埋葬形態	甕棺墓
	石製墓
	ドルメン
	箱式石棺
	石室墓

円筒形石棺
 家形石棺 waruga
 舟形石棺

土壇墓

ここで、埋葬の方法と形態を分けて考えたのは、両種の方法が共存するギリマヌツのような例が、その後プラワンガンなどで発見され、普遍的に存在する可能性を想定できたためと思われる。なお後述のように、旧説の横穴式石室墓は、新説の石室墓の中に含まれており、また家形石棺は、旧説では舟形石棺の中に入っている。

IV 新石器時代以前の墓制

今日までに、確実な埋葬人骨が発見された最も古い例は、中石器時代の洞窟遺跡からである。この時代の文化は、剥片石器・刃器文化、骨角器文化、スマトラ握斧文化の三系態に区分されるが、前二者の各洞窟遺跡からは、少なからぬ埋葬例がある。

骨角器文化の代表的遺跡とされる東ジャワのラワ Lawa・ソドン Sodong・マルジャン Marjan⁽¹⁰⁾の各洞窟遺跡では、屈葬された人骨が出土している。Lawa 洞窟の人骨は、穿孔した貝製装身具をつけていた。またマルジャン洞窟は、一体の屈葬人骨以外に数多くの人骨の一部が発見されており、二次埋葬も含めた埋葬洞窟と考えられた。

剥片石器・刃器文化に含まれるフローレス島西部の10か所の洞窟⁽¹¹⁾からも、かなりの埋葬人骨が発見されている。中でもモメル Momer 洞窟の土壇墓は、蓋状の石があったとされている。同じく剥片石器・刃器文化に属しトアラ Toala 文化と称される南スラウェシのチャコンド I Cakondo I・ウレレバ Uleleba⁽¹²⁾などの洞窟からも人骨の一部が発見されている。スヨノは、これらを埋葬されない風葬としている。

新石器時代の調査された埋葬遺跡は、極めて少ない。確実な例は、フローレスと西ジャワで確認されただけである。フローレスでは、中石器時代の埋葬遺構との複合遺跡であるブア洞窟 liang Bua⁽¹³⁾の上層より、伸展葬の土壇墓が発見されている。副葬品としては、新石器時代の示標遺物である磨製石器の方角斧そして土器などが見られた。

西ジャワでは、東部のジャワ海岸のチレボン Cirebon・クニンガン Kuningan 地方で、数多くの箱式石棺が発見されている。1937年にファン・デル・ヒョープの、68年から75年にかけてトゥグー・アスマル Teguh Asmar⁽¹⁴⁾の調査により発見された遺跡は、チレマイ Ciremai 山の北東麓を中心に7遺跡以上が確認された。副葬品は、方角斧・石釧・土器が基本的な組成であり、一部では棺外で青銅斧が発見された遺構もある。後述するように、他地域の箱式石棺は初期金属器時代のものであるが、このチレボン・クニンガンのものは、新石器時代後期に発達し、一部が初期金属器時代まで続いた、と考えられている。

なおその他に、甕棺墓の問題がある。甕棺も後述するように初期金属器時代の例が多いが、金

属器の要素を持たないものとして、スムバ島のムロロ⁽¹⁵⁾遺跡とラムブン Lampung のプグン・タムパツ Pugung Tampak⁽¹⁶⁾ 遺跡がある。ムロロでは、方角斧・土器などの豊富な副葬品の中に全く金属器の要素は見られなかったため、ファン・ヒークルンは、新石器時代と考えている。しかしスヨノは、副葬された黒色研磨水注形土器（第7図-3）などの回転台成形を思わせる形態より、土器は初期金属器時代の特徴をもっており、たまたまこの遺跡周辺においては金属器が使用されなかったためである、と反論した。⁽¹⁷⁾ プグン・タムパツは、1975年にスクンダルが試掘により確認した甕棺墓群遺跡で、方角斧・土器などが発見されている。この時の調査では、金属器の要素が全くなかったが、未掘の甕棺が多数あり、スクンダルは時代比定していない。甕棺の場合、後述するアニャル Aryar 遺跡のように集団をなしている全てに金属器が副葬されてはいなく、新しい調査で金属器が発見された例がある。

以上のように、箱式石棺と甕棺では、新石器時代に含めるかをめぐってこれまでいくつかの論議があったが、方角斧という新石器時代の示標遺物が初期金属器時代まで残存するということがあるため、それだけをもって時期区分するには限界がある。今後の土器の編年研究の発達を待たねば、両種の墓制の始源時期については明確にならない、と思われる。

V 初期金属器時代の墓制

この時代の墓制は、前述のように各種石製墓・甕棺墓・土塚墓がある。このうち石製墓は、インドネシアの考古学研究では、他のメンヒルや多孔石 batu dakon・石坐 pelinggih roh・石像などと共に巨石文化の概念の中で語られることが多い。小論では、原則としてあくまで埋葬に関係するもののみについて言及したい。

a. ドルメン

ドルメンは、インドネシア考古学では必ずしも墓とは考えられていない。スヨノも、前述の分類の中には含めていない。その理由は、これまでほとんど発掘調査が行われていなかったためと思われる。

発掘調査されたのは、南スマトラのパセマ高原のトゥグルワンギ Tegurwangi⁽¹⁸⁾ と、東ジャワのブスキのパサル・アラス Pasar Alas⁽¹⁹⁾ の2遺跡だけである。トゥグルワンギのドルメンは、ファン・デル・ヒョープが発掘したものだが、上石の下からは何の遺物も発見されなかった。この地方は、箱式石棺が多く分布している。パサル・アラスは、1921年にデ・ヒヤーン B. de Haan が調査を行って、複数の人間の歯そして多数の玉類と金環が発見された。

パセマ高原では、合計13か所の遺跡が知られている。パセマ高原の南に隣接するラムブンのスンプルジャヤ Sumberjaya 地方では、トゥラガムツミン Telagamukmin 遺跡（第2図-3）など4遺跡が、1977年のスクンダルの分布調査⁽²⁰⁾によって判明した。ジャワ島では、パサル・アラス以外に知られているのは、西ジャワの西部のパンデグララン Pandeglang 地方のパラニャル Palan-

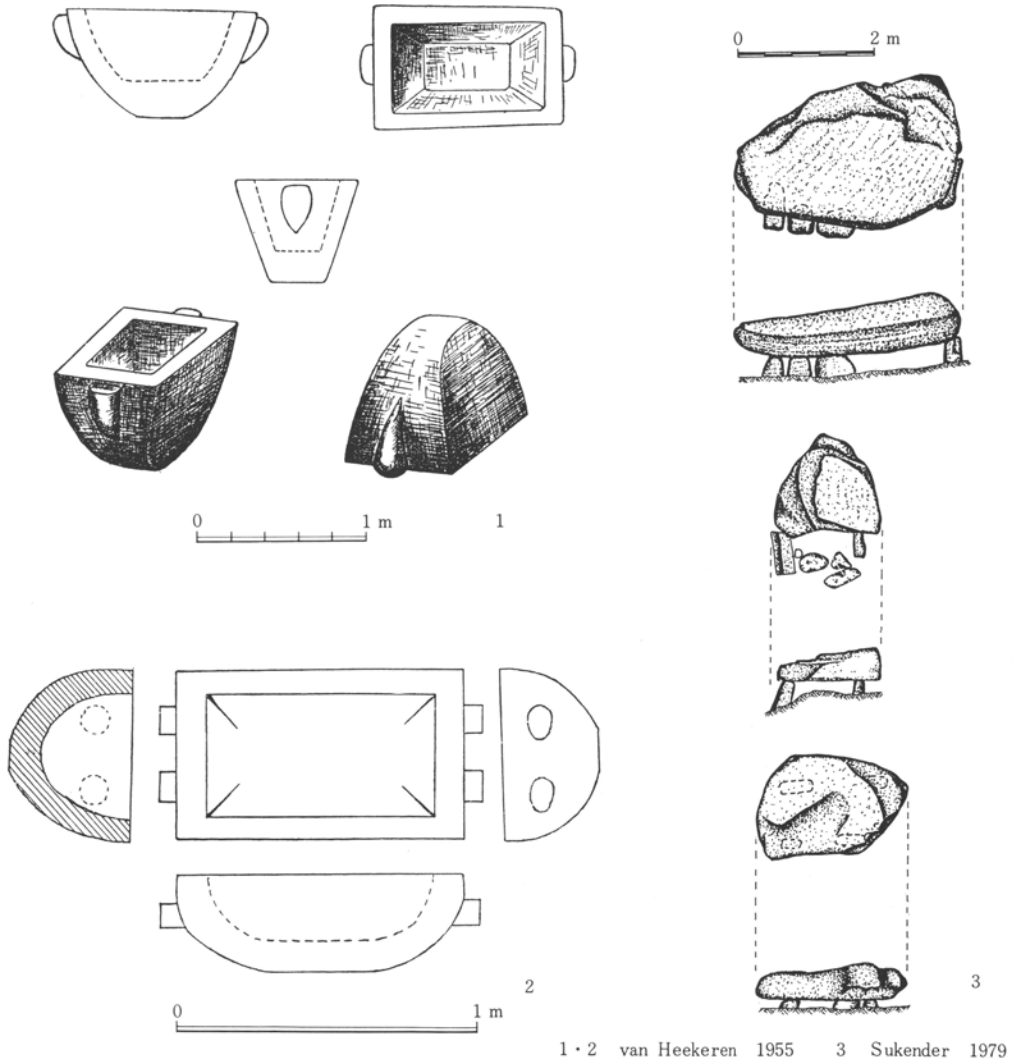
yar⁽²¹⁾ 遺跡だけである。その他には、北スマトラのトバ Toba 湖高原のサモシール Samosir⁽²²⁾ 島と、西カリマンタン Kalimantan のクタパン Ketapang 地方のスダハン Sedahan⁽²³⁾ での報告がある。

全体としてはスマトラの南部の内陸に集中しており、パサル・アラスのは、プスキ地方に多い横穴式石室墓の可能性も考えられる。

b. 舟形石棺

東ジャワのプスキ地方とバリそしてパセマ高原を中心とするスマトラで主に発見されている。この舟形石棺とは、横長を基本とするくり抜き形の石棺全てを含んでいる。

バリでは、1921年以来多数のこの石棺が発見されている。発掘調査が行われたのは、1931年にファン・スタイン・カーレンフェルス P.V. van Stein Callenfels が調査して屈葬人骨が発見され



第2図 バリの舟形石棺とラムプンのドルメン

たプタン Petang⁽²⁴⁾のものや、1954年にファン・ヒークルンが行ったプティアン Petian⁽²⁵⁾の2基(第2図-1)などがある。副葬品は、各種青銅製品・土器・玉類が一般的である。

ファン・ヒークルンは、バリの舟形石棺を長さ2.5m以下の屈葬用の小形のもの⁽²⁶⁾と、2.5m以上の伸展葬用のものに分類している。スヨノは、さらに下記のように分類した。⁽²⁷⁾

第I型式(チェルツ Celuk 式、第2図-1)

小形。断面台形。高さは長さと同じ。装飾突起(人頭形・仮面形)あり。

第II型式(アングァティガ Angatiga 式、第2図-2)

小形。断面半円形。突起あり。

第III型式(ボナ Bona 式)

小形。断面半円形か尖った半楕円形。装飾突起(人頭形・仮面形)あり。

第IV型式(ブヌティン Bunutin 式)

小形。装飾突起(人頭形と尾形)及び身・蓋体部に装飾(手足を上げた人間や動物)あり。

第V型式(チャチャン Cacang 式)

中形。突起なし。

第VI型式(アムビヤルサリ Ambyarsari 式)

断面長方形。身・蓋の接合部附近に重弧文、身上面と蓋上面に図案化した女性器装飾あり。

第VII型式(マヌアバ Manuaba 式)

大形。突起部あり。

これらの分類の詳細な内容について、筆者はまだ把握していないが、装飾突起や体部の装飾がバリの舟形石棺の特徴となっている。

東ジャワのブスキ地方では、バリと基本的に同様の形態をしている舟形石棺が6か所の遺跡で発見されている。⁽²⁸⁾ そのうちパキサン・トゥガルサリ Pakisan-Tegalsari のものは、蓋石が下面に凹みのない片面加工の巨石である。ファン・ヒークルンは、これをドルメンから蓋石をくり抜いた石棺へ変化する過渡的なものとしている。

ブスキ地方とバリのこの石棺は、同一文化の流れの中で把握できると思われ、今後両地域を通じた分類・編年が必要であろう。

バリ・ブスキ式のこの石棺は、他にスம்பワ Sumbawa 島バトゥトゥリン Batutring、ティモール Timor 島のファトゥベシ Fatubesi そして東カリマンタンのロン・ダヌム Long Danum 川とロン・クジャン Long Kejanan 川の流域で発見されている。⁽²⁹⁾

パセマ地方で5遺跡12基以上発見されている二次埋葬用と思われる舟形石棺は、形態がかなり異なる。自然石の上部を隅丸形状に加工し、平らな上面に10cm強の浅い掘りこみを設ける。この掘りこみの容量は、96×26×13cm、あるいは104×18×18cmほどが大きいもので、外側面に人間⁽³⁰⁾

がこの石棺を抱いているような浮彫装飾があるものや、両端に突起があるものなど、外面の形状はかなり変化がある。いずれも蓋石状のものは見られない。ニアス Nias 島に、二次埋葬用として使われている現存例がある。

北スマトラのトバ湖高原に広く分布が見られるものに、二次埋葬用の大形の舟形石棺⁽³¹⁾がある。全体の形状は日本の家形石棺に似ており、直方体の身と中央に稜を持つ切妻屋根形を呈する厚い蓋よりなる。しかし身は完全な直方体ではなく舟形を意識して反りがあり、蓋の稜の両端は大きくせり上がっている。さらに蓋及び身の両端には、かなり具象的な人間や仮面を表した突起部がある。これらの石棺の製作は、今世紀初頭まで行われている。

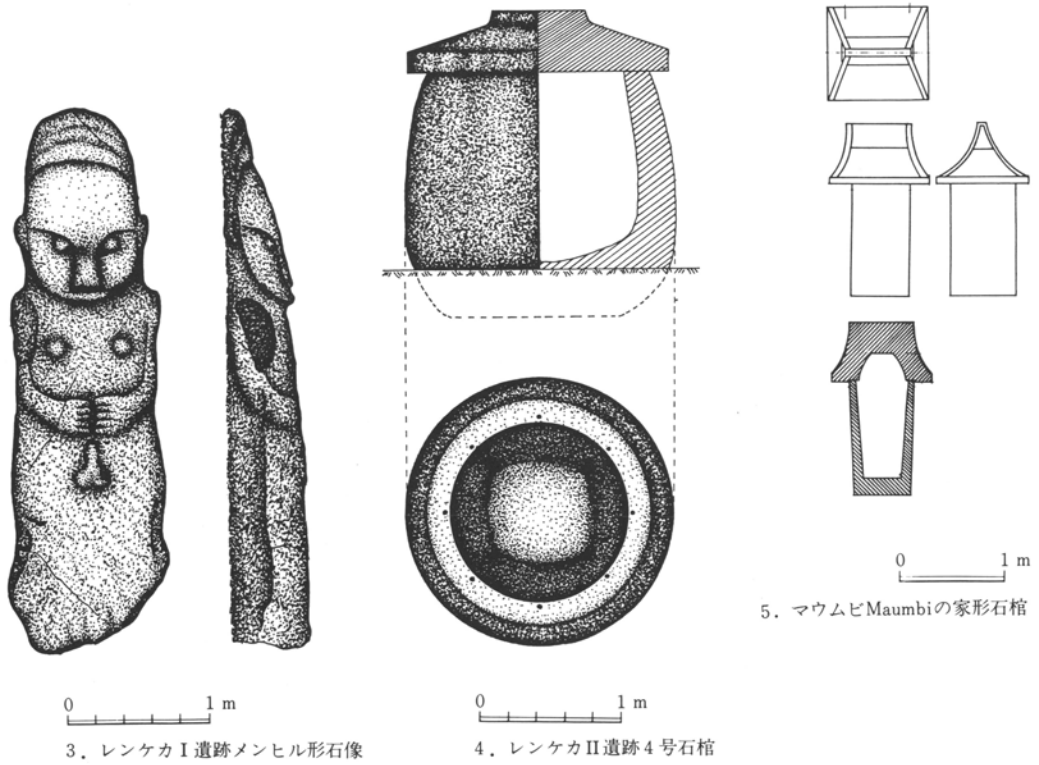
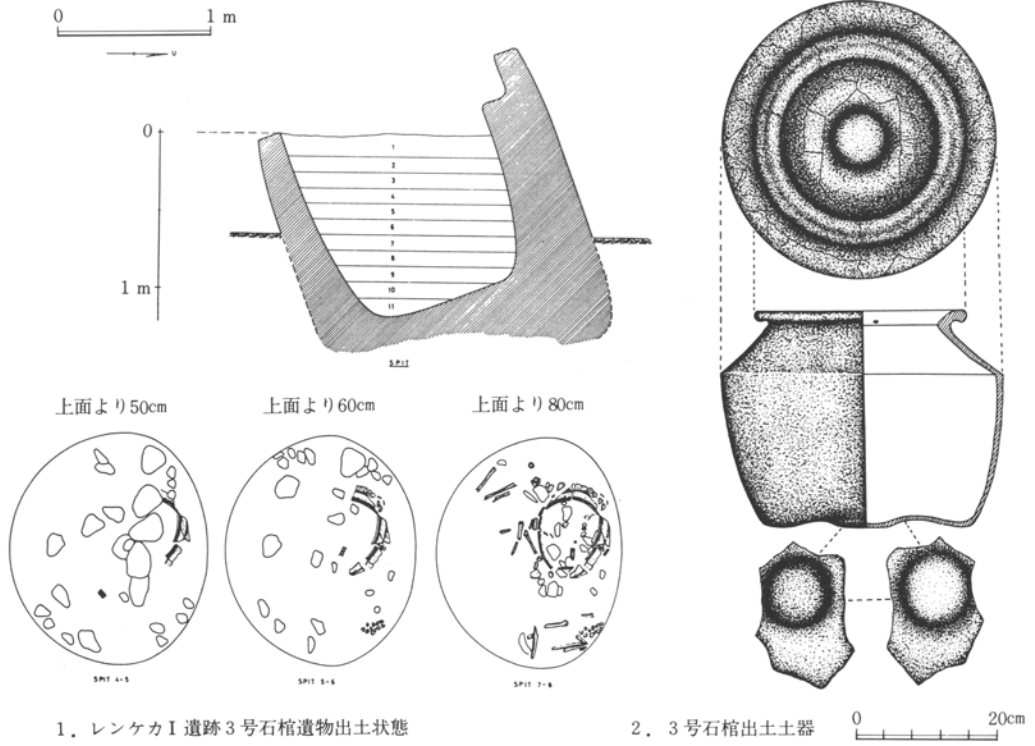
以上の各石棺墓は、一次埋葬であれ二次埋葬であれ、巨石をくり抜いて遺骸の容器としており、かつ全体に垂直方向より水平方向の方が長い形状を示している。ファン・ヒークルンは、蓋石を有するバリ・プスキ形などを sarcophagus、蓋のないパセマ式のを stone trough と呼んで別種のものとしている。しかしパセマ式のもの当初から蓋を全く伴わないかは断定できないだろうし、水平方向を意識したドルメン的な石の使い方は共通している。この場合、パキサン・トゥガルサリ例をもってバリ・プスキ式がドルメンから生まれた、とのファン・ヒークルン説は、やや短絡的な印象がある。トバ式は、バリ・プスキ式の変化と考えられるが、パセマ式はこれらとは系列を異にすることは確かであろう。

c. 円筒形石棺 kalamba と家形石棺 waruga

巨石をくり抜いて遺骸の容器とする点は、前記舟形石棺と共通するが、形状は垂直方向が水平方向より長く立っている状態である点に特徴がある。中部スラウェシ及び北スラウェシに限って分布している。

中部スラウェシ内陸部のバダ Bada 地方を中心に多数発見されているのが、円筒形石棺（カラムバ kalamba 第3図—4）である。直径1～2m、高さ1.5～3mの円筒状に加工した石の上面からくり抜いて棺とし、その上に鈕状の頂部のある円盤形の蓋がのる。身の上部外面に人面形の浮彫装飾を有するものもある。すでに1930年代までにクルイトやコーデルン W. Kaudern らによって分布調査と研究がなされて予察されていたが、発掘調査によって二次埋葬の多葬墓であることが確認されたのは、1976年のスクンダルのレンケカ遺跡⁽³²⁾においてである。⁽³³⁾（第3図—1・2）この遺跡では、17基の円筒石棺が確認された。そのうち蓋が残存していたのは3基で、残りは身だけである。身は、直径2mほどの大形のものと、1mほどの小形に分かれるが、大形が多い。身の外形がほとんど変化ないのに対し、くり抜き部の深さと形状はかなり多様である。深さは50cm以下の浅いものと、1m以上の深いものがあり、形状は、一部また全体に段を有するものや二槽式のものも見られる。これらの相違は、成品・未成品ということだけでは説明できないだろう。

レンケカ遺跡を含めるバダ地方の円筒形石棺の分布とほぼ重なって、足と口の表現のない独特の形状のメンヒル形石像（第3図—3）が数多く発見されている。



1~4 Sukendar 1980 5 Hadimuljono 1976

第3図 スラウェシの円筒形石棺と家形石棺

北スラウェシのミナハサ Minahasa 地方では、ワルガ waruga という名で呼ばれる家形石棺（第3図-5）が分布している。この家形石棺は、1930年代には知られていたが、本格的に分布調査がなされたのは、1975年のハディムルヨノ Drs. Hadimuljono によるもの⁽³⁴⁾が最初である。

形状は、身と蓋に分かれ、身は縦長の直方体を上からくり抜いており、蓋は寄棟形を基調とした屋根形をしている。ミナハサ地方全体で1,200基以上の存在が想定されるが、ハディムルヨノはそのうち405基の分布調査を行った。大きさは、身の幅が1m以上の大形、50～100cmの中形、25～50cmの小形に分けられるが、中形が主流を占める。大部分は、蓋に浮彫装飾がなされている。その内容は、人間・動物・幾何学文・植物に分かれるが、古式と考えられる両手・両足を上げた人間像は、ブスキ地方の舟形石棺にも見られる。

埋葬形態は、屈葬の一次埋葬の家族墓である。発掘調査例がないため、その上限は明らかでないが、19世紀末頃まで使用されていた。

スヨノは、ワルガを舟形石棺に含めている。確かにトバ湖高原の舟形石棺に似た横長のもの（大形）は存在するが、それはむしろ縦長の中形のものの亜種と考えるのが、現状では妥当であろう。そうであれば、ワルガと円筒形石棺とは、メンヒルからの発達が考えられる基本的に同一系統の石棺とすることができる。中部スラウェシ内陸で、メンヒルから円筒形石棺とメンヒル石像が生まれ、その影響を受けて北スラウェシでワルガが作られた、と考えることは、それほど無理がないだろう。

d. 箱式石棺

初期金属器時代の箱式石棺は、パセマ高原と中部ジャワの南部のグヌン・キドゥル Gunugn Kidul 山地で発見されている。

パセマ高原では、1930年代には4遺跡⁽³⁵⁾が知られていた。ファン・デル・ヒョープが発掘調査したトゥグルワンギ Tegurwangi 遺跡のものは、内径2.35×1.37×1.30mを測り、床石と蓋石を3枚づつ有する。副葬品は、各種玉類63個、針状金製品そして青銅器片があった。デ・ビエ C.W.P. de Bie が調査したウジュンマス Ujungmas 遺跡のものからは、20.6×13cmの青銅板が出土している。

同じくデ・ビエの調査によるタンジュンガラウ Tanjungarau の箱式石棺⁽³⁶⁾は、中央の障壁石をもって同面積の複室構造をとっている特異なものであった。さしてさらに重要なことには、この障壁石の両側には、それぞれ1.5×1.5mの彩色壁画が描かれていた。壁画は、かなり抽象化・図案化している描写法で水牛を把まえる人間そして猿を描いており、5色で彩色されていた。

グヌン・キドゥル山地では、1934・35年にムンス J.L. Moens とファン・デル・ヒョープによって発掘調査された箱式石棺⁽³⁷⁾の2遺跡がある。カジャル Kajar 遺跡のものは、内径で1.90×0.63×0.80mを測り、35体以上の人骨が発見されている。副葬品は、剣・刀子などの鉄製品・銅環・数百個のガラス玉などが見られた。プルブラン Bleberan 遺跡の箱式石棺からは、3体の人骨が発見

され、刀子などの鉄製品・銅環そして玉類が出土している。

以上のように、グヌン・キドゥルのは、家族墓であることに特徴がある。パセマでは人骨の出土がないため不明だが、複室構造のタンジュンガラウ例から考えれば、基本的に単独埋葬であったかもしれない。スヨノは、このタンジュンガラウ例を石室墓 stone chamber burial として単独で分類し、他の箱式石棺 stone cist burial とははっきりと区別している。けれどもこの石室墓の定義は曖昧であり、南スラウエンのトラジャ Toraja 族が現在も行っている横穴墓埋葬もこの石室墓の概念の中に含めている。他にプスキ地方にも類例があるとのことだが、ファン・ヒークルン説のように、タンジュンガラウ例は、箱式石棺の亜種と考えた方が良いだろう。なお、次のこの横穴式石室墓とこの石室墓も、スヨノは区別している。

e. その他の石製墓

ファン・ヒークルンとスヨノが共に「亜ドルメン墓 dolmen-like tomb」と呼称分類しているものが、プスキ地方のパカウマン Pakauman でウィルレムス W.J.A. Willems によって調査されている。(第4図) 住民にパンドゥサ pandhusa あるいは「中国人の墓」makam cina と呼ばれるこの墓は、6枚のやや厚手の板石を側壁とし、ドルメンに似た少し加工された巨石1個を用いて蓋石として、東側の短側面に入口を設けた横穴式石室に似た形態を示している。

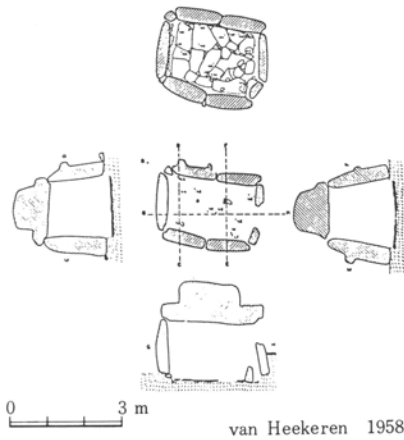
この石室からは、複数の人骨の他にガラス・土製玉類と壺形土器そして唐代の中国陶磁片が出土し、石室外からは鉄製ノミが発見された。そのため下限を9世紀とする家族墓と考えられている。調査時にはすでにかかなり破壊されており、墳丘などが存在したかは不明である。

この墓は、ドルメン的な要素がないわけではないが、少なくとも前述のファン・ヒークルンのドルメンから舟形石棺への変化の流れの中には位置づけにくく、むしろ形態より横穴式石室墓として別個に考えた方が、理解しやすい。西ジャワと西カリマンタンでも報告例がある。

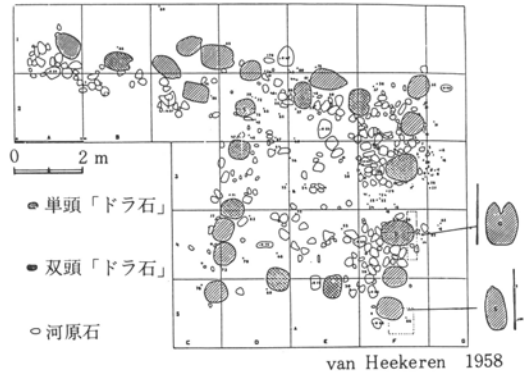
パカウマン遺跡では、この横穴式石室墓の近くに、「ドラ石 batu kenong」と呼ばれる方形環状配列石(第5図)が発見されている。⁽⁴¹⁾ 頂部が単独もしくは二つの尖頭形に加工された巨石が24個配列されて、約5×6mの方形配列とそこから約6m延びる直線配列が見られる。そしてこれらの巨石の周囲には、やや敷石ぎみに河原石が組まれている。ウィルレムスが部分的に行った発掘では、壺などの土器片・ガラス製玉類・鉄製小形釧そして石製の衣類製作用樹皮なめし具が発見された。方形配列の内部に、人骨あるいは埋葬主体が存在したのかは不明だが、この遺構は建物の基部とは考えにくい。

実は、このパカウマンの「ドラ石」が埋葬遺構であるかもしれない可能性を示唆する遺構が、最近調査されている。1976年にグナディ Drs. Guenadi Nitihaminoto によって発掘調査されたロムボック Lombok 島南部のグヌン・ピリン Gunung Piring 遺跡と77年にスクンダルによって発掘調査された中部ジャワ北東部海岸のトゥルジャン Terjan 遺跡である。⁽⁴²⁾

グヌン・ピリン遺跡(第6図—1・2)で発見されたのは、土器・玉類・鉄器青銅器片を伴出



第4図 パカウマンの横穴式石室墓



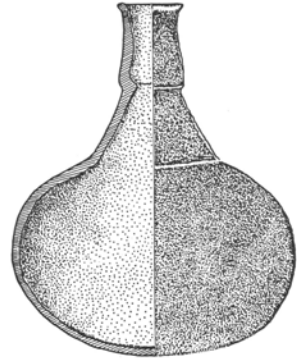
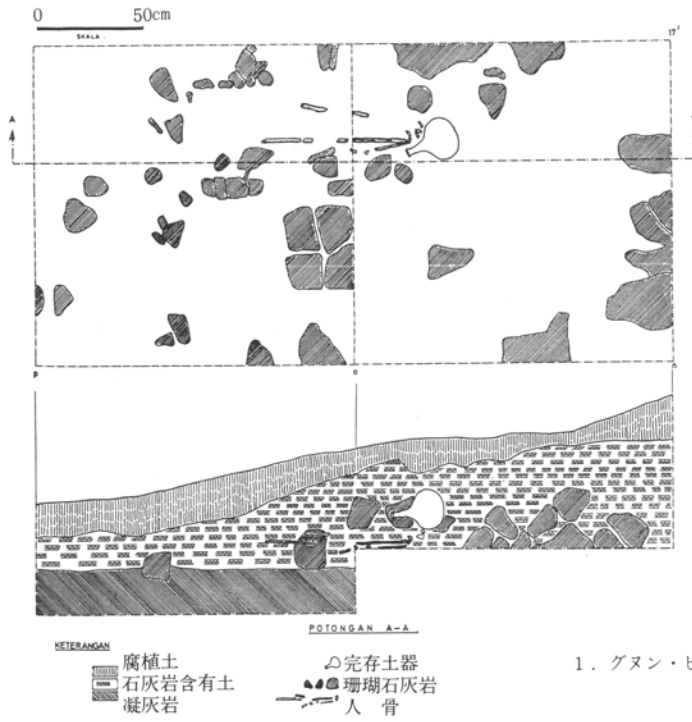
第5図 パカウマンの方形環状列石

した埋葬遺構である。グナディは、この遺構を伸展葬の土壇墓として報告している。しかし図に見られるように人骨と副葬品の周辺には、大小の珊瑚石灰岩があり、特に中心より左側では長方形の配列がうかがえる。遺跡は、海岸より1.5km離れた海拔73mの丘陵上に位置する。この丘陵は、凝灰岩を地山とし、遺構の覆土は石灰岩片を含んでいるが、平面及び断面図より判明すれば、2×0.5mほどに珊瑚石灰岩を長方形に配した配石墓と考えることができる。

トゥルジャン遺跡（第6図-3）は、植民地時代の末には、獣面石像・石坐そしてヒンドゥ・仏教文化の影響を受けた礎石を伴う配石遺構として知られていた。スクンダルは、この約4×5mの配石の中心の空白部と外側の発掘を行った。そして中心部からは、42×180cmの長方形の土壇の中から土器片と丸石を副葬した伸展葬の人骨が発見されている。このことにより、この配石遺構は、呪術的な思想による獣面石像を伴う先史時代から古典時代への変換期の配石墓であることが判明した。また上部には、木造の覆屋建築があったと推定されている。

以上のような配石墓の概念は、ファン・ヒークルンとスヨノは共に触れていない。しかしトゥルジャン例は、そのように考えねば理解することはできず、その起源は、グヌン・ピリン例のようなものにとりあえず想定できる。とするならば、パカウマンの方形環状列石も、同様の遺構である可能性も考えられる。グヌン・ピリン→パカウマン列石→トゥルジャンという系列をもって配石墓あるいは石槨墓という墓制を、今後検討する必要があるだろう。

その他にファン・ヒークルンは、ファン・デル・ヒョープのパセマ地方の研究に基づいて、石

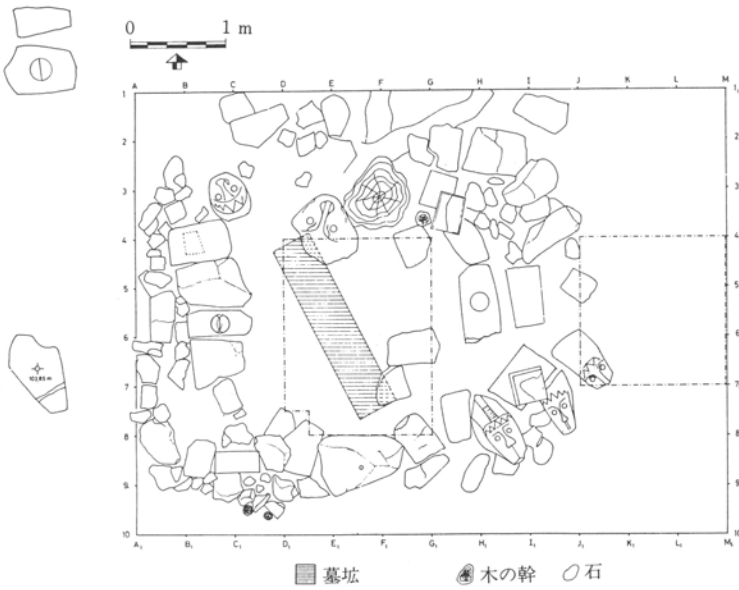


0 10cm

2. 出土土器

1. グマン・ピリン遺跡

Goenadi 1978



墓址発掘図

3. トウルジャン遺跡

Sukendar 1981

第6図 グマン・ピリンとトウルジャンの配石墓

積基壇状墓 terrace-grave というものを上げている。下面の一辺が10m前後の方形の石積基壇の上にさらに数段の基壇がのった階段状ピラミッドのような構造の遺構である。同様のさらに大規模な遺構は、最近西ジャワやバリでも報告されている⁽⁴³⁾。しかし発掘調査例はなく、頂部にメンヒルがある以外、埋葬遺構であることを裏付ける資料は、現在はない。

またスヨノは、石室墓の分類の中に、現在も南スラウェシのトラジャ地方で行われているような横穴墓 rock chamber を含めている。類例は、北スマトラのパタツ Batak 地方、東ジャワのブスキ地方そして東カリマンタンのアポ・カヤン Apo Kayan 地方にもあるとしている⁽⁴⁴⁾。発掘調査例がないため、古いものの年代は不明であり、今後の調査・研究が待たれる。

f. 甕棺墓

甕棺墓には、一次埋葬のものと二次埋葬のものがある。一次埋葬のものは、西ジャワ北西端のアニャル遺跡と中部ジャワ北東端のプラワンガン Plawangan 遺跡が知られており、二次埋葬のものはバリのギリマヌッ Gilimanuk 遺跡、スマバ Sumba のムロロ Melolo 遺跡、ロムバタのレウォレバ Lewolela 遺跡そしてプラワンガンでも発見された。その他埋葬方法が不明のものとしては、南スマトラ南西部のルスンバトウ Lesungbatu 遺跡、中部スラウェシのパダ Pada 遺跡、南スラウェシ北東部のサバン Sabang 遺跡、スラヤール Selayar 島のティレティレ Tiletile 遺跡⁽⁴⁵⁾がある。

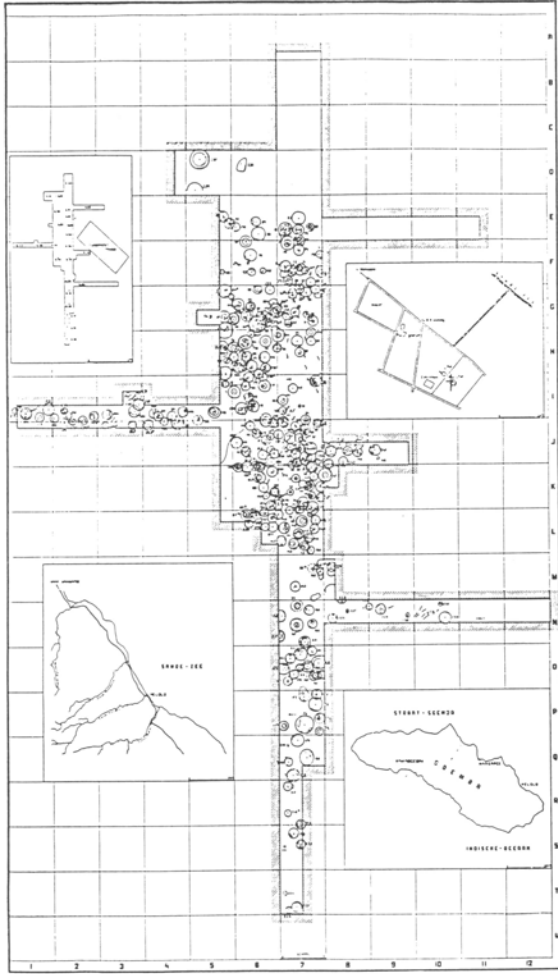
アニャル遺跡(第7図-2)は、1955年にファン・ヒークルンが調査を行って、金属器時代以前の無文土器を使用した文化とした。しかし1979年にスクンダルが行った調査では、銅釧とヘラ⁽⁴⁶⁾描文土器そして玉類⁽⁴⁷⁾が出土した。そのため、ファン・ヒークルンの時代観と土器認識は、訂正されねばならなくなった。なお、一次埋葬・二次埋葬の土壇墓も検出されている。

プラワンガン遺跡は、1977・78年にスクンダルが調査した⁽⁴⁸⁾。ここでは5基の甕棺が土壇墓と重複して発見されているが、4基が二次埋葬、1基が一次埋葬である。二次埋葬の1基は、高さ約25cmの甕を二つ重ねた合わせ口式のもので、類例は、次のギリマヌッだけである。

ギリマヌッ遺跡は、1962年にスヨノが調査しているが、ここも一次埋葬・二次埋葬の土壇墓と重複している。しかしここでの重要なことは、合わせ口甕棺を四肢で抱いた状態で検出された一次埋葬土壇墓の存在である。つまり二次埋葬の甕棺が埋葬される時に殉死した人間は、一次埋葬であった、ということである。

ムロロ遺跡(第7図-1・3)は、これまで調査された最大の出土個数の遺跡で、1939年にウィルレムスによって、学術的な発掘が行われた⁽⁴⁹⁾。調査個数が多いため各種の資料を提供しているが、方角斧や土器・貝釧等の副葬品の構成が示す時代観の相違については前述した。

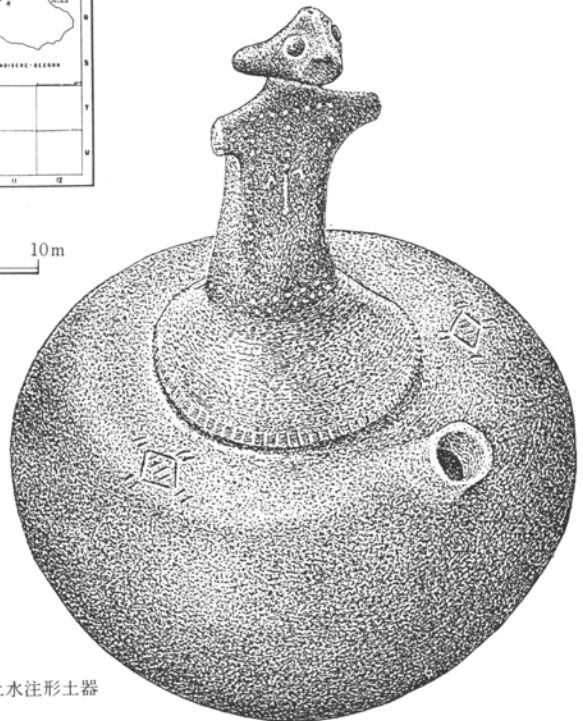
甕棺墓で特徴的なことは、ルスンバトウとパダを除いて、遺跡の立地が海岸部にあることである。このことは、新石器時代と考えられているラムプンのプグン・タムパッでも同様である。海洋民の墓制ということが、大部分では言えるかもしれない。



1. ムロコ遺跡平面図



2. アニャル葬棺



3. ムロコ出土水注形土器

胴径19cm 器高25cm

1・3 van Heekeren 1956a

2 Soejono 1969

第7図 ムロコとアニャルの葬棺墓

8. 土塚墓

現在まで発見されている土塚墓は、一次埋葬では西ジャワのアニャル遺跡、中部ジャワ北東部のプラワンガン遺跡、東ジャワのプスキ地方南部のプグル Puger 遺跡、パリのギリマヌツ遺跡そしてロムバタ島のレウォレバ Lewoleba 遺跡がある。二次埋葬では、上記アニャル、ギリマヌツ両遺跡の他に、中部ジャワ南部のグヌン・ウィンコ Gunung Wingko 遺跡がある。また不明のものでは、西ジャワ北海岸のプニ遺跡がある。

プラワンガン遺跡(第8図)は、前述のように甕棺墓と重複して計7基の土塚墓が確認された。いずれも同一方向をとる伸展葬で、甕・埴・壺・鉢等の土器、鉄製刀子、銅製釣針、ガラス製玉類を副葬しているが、中でも1体の人骨は、腰から足までに3個以上の甕が上に伏せて置かれた状態で出土している。甕棺墓との重複や土塚墓間の重複の新旧関係は不明である。

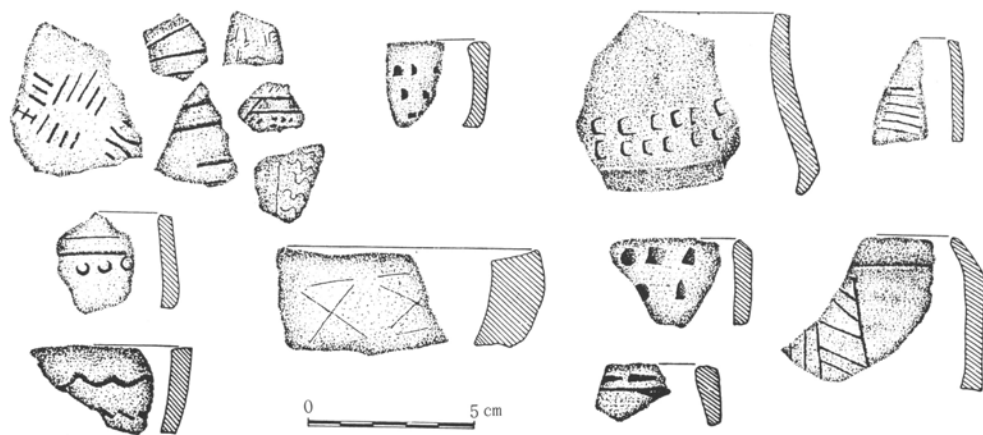
プグル例とレウォレバ例⁽⁵¹⁾は、副葬品を伴っていない。

ギリマヌツでは、前述のように甕棺墓と重複する以外に、一次埋葬・二次埋葬の土塚墓どうしても重複が見られる。祭祀用の青銅斧を副葬した一次埋葬人骨のすぐ上に二次埋葬人骨が積まれている例や、二次埋葬人骨が2個体積まれている例などが見られる。また犬と共に埋葬された一次埋葬もある。このようにギリマヌツの調査例は、極めて多彩で重要だが、前述の甕棺を抱いた一次埋葬人骨の場合のような同時性が、全てについて言えるかどうかについては、不明である。

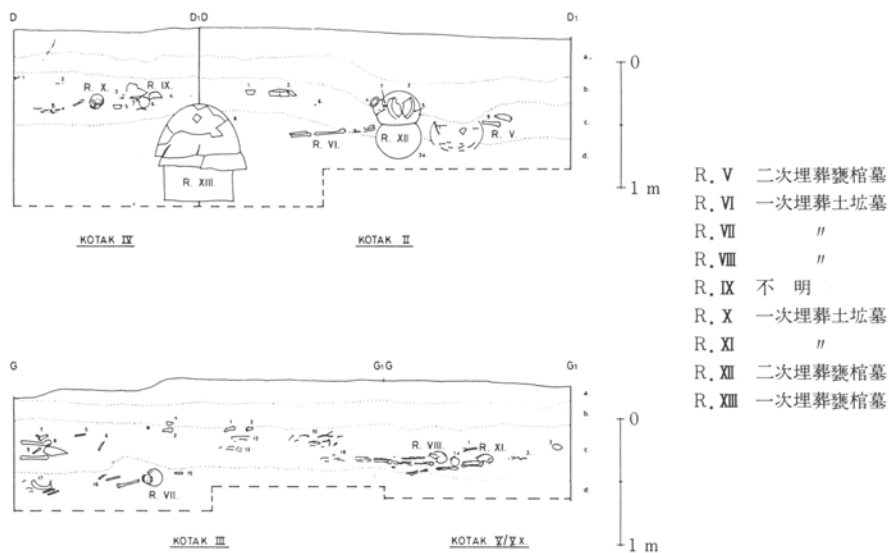
アニャルでは、一次埋葬と二次埋葬は、異った調査地点で発見されている。

以上のように、これまで土塚墓は、アニャル、プラワンガン、ギリマヌツ、レウォレバで甕棺墓と共に発見されてきた。これらについてスヨノは、同一共同体における重要人物が甕棺墓に、その他の一般の人々が土塚墓に埋葬された、と説明している⁽⁵²⁾。確かに前記のギリマヌツの甕棺を抱いた一次埋葬人骨は、そのことを示している。しかし全てがそれで説明しつくせるかどうかについては、断定できない点があるだろう。ギリマヌツにおける一次埋葬と二次埋葬の土塚墓の重複は、そのような視点の中でどう位置づけられるのかは不明である。またプラワンガンの調査で顕著に見られるように、ある意味で機械的に徹底した分層発掘という調査方法のため、土塚墓とは言うが実際に記録されるのは人骨を含めた遺物だけであって、土塚という遺構の記録はない。そのため各埋葬遺構の間の新旧関係が、把握されていない。そのような方法論的な問題が解決されない限り、スヨノの解釈の普遍性については、明らかにしえないだろう。

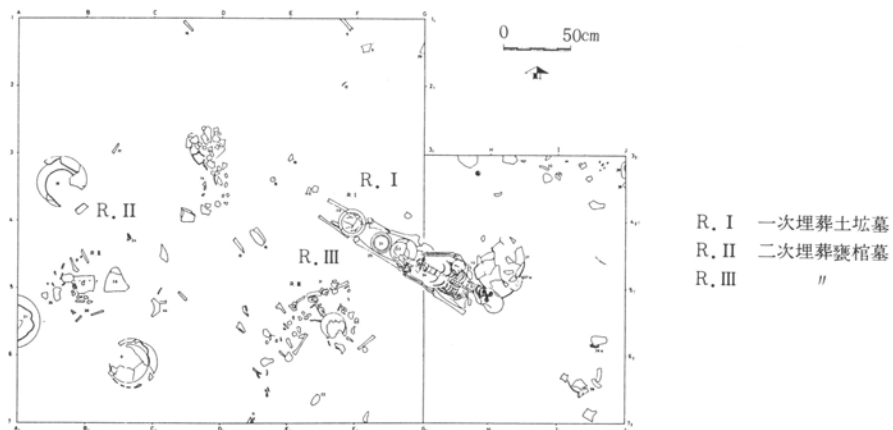
ただ甕棺墓以上に、これまで知られている遺跡の立地が全て海岸部に位置することは興味深い。もちろん土塚墓というのは、最も簡単な埋葬形態であるから、どこにでもあるはずである。しかし海岸部で甕棺墓の立地と重って存在することは事実であり、注目すべき点ではある。なお一次埋葬の伸展葬の場合、ほとんど全てが海岸の走向に平行して同一方向に埋葬されていることも忘れてはならない点である。



1. 出土施文土器片



2. II・IV及びIII・Vグリット断面図



3. Iグリッド平面図

Sukender 1981

第8図 プラワンガンの土壇墓・褒棺墓

VI 小 結

これまで見てきたように、インドネシアの先史時代の墓制は、中石器時代の洞窟埋葬から始まる。新石器時代については、前代からの洞窟での土塚墓の他に、箱式石棺とやや議論が分かれる甕棺が確認されている。そして初期金属器時代になると、急に極めて多様な埋葬形態が発見されている。

この初期金属器時代の各種の墓制をどのように分類・編年し、その起源が何であるかを考え、また古典時代以降の歴史時代の墓制とどんな関係をもっているのか、ということが、全般的な課題となる。そのような中で、ここではこれまで述べてきた分類を簡単にまとめてみる。

- A. 土塚墓・甕棺墓 1.土塚墓 2.甕棺墓（一次・二次埋葬）
- B. 石製墓 I. ドルメン形系列 1.ドルメン 2.舟形石棺墓 3.配石墓（一次埋葬が多い）
 - II. 箱式石棺系列 1.箱式石棺墓 2.横穴式石室墓（一次埋葬）
 - III. メンヒル形系列 1.円筒形石棺墓（二次埋葬） 2.家形石棺墓（一次埋葬）
 - IV. その他 1.石積基壇状墓 2.横穴墓

地域別の分布は、次のようになる。

- A 1 : 西ジャワ・中部ジャワ・東ジャワ・バリ・ロムバタ（海岸）
- A 2 : 南スマトラ・西ジャワ・中部ジャワ・バリ・スンプバ・ロムバタ・中部スラウェシ・南スラウェシ・スラヤール（大部分が海岸）
- B I 1 : 北スマトラ・南スマトラ・ラムプン・西ジャワ・東ジャワ・西カリマンタン（内陸）
 - 2 : 北スマトラ・南スマトラ・東ジャワ・バリ・スンプバ・ティモール・東カリマンタン（大部分が内陸）
 - 3 : 中部ジャワ・ロムボック（海岸に近い丘陵）・東ジャワ（内陸）
- II 1 : 南スマトラ・中部ジャワ（内陸）
 - 2 : 西ジャワ・東ジャワ・西カリマンタン（内陸）
- III 1 : 中部スラウェシ（内陸）
 - 2 : 北スラウェシ（内陸）
- IV 1 : 南スマトラ・西ジャワ・バリ（内陸）
 - 2 : 北スマトラ・東ジャワ・東カリマンタン・南スラウェシ（内陸）

これらの分布は、現段階ではまだ何らかを語るほどのものではない。ただ土塚墓・甕棺墓が海岸部に主体を置き、石製墓が内陸部に分布することは、注目して良い。⁽⁵³⁾もちろん土塚墓は、内陸にも存在する可能性はある。今後の分布調査の進展に期したい。

石製墓では、ドルメン・舟形石棺墓・配石墓・箱式石棺墓・円筒形石棺墓に古い要素が見られる。層位的重複関係を明らかにする調査とそれに裏付けられた土器編年・分類の研究が発展することにより、それらの変遷と年代観への視点が導き出されるだろう。

註

- (1) 蘭印考古局から国立考古学センターへの組織変遷は、Soekmono 1976が詳しい。筆者は概略を紹介したことがある。(坂井 隆 1984 b)
- (2) van Heekeren. 1958。
- (3) Soejono. 1962及び1966。筆者は簡単に紹介したことがある。(坂井 隆 1984 a)
- (4) Soejono. 1962及び Sutayasa. 1972。筆者は簡単に紹介したことがある。(坂井 隆 1984 a)
- (5) Soejono. 1969。
- (6) これら最近の調査例については、筆者は別に紹介を行った。(坂井 隆 1985)
- (7) Soejono. 1977。筆者邦訳 (未刊)
- (8) Jacob. 1967。
- (9) 農耕時代の巨石文化の節に記された石製墓の記述は、ほぼ van Heekeren.1958の抄訳であるが、分業時代の墓制の記述が新説に当たる。両者には若干の相違が見られる。
- (10) van Heekeren. 1972。
- (11) Verhoeven. 1958他。
- (12) van Heekeren. 1972。
- (13) Soejono.1969。
- (14) van der Hoop. 1937。Teguh Asmar. 1982。
- (15) van Heekeren. 1956 a、58。
- (16) Sukendar. 1976。
- (17) Soejono. 1977。
- (18) van der Hoop. 1932。
- (19) van Heekeren. 1958。
- (20) Sukendar. 1979。
- (21) Sukendar. 1982。
- (22) Suleiman. 1976。
- (23) Goenadi. 1977。
- (24) van Heekeren. 1958。
- (25) van Heekeren. 1955。
- (26) van Heekeren. 1958。
- (27) Soejono. 1977 a・b。
- (28) van Heekeren. 1958。
- (29) van Heekeren. 1958。
- (30) van Heekeren. 1958及び Surjanto. 1976。
- (31) Simanjuntak. 1982。
- (32) Kaudern. 1938。
- (33) Sukendar. 1980。
- (34) Hadimuljono. 1976。
- (35) van Heekeren. 1958。
- (36) de Bie. 1932。この壁画は、現在ジャカルタ国立中央博物館に収蔵されている。
- (37) van Heekeren. 1958及び Soejono. 1969。
- (38) Soejono. 1969。
- (39) van Heekeren. 1958。
- (40) Soejono. 1977及び Goenadi. 1977。
- (41) van Heekeren. 1958。
- (42) Goenadi. 1978及び Sukendar. 1981。筆者は別に紹介を行った。(坂井 隆 1985)
- (43) 西ジャワ南東部のチソロツ Cisolok 地方 (Sukendar. 1977) とバリ北部のスムビラン Sembiran (Sutaba. 1976)。このような遺構は、古典時代のヒンドゥー・仏教寺院のポロブドゥル Borobudur (8世紀) やスク Sukuh (15世紀) にも影響が残っている。(千原大五郎 1982) 先史時代と古典時代を結ぶ基層文化の遺構として重要な意味を持っており、今後の研究課題としたい。
- (44) Soejono. 1969。
- (45) van Heekeren. 1958。
- (46) van Heekeren. 1956 b。
- (47) Sukendar. 1982。
- (48) Sukendar. 1981。筆者は別に紹介を行った。(坂井 隆 1985)
- (49) Soejono. 1962、66、69。
- (50) van Heekeren. 1956 a、58。

- (51) Soejono. 1969.
 (52) Soejono. 1969, 77.
 (53) インドネシアの歴史の全課程を通して、各島間の文化的相違以上に、各島における海岸部と内陸部の相違が見出される。海岸部の外来的・交易的要素と内陸部の在来的・農耕的要素の対立・融合・調和の歴史が、初期金属器時代から始まっていたことを示している、と思われる。

Isi Singkat

Pendahuluan Penelitian Cara Penguburan pada Zaman Prasejarah di Indonesia

oleh : Sakai T.

Dalam karangan ini, saya memperkenalkan berbagai cara penguburan pada zaman prasejarah didasarkan penelitian-penelitian oleh van Heekeren, R.P. Soejono dan H. Sukendar dll. Terhadap usaha-usaha mereka saya sangat menghargainya dalam bidang ini pada arkeologi Indonesia.

Namun demikian, diantara teori-teorinya dilihatkan juga perbedaan, terutama tentang penggolongan penguburan pada zaman logam-awal dirasakan perlunya perbaikan dari pandangan yang lain.

Dengan tujuan itu, maka saya berpikir mengenai masarahnya sebagai kesimpulan sementara dalam karangan ini, seperti berikut :

A. Kebudayaan penguburan tanpa wadah dan tempayan

1. makam tanpa wadah
2. makam tempayan

B. Kebudayaan penguburan batu

- I. Aliran dolmen
 1. makam dolmen
 2. makam sarkofagus type dolmen (Bali, Besuki)
 3. makam pasangan batu kecil (Gunung Piring, Terjan)
- II. Aliran kubur peti batu
 1. makam peti batu
 2. makam batu dengan pintu masuk samping (Pakauman)
- III. Aliran menhir
 1. makam sarkofagus bentuk silinder (kalamba)
 2. makam sarkofagus bentuk rumah (waruga)
- IV. Aliran lain
 1. makam undakan batu
 2. makam gua buatan (Toraja)

Agar memperdalam dan mengembangkan penelitian cara penguburan zaman ini, saya mengharap kemajuan typologinya yang tepat didasarkan ekskavasi secara stratigrafi yang menjelaskan hubungan baru-dahulu tentang gejala-gejala dalam satu situs, dan penelitian kronologi/typologi gerabah supaya dapat digunakan sebagai alat pengukuran angka waktu.

参 考 文 献 (原則として入手しやすいものに限った)

- 略号 AAI : Aspek-Aspek Arkeologi Indonesia
 AP : Asian Perspectives
 BARI : Bulletin of the Archaeological Institute of the Republic of Indonesia
 BPA : Berita Penelitian Arkeologi
 PPAN : Pusat Penelitian Arkeologi Nasional
 PPPN : Pusat Penelitian Purbakala dan Peninggalan Nasional
 TBG : Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde het Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen
 VKI : Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde
- Bie, C.W.P. de 1932. "Verslag van de outgraving der steenen kamers in doesoen Tandjoeng Ara, Pasemah-Hoobvlakte", TBG, 72
- Goenadi Nitihaminoto 1977. "Survai di Kalimantan Barat", BPA, 6
- Goenadi Nitihaminoto 1978. "Laporan Ekskavasi Gunung Piring", BPA, 17
- Hadimuljono 1976. "Survai di daerah kabupaten Minahasa, Sulawesi-Utara", BPA, 3
- Heekeren, H.R. van 1955. "Proto-Historic Sarcophagi On Bali", BARI, 2
- Heekeren, H.R. van 1956a. "The Urn Cemetery At Melolo, East Sumba", BARI, 3
- Heekeren, H.R. van 1956b. "Note on a Proto-Historic urn-burial site at Anjer, Java", *Anthropos*, 51
- Heekeren, H.R. van 1958. "The Bronze-Iron Age of Indonesia", VKI, 22
- Heekeren, H.R. van 1972. "The Stone Age of Indonesia", VKI, 61
- Hoop, A.N.J.Th.aTh. van der 1932. Megalithic Remains in South-Sumatra
- Hoop, A.N.J.Th.aTh. van der 1937. "Een steenkistgraf bij Cheribon", TBG, 77
- Jacob, Teuku 1967. Some Problems Pertaining to the Racial History of the Indonesian Region
- Kaudern, W. 1983. Megalithic finds in Central Celebes, *Ethn. Studies Celebes*, V.Goteborg
- Simanjuntak, Truman 1982. "Perkembangan Bentuk Kebur di Tanah Batak", *Amerta*, 6, PPAN
- Soejono, R.P. 1962. "Indonesia (regional report)", AP, 6
- Soejono, R.P. 1966. "Gilimanuk, an early metal age settlement, a preliminary report on archaeological excavation", A paper presented at the XIth Pacific Sciens Congr., Tokyo
- Soejono, R.P. 1969. "On Prehistoric Burial Methods in Indonesia", BARI, 7
- Soejono, R.P. 1977a. Sejarah Nasional Indonesia jil. I Zaman Prasejarah di Indonesia. Jakarta, Balai Pustaka
- Soejono, R.P. 1977b. Sistim-sistim Penguburan pada Akhir Masa Prasejarah di Bali.
- Soekmeno, R. 1976. "Sedikit Riwayat", 50 Tahun Lembaga Purbakala dan Peninggalan Nasional 1913-1963, PPPN
- Sukendar, Haris 1976. "Survai di daerah Lampung", BPA, 2
- Sukendar, Haris 1977. "Penelitian Prasejarah di Jumpangkulon dan Sekitarnya, Jawa-Barat", BPA, 10
- Sukendar, Haris 1979. "Laporan Penelitian Kepurbakalaan Daerah Lampung", BPA, 20
- Sukendar, Haris 1980. "Laporan Penelitian Kepurbakalaan di Sulawesi Tengah", BPA, 25
- Sukendar, Haris 1981. "Laporan Penelitian Terjan dan Plawangan I. II", BPA, 27
- Sukendar, Haris 1982. "Laporan Survai Pandeglang dan Ekskavasi Anyar 1979", BPA, 28
- Suleiman, Satyawati 1976. "Survai Sumatra Utara", BPA, 4
- Surjanto, D. 1976. "Survai di daerah Sumatra Selatan", BPA, 2B
- Sutaba, I.Md. 1976. "Megalithic Traditions in Sembiran-North Bali", AAI, PPPN
- Sutayasa, I.Md. 1972. "Notes on the Buni Pottery Complex, North-West Java", *Mankind*, 8
- Teguh Asmar 1982. "Peti Kubur Batu Kuningan", *Pertemuan Ilmiah Arkeologi keII*, PPAN
- Verhoeven, Th. 1958. "Proto-Negrito in den Grotten auf Flores", *Anthropos*, 53
- 千原大五郎、1982. 『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』、鹿島出版会
- 坂井 隆、1984 a. 「インドネシアにおける最近の土器作り調査例」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』 1
- 坂井 隆、1984 b. 「最近のインドネシアの考古学研究と調査について」『東南アジア考古学会会報』 4
- 坂井 隆、1985. 「カラムバと甕棺」『東南アジア 歴史と文化』 14. 東南アジア史学会、平凡社

ローム層中に見られる逆転層の存在 とその意味について

岩 崎 泰 一

はじめに

70年代前半に開始された上越新幹線・関越自動車道関連の調査も83年度をもって一応終了し、県内では10数カ所に及ぶ遺跡の整理が一斉に行われている。これらの調査によって得られた所見の一部はすでに公表されているが、今後、報告書が刊行されていくことにより様々な問題が提起されていくことは想像に難くない。一方、県下ではいたるところで、膨大な面積を対象とするほ場整備事業が実施されており、地域の実体が遺跡の消滅という代償として⁽¹⁾に明らかにされつつある。

こうした状況下にあって、これまでその実体が不明であった先土器時代遺跡も赤城山南・西麓をはじめとして、県内各地より10数カ所に及ぶ遺跡の調査が実施され、今後、詳細な分析が行われるものと思われる。

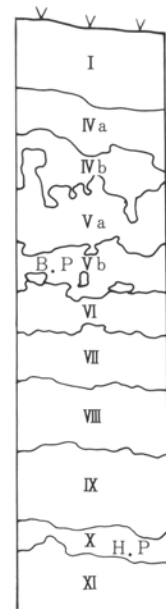
本稿は赤城山南・西麓⁽²⁾に所在する下触牛伏遺跡、勝保沢中ノ山遺跡⁽³⁾に見られたローム層中の逆転現象の存在の意味と、それから派生するいくつかの問題について若干の指摘を行うものである。

ローム層中の逆転現象の具体例

a. 県内事例

下触牛伏遺跡（佐波郡赤堀村大字下触）

遺跡は赤城山南麓端部に位置する。赤城山は北東側の足尾山系と接する部分を除いて広大な裾野を形成している。これらの地域では標高500m付近で、山地形から丘陵性地形への変換点が見られる点で共通する。北・西麓では片品川、利根川等の河川による浸蝕を受け、その末端部が段丘状となり、また、山麓から湧出する小河川による深い開析谷が形成されている。これに対して、南麓は南西・南東側を旧利根川及び旧渡良瀬川による浸蝕が一部に見られるものの、標高200mより下位の地域では低台地化した地形観を呈し、他にくらべて湧水等による開析が顕著である。遺跡の周辺は山麓より湧出する小河川による開析が著しく、小規模で複雑な沖積地が形成され、遺跡はこうした沖積地に挟まれた南北に細長い台地上に立地する。検出された遺構・遺物は先土器時代文化層2枚、縄



第1図 下触牛伏遺跡
基本土層図 (S = 1/30)

文時代前期住居址3軒、土塚50余基、古墳時代後期住居址13軒、同後期古墳11基が、他に縄文時代創草期・早期・中期・後期の土器・石器類が出土している。

基本土層（第1図） 観察された土層の堆積状況は付近のそれと一致し、南麓における標準的土層となるものと思われる。I層・耕作土。II層・黒色土層（浅間C軽石を混入）。III層・暗褐色土層（ローム粒子をブロック状に混入。II・III層は古墳盛土下にもみ観察された）。IV層・軟質ローム層（若干の粒度・色調の差により細分。上層はより風化が進んでおり、創草期爪形文をはじめ各型式の土器が混在して出土する）。V層・硬質ローム層（上半部の白色パミス⁽⁴⁾と下半部の板鼻褐色軽石層のブロックを特徴として細分。分層は色調の明暗による）。VI層・橙色ローム層（台地平坦部では安定して堆積しているが、傾斜部では軟質となり安定感に欠ける）。VII層・茶褐色ローム層（所謂「暗色帯」で上位部分にA・Tの極大値をもつ）。VIII層・褐色ローム層。IX層・褐色ローム層（VIII層に比べて硬質で、黒色粒を混入）。X層・八崎軽石層（H・P）。

ローム層中の逆転現象 今回の調査で観察されたローム層中の逆転現象は10数カ所に及んだ。これらのローム層中の逆転部の調査は時間的な制約もあって完掘し得たのはわずかであり、ほとんどは断面観察にのみ終わった。埋没土層と遺物の出土位置の関係等充分検討することができなかった点もあり、今後、調査方法の検討の必要性を痛感している。断面の観察及び確認状態よりローム層の逆転現象が形成された時期にバラエティーを把握することができた。ローム層中の逆転現象の形成された時期がIV層中にあるもの、Vb層中にあるもの、VII層あるいはVIII層中にあると考えられるものである。形状は、不整円形を基調とし浅い皿状を呈するもの、中央部が高く周辺が深い溝状を呈するもの、スリ鉢状を呈するもの等が認められた。

第3図1は調査区南端の断面に観察されたもので、ローム層の逆転現象の形成時期がIV層中にあるものである。一部、縄文時代の土塚によって切られている。そのため、流入した埋没土層の状態は明確にし得なかったが、VII・VIII層より上位のローム層の逆転現象が明確に見られた。形状は長径3m余・深さ1m程の楕円形を呈するものと思われる。底面の状態は若干の凹凸が認められた。第3図2はVIII層上面で確認されたものである。形状は長径2.08m・短径1.76m・深さ0.3~0.5mを測る不整円形状を呈している。断面形は中央部が浅く、北側を除く周辺部が深くなっている。埋没土層は八崎軽石層をとりこんだVII・VIII層がブロック状に堆積していた。なお、一部石器ブロックと重複しており、埋没土層上位部分より剥片類が出土している。

勝保沢中ノ山遺跡（勢多郡赤城村大字勝保沢）

遺跡は赤城山西麓に位置する。遺跡の所在する台地は山麓より湧出する小河川の開析により東西方向に細長い丘陵性台地となっており、遺跡調査区内には原形面形成時の凹凸による高まりや、沖積世の古い段階で形成された高まり等が見られ、起伏に富んだ地形観を呈している。検出された遺構・遺物は先土器時代文化層2枚、縄文時代前期住居址、土塚、古墳時代中期住居址、階段状遺構、奈良時代土塚墓等がある。

基本土層（第2図） 土層観察用の深掘りは、八崎軽石層（H・P）までを確認している。

観察された土層の堆積状態は付近のそれと一致し、西麓における標準的な土層⁽⁵⁾となっている。本地点では確認されなかったが、八崎火山灰層(H・A)⁽⁶⁾と呼ばれる降下軽石層が広範囲に分布していた。VII層以下がローム層となっている。VII層・黄褐色ローム層(白色パミス混入。比較的硬質で上面は激しいクラック帯をなす)。VIII層・浅間白糸軽石層(S・P)。IX層・褐色ローム層。X・XII・XIV層・板鼻褐色軽石層(B・P)。XI・XIII層・褐色ローム層。XV層・茶褐色ローム層(B・Pを若干混入。含カーボン)。XVI層・茶褐色ローム層(上位部分にA・Tの極大値、部分的にA・Tの純層を確認)。XVII層・茶褐色ローム層(灰白色の軽石をわずかに混入し上層よりもやや黒味を増す。所謂「暗色帯」か)。XXI層・茶褐色ローム層(灰白色の軽石を混入。上層よりも明るい色調を呈す)。XXII層・八崎軽石層(H・P)。

ローム層中の逆転現象 今回の調査で観察されたローム層中の逆転現象は、そのほとんどがXV層より下層に存在した。唯、確認面はXVII層上面であったりXVIII層上面であったが、こうしたローム層中の逆転現象の形成時については必ずしも明確にし得なかった。形状は断面形がスリ鉢状、あるいは皿状を呈するものがほとんどであった。

第3図4はA区中央部付近で検出されたもので、XV層が確実に落ち込んでいた。断面観察の結果XVIII・XIX層より上位のローム層が逆転し、XV層が流れ込むかのように埋没していた。長径1.84m・短径1.72m・深さ0.36mを測り、断面形はスリ鉢状を呈していた。遺物は出土していない。

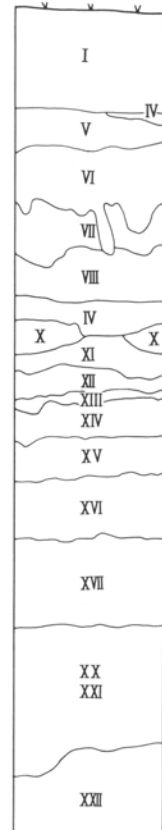
第3図3はA区南西部付近で検出されたもので、近接して2カ所の石器ブロックが存在する。XVI層上面で検出された。断面観察の結果、XVIII・XIX層より上位のローム層の逆転が見られた。長径1.36m・短径0.88m・深さ0.28mを測り、断面形はスリ鉢状を呈する。遺物は底面から約10~15cm浮いた状態でナイフ形石器1・剥片2点が出土している。これらの出土遺物はXV層が流れ込んだと思われる流入土中より出土している。

b. 県外事例

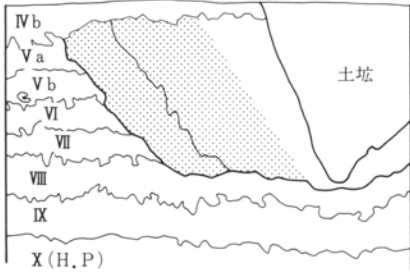
ここで取り上げたローム層中の逆転層の存在に言及した文献はほとんどないと思われるが、類似した状況(埋没土層・完掘状態等のあり方)にあるものを、これまで管見にふれた報告の中から抽出したい。

⁽⁷⁾
東京都多聞寺前遺跡1号土坑

本例は台地平坦部のVII層上面で検出された。平面形は楕円形状を呈し、長径1.36m・短径1.12m・深さ0.28mを測り、断面形は皿状を呈している。埋没土層は6層よりなる。報告者は土坑の検出層位と検出された文化層の関係・石器ブロックとの位置的な状況から人為的要因、つまり、遺

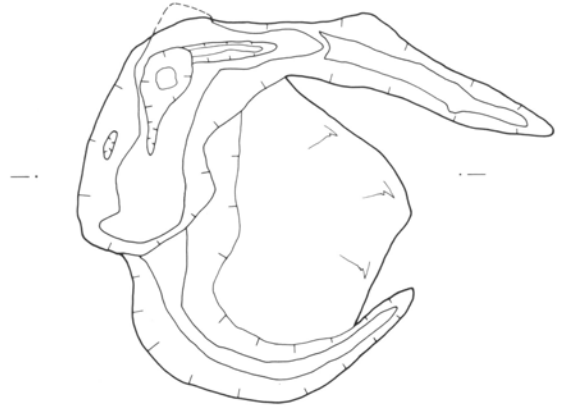


第2図 勝保沢中ノ山遺跡
基本土層図 (S = 1/40)

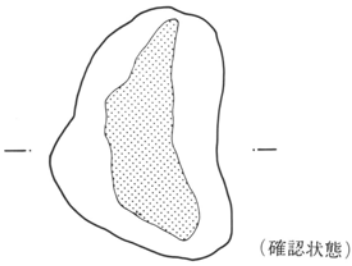


1

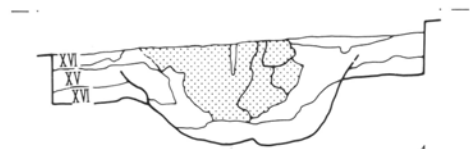
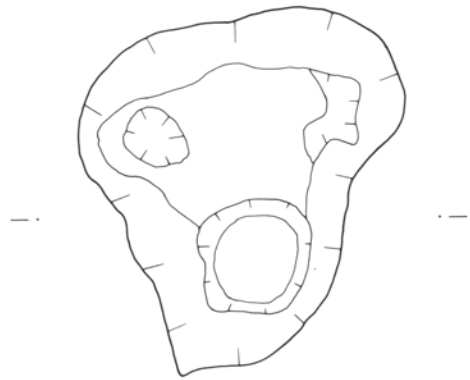
下触牛伏遺跡例



2



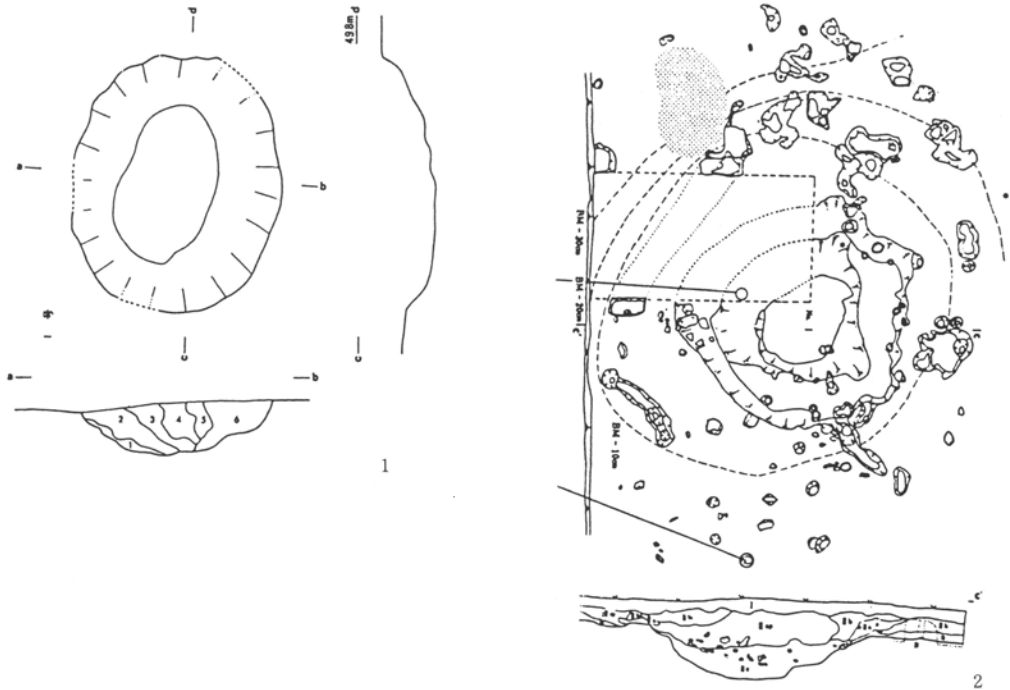
3



4

勝保沢中ノ山遺跡例

第3図 ローム層中の逆転現象 (県内事例) (S=1/40)



第4図 ローム層中の逆転現象 (県外事例)

構の可能性を薄いものと考えているようであるが、最終的には人為的・自然的要因のどちらにも態度を保留している。ここで問題となるのは、「覆土」の項の中で「下位に位置するIX層とよく似た土質」がVII層上面の平面精査の段階で観察されたことであり、埋没土層が「レンズ状堆積」を示していない点である。6層に分層された埋没土のうち、1・2層は流入土である。「同一視できそう」な2・6層に挟まれた3～5層がIX層に近似する点で、県内二遺跡検出例と同様な埋没土層のあり方を呈しているものと思われる。この他に2基の土塚が示されている。これらは検出層位・石器ブロックとの位置関係・遺物の有無から人為的遺構として扱われている。3号土塚については土層の堆積状態が示されていないので不明であるが、2号土塚に関しても土層の堆積状態・完掘状態から人為的要素は認められないものと思われる。

(8)
鹿児島県上場遺跡1号住居址

報告書の刊行されていない段階で不明な点も多く本例を取り上げるのは妥当でないかもしれないが、遺構であるか否かについて議論をするうえで、基礎資料となりうるものと思われる。以下近接して検出された2号住居址とともに分析・検討を行ってみたい。

住居址は丘陵性台地のIV層上面で検出された。報告者は遺構外縁部の安山岩礫石・柱穴・土堤状施設および遺物の出土状況などから住居址および周辺の空間利用を示すものと把握している。

住居地の規模および形状は 1 号住居地：長径4.0m・短径3.41m・深さ0.7m、2 号住居地：長径6.5m・短径5.25m・深さ0.5～0.6mを測り、形状は各々不整形円形状を呈している。1 号住居地は部分的にテラス状の平坦部が見られるものの、スリ鉢状を呈するのに対して、2 号住居地はわずかに凹凸のある広い平坦部を有し、壁は緩く立ち上がっている。2 号住居地は柱穴をほとんど持たないが、1 号住居地には住居地内外に多数の柱穴が見られる。埋没土層のあり方は 2 号住居地については不明であるが、埋没土層の示されている 1 号住居地では、IIa 層がかなり乱れた状態で堆積していることが認められる。以上が報告された住居地の概要であるが、住居地の規模・形状を除いて、共通する要素の少ないことが理解される。本例から直接ローム層中の逆転現象を説明することはできないが、少なくとも完掘状態に見られる諸要素からは住居地と判断する積極的な根拠に乏しいものと思われる。

ローム層中に見られる逆転層の意味

これまで報告された中にもローム層中の遺構⁽⁹⁾として明らかにそれと断定されるものは、意外に少ないのではないと思われる。多くの場合埋没土層については表記していない事例が多く、土層の検討を報告書の中から行うことは困難であるが、形状が著しく不整形であり、ローム層が堆積する際の環境を勘案しても人為的所産としての遺構として把握するには躊躇せざるを得ない。私たちは遺構検出のための努力を全く怠っていたということではなく、むしろ、様々な努力を他の時代の遺構検出にもまして行ってきたと言える。にもかかわらず、明確に遺構として扱えられるものは該期調査例に比べて極めて少ない。こうした要因には、社会的・経済的形態を反映した遺構の量比の問題は別として遺構が構築されなかったということではなく、遺構・遺物が包含されているローム層中から視覚的に遺構を把握することの困難な点に集約されるものと思われる。本稿でとりあげたローム層中に見られたローム層の逆転現象の存在は、すでに指摘されている「風倒木痕」⁽¹⁰⁾と同様な現象として理解することができる。それは遺跡調査に際して観察される埋没土層のあり方、及び、完掘された形状という点に関しての現象である。こうしてローム層中の逆転現象を「風倒木痕」と判断するわけで、そこには遺物の有無などといった事象は全く判断材料となり得ない。現状でローム層中から人為的所産としての遺構の検出が困難であることを考え合わせれば、ローム層中の逆転現象がわずかながら他地域にも認められたことは「風倒木痕」の形成される要因から推定して全国的に分布の広がる可能性が高く、また、形成された時期にパラエティーが認められる点においても、自然営力を反映した所産であるとされる「風倒木痕」として扱っても何ら矛盾は生じ得ないものと思われる。

今後の先土器時代研究は、これまでの研究史上の成果に立って発展的に展開していくことは言うまでもない。それは接合資料・母岩別資料を抽出することによって、厳密な意味での同時性をもつ石器群を動的に把握する可能性をもつものであると言える。唯、母岩別資料の完全な把握が困難であることは誰もが認めようし、そこから抽出された石器群の動態にはおのずと限界がある

ものと思われる。また、周水河現象等による遺物の移動、遺構構築による人為的移動の他に、ここで指摘したローム層の逆転現象による移動も十分に考慮すべきであり、単位石器群の把握には諸々の作業段階を経てもなお不確定要素を払拭し得ないことが理解される。調査区内から出土した石器群の分析をとおして得られた情報には様々なレベルの情報があることを、報告する側もされる側も認識し、留意すべきかと思われる。

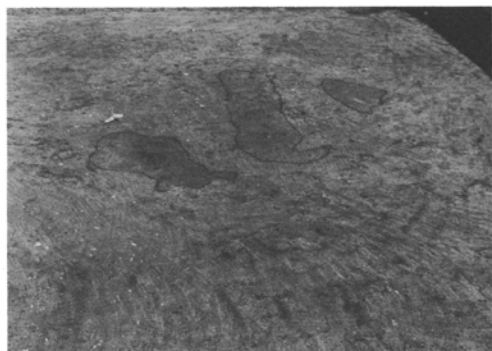
おわりに

本稿は、所謂「風倒木痕」と同様な現象がローム層中にも存在することの事例報告であり、それから派生するだろう問題点について若干の私見を述べてきた。ローム層中の「風倒木痕」の存在は、これまで花粉分析をとおして知られてきた植生のひとつの証しであろうし、人々をとりまく観景のひとつであったと思われる。同時に、それは当時の経済活動のひとつにとりこまれていたことが予想されるものである。今後は今回の調査の不備な点を補いつつ、ローム層中の逆転現象と遺物の関係を具体的に例示してみたいと思っている。

なお、本稿を草するにあたり、能登健氏には種々の御助言をいただいた。また、掲載資料の公表について承諾をいただいた関係諸氏、及び、図版作成等協力を願った田村栄子・保坂雅美・長谷川春美の諸氏に記して感謝いたします。

註

- (1) 能登健・中東耕志・原雅信・相京建史・右島和夫・飯田陽一「群馬県における地方史研究の動向・考古」『群馬文化』第200号1984年
- (2) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報3』1984年
県立博物館「遺跡は語る—最近の発掘調査の成果—」第17回企画展図録1984年
- (3) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報2』1983年
- (4) 新井房夫他「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』1984年
- (5) 谷藤保彦「最近の先土器時代の遺跡調査から—房谷戸遺跡のローム層について」『埋文月報』35 群馬県埋蔵文化財調査事業団1983年
- (6) 赤城山西麓における関越自動車道関連の遺跡間に共通して検出されたものである。軽石層と灰層より構成され、給源は榛名山であると思われる。新井房夫氏によれば、以前「Ag-KP」（鹿沼軽石層）と並行するものとして「K・P」と称していたものと同一である。
- (7) 鶴丸俊明編『多聞寺前遺跡発掘調査報告書II』多聞寺前遺跡調査団1984年
- (8) 池水寛治「鹿児島県・上場遺跡」『日本考古学年報28』1975年
- (9) 鈴木忠司氏によれば、これまでに発見された遺構は礎群・配石を除いて54カ所にのぼるとされている。これらの中でも明確なものは少なく、とりわけ住居の構築を一般化することは困難であるとされている。
鈴木忠司「旧石器人のイエとムラ」『季刊考古学4号』1983年
- (10) 能登健「発掘調査と遺跡の考察—いわゆる性格不明の落ち込みを中心として—」『信濃』第26巻3号1974年



勝保沢中ノ山遺跡 風倒木痕 確認状態
XVII層上面で確認されたXVI層の落ち込み。北側から。



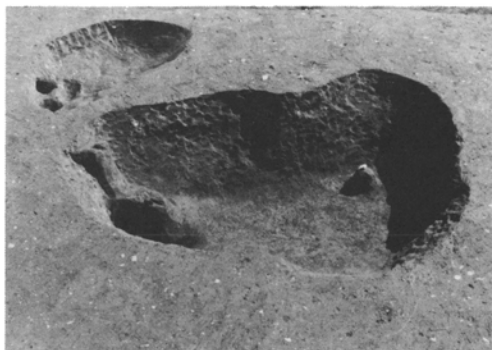
勝保沢中ノ山遺跡 風倒木痕 土層堆積状態
上面はXIV層を除去した状態。白色軽石（八崎火山灰層）を含むローム層の逆転現象。



勝保沢中ノ山遺跡 風倒木痕 土層堆積状態
白色軽石（八崎火山灰層）を含むローム層の逆転現象。
南側から。



下触牛伏遺跡 風倒木痕 土層堆積状態
VII・VIII層より上位のローム層の逆転現象。土層観察用のトレンチより確認された。



勝保沢中ノ山遺跡 風倒木痕 完掘状態
流入土（XV層）中よりナイフ形石器1、剥片2が出土した。西側から。



下触牛伏遺跡 風倒木痕 完掘状態
周辺が溝状に落ち込む例。VIII層上面で確認された。

板碑に刻まれた紀年銘に関する一考察

新 倉 明 彦

1. はじめに

近年、県史や市町村史の編纂が全国的に進められるなかで、板碑をはじめ五輪塔・宝篋印塔などの石造物の集成が積極的に行なわれている。また、板碑が多く所在する地域においては、『埼玉県板石塔婆調査報告書』（『板碑』S56）・『東京都板碑所在目録』（S54・55）・『青梅市の板碑』（S55）などのように板碑のみを取り上げて集成したものも刊行され、地域における資料集成が盛行しつつある。この研究の基礎ともいえる集成という作業は時間と手間のかかる作業ではあるが、重要な作業であり、かつ早急に行なわれなければならない作業である。一般に石造物というと、他の資料から比べると大きく、何よりも石でできているため、いかにも頑丈で半永久的に残り続けるかのように思われがちであるが、その数は確実に減少し続けている。発掘調査等により出土する板碑もあり、数量が増えていると思われるかもしれないが、かつて集成されたものを今日再集成を行なおうとした時に確認できない板碑が多い。まして集成もされず消えてゆく板碑の数は、新たに検出される板碑の数を上まわっているに違いない。こうした現状にあり、地域における板碑の集成が盛行しつつあることは大変喜ばしいことである。未集成地域の集成が早急に行なわれることを改めて切望する。

集成作業の必要性和重要性は記したとおりであるが、集成が行なわれたからといって、その数量や美術品的な価値だけで満足しては資料の持つ価値の半分も活かされていないといえよう。集成された資料を整理し、問題点を明らかにしていかなければならないと思われる。そこで本稿では集成された資料の操作方法のひとつとして、板碑に刻まれた紀年銘(年月日)を取りあげて論じてみたい。ここで資料として取り上げた板碑とは、秩父系の緑泥片岩(青石)を石材として用いた青石卒塔婆(武蔵型板碑)と呼ばれるものであり、他の石材を用いて造られたものではなく、その名称についても慣用語として「板碑」の名称を用いることをあらかじめ御了承願いたい。

2. 本 論

板碑の紀年銘とは碑面に刻まれた年月日のことである。板碑にはこの紀年銘が刻まれているために絶対年代の決定が可能な中世遺物としての価値も生まれてくる。しかし、ここで問題になるのは、この記された年月日が板碑の何を示すかということである。ここで考えられるものをあげてみると、まず、供養塔という性格から被⁽¹⁾供養者の没年時・被⁽²⁾供養者の忌日・造立者が板碑を造立し供養を行なった日・また、以上の他に被⁽¹⁾供養者に何らかの形で関係が深い日・板碑を工作(彫刻)した日付などが考えられる。これらの中で最後にあげた板碑を工作した日付というのは、他と異なり別問題を含むと思われる。そこで、板碑の銘文上の年月日が、それを刻んだ日か否かを知

の方法として、かつて千々和到氏は「東国における仏教の中世的展開—板碑研究の序説として—」(『史学雑誌』82-2・82-3所収)の中でひじょうに参考となる試みを行なった。それは、改元のあった年の銘をもつ板碑を資料に、その旧年号と新年号の重なり合う時期をとらえるという試みである。氏はこの試みの中で、まず、東国の人々が改元を知るのに約1カ月間を要し、その後新年号が一般に通用したと仮定し改元のあった年の銘をもつ板碑のうち、(1)改元前の日付であるのに新年号(3)を使用している場合、(2)改元後の日付であるのに旧年号を使用している場合、(3)改元後1カ月以内に新年号を使用している場合の板碑をあげている。表にすると次の表1のようなになる。氏は、この結果(1)・(3)の6例の板碑は新年号の遡及使用にあたりとし、記されている日付は改元前の日

表 1

(1)改元前の日付であるのに新年号を用いている場合(2例)

西暦	紀年銘	改元日
1306	徳治元年丙午十月廿日	12月14日
1312	正和元年二月日	3月20日

(2)改元後の日付であるのに旧年号を用いている場合(6例)

西暦	紀年銘	改元日
1278	建治二年四月日	2月29日
1302	正安二年壬寅十一月廿四日	10月21日
1311	延慶四年辛亥五月十日	4月28日
1317	正和六年三月	2月3日
1321	元応三年三月	2月23日
1329	嘉暦二年十月日	8月29日

(3)改元後一ヶ月以内に新年号を用いている場合(4例)

西暦	紀年銘	改元日
1311	応長元年辛亥五月廿日	4月28日
1317	文保元年二月	2月3日
1321	元享元年辛酉二月廿九日	2月23日
1324	正中元年甲子十二月	12月9日

(※資料として用いた板碑はすべて埼玉県比企郡・大里郡・児玉郡に在するものを使用している)

氏は氏が資料として用いた板碑を、埼玉県の比企・大里・児玉の3郡に在するもの限定し、その資料を用いて出された結論であり、これがはたして他地域においても同じことが言えるかどうか疑問である。

そこで私は、東京都23区内に現存する板碑(確実に他所から移入されたものは除く)を資料に、千々和到氏と同じ様な方法で改元のあった年の銘をもつ板碑を選び出し、それを(1)改元前の日付であるの

付であり、工作(彫刻)した日は改元後であり、すでに通用している新年号を用いたと解している。また、(2)の改元後に旧年号を使用している6例の板碑に対して次のように説明している。「造立者が改元後、改元を知る前の短い期間に造立したものであり(註=6例がいずれも改元後1カ月程度以内であることに注目したい)従って、銘文上の年月日とそれを刻んだ年月日は一致せぬにしてもそのズレは小さくなければならないであろうと。」

氏の試みにより、板碑の紀年銘は、それを工作(彫刻)した日付ではないことは明らかにされた。しかし、氏が述べている年代表示の誤りの理由が、単に造立の時期に求めている点や、また、埼玉県の3郡以外の地域の場合でも同様のことがいえるかどうかなどの疑問が残るため、それらについて述べてみたい。

氏は(2)の改元後の日付であるのに旧年号を使用している場合の板碑に旧年号が使用されている理由として、造立者が改元を知らなかったためであると解し、しかも、改元の行なわれた年月日と銘文上の年月日との誤差は一カ月程と小さく、故に、銘文上の年月日と実際にその板碑を工作(彫刻)した年月日との誤差は小さくなければならないとするのである。しかし、この結論

に新年号を用いている場合の板碑、(2)改元後の日付であるのに旧年号を用いている場合の板碑(改元後間もなく、旧年号を用いて当然と思われるものは除いた)、(3)改元後一カ月以内に新年号を用いている場合の板碑とし、次の表2の表にまとめた。この結果、(1)・(3)の新年号の遡及使用については後で述べるとして、まず(2)の改元後の日付であるのに旧年号を使用している場合の板碑について述べる

表2

(1)改元前の日付けであるのに新年号を使用している場合

(9例)

西暦	紀年銘	改元日	所在区
1308	延慶元年一月	10月9日	大田区
1449	宝徳元年正月廿二日	7月28日	杉並区
〃	宝徳元年六月五日	〃	足立区
〃	宝徳元年四月十二日	〃	板橋区
1455	康正元年六月十五日	7月25日	練馬区
1457	長祿元年四月三十日	9月28日	足立区
1492	明応元年四月廿九日	7月19日	練馬区
〃	明応元年五月十八日	〃	板橋区
1528	享祿元年正月四日	8月20日	〃

(2)改元後の日付であるのに旧年号を使用している場合 (47例)

西暦	紀年銘	改元日	所在区
1275	文永十二年六月廿八日	4月25日	台東区
1288	弘安十一年五月廿二日	4月28日	〃
1304	正安六年六月	1302年 12月21日	荒川区
1332	元徳四年三月	1331年 8月9日	墨田区
〃	元徳四年六月	〃	大田区
〃	元徳二年八月	〃	葛飾区
1334	正慶三年四月	1月29日	台東区
1338	建武五年十月	8月28日	板橋区
〃	建武五年十一月	〃	東博蔵も と大田区
1342	暦応五年六月	4月27日	足立区
〃	暦応五年七月	〃	品川区
1350	貞和六年六月	2月27日	練馬区
〃	貞和六年十月十日	〃	大田区
〃	貞和六年十二月	〃	〃
1356	文和五年六月日	3月28日	〃
1361	延文六年六月	3月29日	足立区
〃	延文六年六月十七日	〃	葛飾区
1361	延文六年五月廿五日	3月29日	足立区

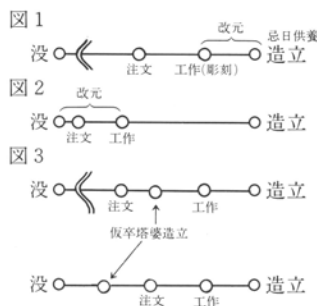
と、表を見てもわかるとおり、2～3カ月の誤差はざらであり、中には改元後2年近くたっても旧年号を使用しているものさえある。千々和到氏が提唱された「造立者が改元後、改元を知る前の短い期間に造立したものである。」という説は、氏が資料として用いた埼玉県の比企・大里・児玉の3郡に在する板碑にはあてはまっても、他の地域の場合においてはあてはまらないといえる。

では、なぜ改元後の日付であるのに旧年号が使用され、そこに年代表示の誤りが生じたのであろうか。また、なぜ埼玉の場合と東京の場合とではその誤差が違ってくるのであろうか。まず、改元後に旧年号を使用した理由として考えられることは、図1で示す様に、被供養者の没時に造立される板碑ではなく、没後の忌日に行なう供養のために造立される板碑の場合、前もって板碑を工作しておくことが可能であり、また、忌日に造立するためには前もって工作しておく必要がある。この場合に板碑に刻まれる紀年銘は、注文(工作を依頼)した時点、または、工作时に通用していた年号を用い、供養が行なわれる予定の日付(忌日)が刻まれる。この場合、板碑の工作から造立までの間に改元がなされたとすれば、当然、改元後の日付であるのに旧年号を使用したことになる。このように考えれば、改元後の日付であるのに旧年号を使用していたとしても不思議ではない。次に考えられることは、改元を知らずに旧年号を使用したり、前もって作っておいたために旧年号を用いた形となった場合は造立者側に何の意図もない言わば不可抗力といえるものであるが、これに反して、造

〃	延文六年八月	〃	葛飾区
〃	延文六年八月	〃	東博蔵 もと北区
〃	延文六年十一月	〃	渋谷区
〃	延文六年十一月	〃	目黒区
1362	康安二年十二月	9月23日	北区
〃	康安二年十一月廿八日	〃	板橋区
1363	康安三年	1362年 9月23日	大田区
1368	貞治七年三月二四日	2月18日	練馬区
1375	応安八年十月	2月27日	板橋区
〃	応安八年三月二九日	〃	品川区
〃	応安八年十一月	〃	台東区
1379	永和五年十月二三日	3月22日	足立区
〃	永和五年五月八日	〃	足立区
〃	永和五年七月十五日	〃	荒川区
1381	永和七年	1379年 3月22日	大田区
1381	康暦三年十二月	2月24日	目黒区
1390	康応二年八月	3月26日	足立区
〃	康応二年九月	〃	大田区
1428	応永卅五年六月十三日	4月28日	〃
1430	正長三年十一月十五日	1429年 9月5日	杉並区
1441	永享十三年四月二日	2月17日	世田谷区
〃	永享十三年七月五日	〃	〃
1450	文安七年八月日	1449年 7月28日	大田区
1457	康正三年十二月十四日	9月28日	葛飾区
1467	文正二年七月吉日	3月5日	北区
1467	応仁三年八月時正	4月28日	練馬区
1489	長享三年十月廿三日	8月21日	葛飾区
〃	長享三年十一月廿五日	〃	世田谷区
〃	長享三年十二月十一日	〃	品川区

(3)改元後一ヶ月以内に新年号を使用している
場合 (17例)

西暦	紀年銘	改元日	所在区
1278	弘安元年四月	2月29日	世田谷区
1293	永仁元年十月二十八日	8月5日	大田区
1293	永仁元年九月十二日	〃	杉並区
1329	元徳元年十月	8月29日	世田谷区
〃	元徳元年十月	〃	練馬区
1368	応安元年四月九日	2月18日	杉並区
1379	康暦元年四月二一日	3月22日	練馬区
1390	明徳元年五月九日	3月26日	板橋区
1428	正長元年五月八日	4月27日	〃
〃	正長元年六月五日	〃	葛飾区
1429	永享元年九月十一日	9月5日	杉並区
1444	文安元年三月五日	2月5日	練馬区
1467	応仁元年三月二十日	3月5日	〃
1293	永仁元年九月十三日	8月5日	杉並区
1390	明徳元年四月十一日	3月26日	大田区
1321	元享元年四月	2月23日	〃
1555	弘治元年十月廿三日	10月23日	東博蔵 もと北区



立者に何らかの意図があり、故意的に旧年号を使用した場合である。例えば、「明治百年」というような形で旧年号が使用されたことも考えられる。これは古文書の例であるが、古河公方(足利成氏)は享徳3年(1454)から文明14年(1482)までの間、康正・長禄・寛正・文正・応仁・文明という6回の改元に従わず、享徳の年号を使用することで幕府に反抗の意を表わしたといわれる。これ(4)に関しては、板碑造立において、故意的に旧年号を使用したことが明らかに証明できる資料がないため、ここでは考え方のひとつとしてあげるにとどめる。

以上のようなことが、改元後の日付であるのに旧年号を使用している場合の理由として考えられるが、では、なぜ埼玉県の場合、千々和到氏が提唱されたように誤差が皆1カ月程と小さいのであろうか。これは、埼玉県の比企・大里・児玉の3郡が板碑の石材である緑泥片岩の産出地に近く、また板碑の工作地(製作地)⁽⁵⁾に近いために、他地域に比べ板碑の造立が容易であったためと

思われる。なぜならば、板碑を造立する場合石材の産出地や工作地から遠い地域では板碑を注文してから造立されるまでの間に、輸送などの問題も含め相当の日数を要するが、産出地や工作地に近い地域に造立する場合はその期間が当然短い。故に、数カ月も前から注文し作らせておく必要がないわけである。そのため、埼玉の比企・大里・児玉の3郡の板碑の誤差が小さいものと考えられる。

次に、(1)改元前の日付であるのに新年号を使用している場合の板碑と、(3)改元後1カ月以内に新年号を使用している場合の板碑について考えてみたい。両者とも年号の遡及使用にあたる。では、なぜ年号を遡及使用し、そこに年代表示の誤りが生じたのであろうか。これについては千々和氏が前述の論文の中で、被供養者の没時(死去の日)が紀年銘となる板碑を例にあげ、この場合板碑の工作及び造立は当然銘文上の日付より後のことになる。被供養者の没後に改元がなされれば、改元後の工作時に通用していた年号を使用し、死去の日付が刻まれる。と説明されているが、私もこの意見に賛成である。確かに被供養者の没時に造立する板碑は、前もって注文することはまずあり得ないので、後日注文し造立したものであることは明白である。図2がこれにあたる。

では、被供養者の忌日に造立される板碑の場合はどうであろうか。これに関しては先に述べたように前もって注文し作らせておくことが可能であり、また、忌日にまにあわせるには前もって注文して作らせておくことが必要である。であるのになぜ忌日までに造立せず、後日造立したのであろうか。表2-13を見てもわかるとおり、改元より約8カ月前の日付の紀年銘さえある。この場合、実際に板碑が工作されたのは8カ月以上も後ということになる。この間、被供養者に対し供養が行なわれなかったことになる。これは板碑を造立するという仏教思想を持つ人々には考えられないことと思われる。そこでひとつ考えられることは、仮卒塔婆の造立である。これは忌日の供養に造立する場合だけではなく、没時に造立する場合にもあてはまることであり、図3で示す様に、被供養者の忌日・没時・またはそれらに近い日に注文し、供養には木製の仮卒塔婆を造立し、板碑(この場合本卒塔婆となる)が完成した後これを造立するのである。この場合、注文と工作の間に改元がなされれば、改元後の新年号を用い、没時又は忌日の日付が刻まれる。このために改元前の日付であるのに新年号を使用するという形があらわれるのではないかと考えられる。しかし、この仮卒塔婆造立説は、その造立を証明する資料がないため、考え方のひとつとしてあげておくが、もしこの考えが許されるならば、年代表示の誤り、つまり、板碑に刻まれた日付と改元後実際に工作し、造立された日との間を無理なく埋めることができると思われる。また、もうひとつ注目できる点として、千々和氏が調べられた埼玉の比企・大里・児玉の3郡の板碑において、改元前の日付であるのに新年号を使用している場合(表1-(3)参照)のその誤差は、いずれも2カ月以内であるのに対し、東京の場合(表2-(3))のそれは、誤差が大きいもので約8カ月程である。やはり、ここでも先ほどの場合と同様に石材の産出地・工作地と造立地との距離的問題が関係しているものと思われる。

3. ま と め

板碑に刻まれた紀年銘の年代表示の誤りについて述べてきたが、これは板碑を造立した中世の人々が、紀年銘に対していいかげんな気持を持っていたために年号の誤使用をしたものでは決してない。では、紀年銘を記すことにはどんな意味があり、板碑の造立者は紀年銘をどのように考えていたのだろうか。先に述べたが、板碑は卒塔婆＝供養塔である。そして、礼拝の対象は仏（種子・画像・名号・題目）であり、被供養者ではない。まして、造立者も主ではない。板碑の碑面に、被供養者や造立者名を記したものがあがるが、これは、願文の一部であり、紀年銘もまた願文の一部である。願文とは、仏に対し誰が、何のために、何を、いつ作ったかを示すもので、梵鐘の鑄造・写経・造仏などにも記されている。板碑の場合も他と同様であるが、記す空間に限りがあるため長い文章は省略され、成仏得道・極楽往生・孝子敬白・某敬白・某死去などのように簡略化され、ついには記されなくなる。しかし、紀年銘はこの中であって、省略されず、碑面の中央や中央の左右に配されている。14世紀から15世紀頃の板碑の多くは弥陀種子(キリーク)と紀年銘のみである。つまり、被供養者や造立者は忘れ去られても、いつ造立したかを記し残すという考え方である。これほど板碑の造立者にとって紀年銘は重要なものであったと考えられる。決していいかげんな気持で紀年銘を刻んでいたのではない。

註

- (1) ここで言う被供養者とは死者を意味する。逆修供養の場合、被供養者＝造立者が、生者となるが、ここでは造立者と区別し、死者を意味する。
- (2) ここで言う造立者とは板碑の工作を依頼し、供養を行なう者である。
- (3) 千々と到氏は、論文の中で、『吾妻鏡』から鎌倉時代において東国の人々が改元を知るのに最低でも10日間を要したことから、多目に見て約1カ月と仮定した。
- (4) 足利成氏(古河公方)の改元に対する反抗については『北関東中心享徳文明の乱年譜』(関東史料研究会出版・富田勝治著)を参考にした。
- (5) 板碑の工作地については、『板碑研究の課題』(千々と実著『日本歴史』291所収)の中で、秩父山地の北麓地域から未完成板碑が発見(11地点で計130基程)されていることから、この付近に工作地を推定した。

研究紀要 2

昭和60年 3月24日発行

編 集 財団 群馬県埋蔵文化財調査事業団
法人 群馬県勢多郡北橘村下箱田784-2
Tel (0279) 52-2511(代)

発 行 群 馬 県 考 古 資 料 普 及 会
群馬県勢多郡北橘村下箱田784-2
Tel (0279) 52-2511(代)

印 刷 朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社